

広石南古墳群A群

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第617集

1999

福岡市教育委員会

広石南古墳群A群

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第617集



広石南古墳群A群第1次調査
HIM-A-1
調査番号 9555

1999

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、それらを保護し子孫に伝えていくことは私どもの義務であります。

しかし近年の都市開発によって、その一部が失われつつあることも事実です。とくに今回の調査地点周辺は古代から福岡平野と西の唐津を結ぶ交通の拠点として重要な地域であったため、最近においても開発が最も多く行われている地区的ひとつであり、都市高速道の建設、宅地造成、大型商業施設の建設などここ数年での大型開発は目を見張るものがあります。

福岡市教育委員会では、このような開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実地し、記録の保存に努めています。

本書は県道周船寺有田線の道路改良工事に伴い、平成8年度に調査した西区広石南古墳群A群の成果を報告するものです。今回の調査によって当地域の歴史を解明する上での貴重な資料を得ることができました。今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方のご理解とご協力を賜りましたことに関しまして、心からの謝意を表します。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

1. 本書は1996年2月14日から1996年9月12日まで調査を行った広石南古墳群A群第1次調査の記録である。
2. 本書で使用した遺構実測図の作成は米倉秀紀、荒巻宏行、中村啓太郎、屋山洋が担当した。
3. 本書で使用した遺物実測図の作成は井上加代子と担当者が行った。
4. 本書で使用した遺構写真の撮影は屋山・中村が行った。
5. 本書で使用した遺物写真の撮影は屋山・中村が行った。
6. 本書で使用した挿図の製図は井上・屋山・中村がおこなった。
7. 本書で用いた方位は真北である。
8. 挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
9. 本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される。
10. 2号墳出土の耳環・刀子の一部と4号墳出土鉄器の実測・製図・写真撮影・考察は福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏の協力を得た。
11. 本書の編集は屋山・中村がおこなった。

遺跡調査番号	9555	遺跡略号	HIM-A-1	分布地図番号	拾六町(104)
調査地地番	西区大字今宿青木1041-1				
開発面積	1,300m ²	調査面積	1,300m ²	調査原因	道路改良
調査期間	1996.02.14~1996.09.12		調査担当	屋山洋・中村啓太郎	

本文目次

1.はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
2.立地と環境	2
1 遺跡の立地	2
2 歴史的環境	2
3.調査の記録	5
1号墳	5
2号墳	16
3号墳	27
4号墳	37
5号墳	63
その他の遺構と遺物	70
終わりに	76

挿図目次

- Fig. 1 周辺古墳分布図 (1/25,000)
Fig. 2 調査区位置図 (1/6,000)
Fig. 3 調査区全体図 (1/300)
Fig. 4 1号墳地山整形測量図 (1/200)
Fig. 5 1号墳墳丘断面図 (1/60)
Fig. 6 1号墳石室実測図 (1/60)
Fig. 7 1号墳石室俯瞰図 (1/60)
Fig. 8 1号墳閉塞部実測図 (1/40)
Fig. 9 1号墳墓道遺物出土状況図 (1/40)
Fig. 10 1号墳墳丘出土遺物実測図 1 (1/4・1/6)
Fig. 11 1号墳墳丘出土遺物実測図 2 (1/6)
Fig. 12 1号墳石室出土遺物実測図 (1/2)
Fig. 13 1号墳墓道出土遺物実測図 (1/4)
Fig. 14 2号墳地山整形測量図 (1/200)
Fig. 15 2号墳墳丘断面図 (1/60)
Fig. 16 2号墳石室実測図 (1/60)
Fig. 17 2号墳石室俯瞰図 (1/60)・閉塞部実測図 (1/60)
Fig. 18 2号墳墳丘遺物出土状況図 (1/40)
Fig. 19 2号墳石室遺物出土状況図 (1/40)
Fig. 20 2号墳墓道遺物出土状況図 (1/40)
Fig. 21 2号墳墳丘出土遺物実測図 (1/4)
Fig. 22 2号墳墳丘出土遺物実測図 (1/6)

- Fig. 23 2号墳石室出土遺物実測図（1/4・1/2）
Fig. 24 2号墳墓道出土遺物実測図（1/4）
Fig. 25 3号墳地山整形測量図（1/200）
Fig. 26 3号墳墳丘断面図（1/60）
Fig. 27 3号墳石室実測図（1/60）
Fig. 28 3号墳石室俯瞰図（1/60）・閉塞部実測図（1/40）
Fig. 29 3号墳石室出土遺物実測図（1/4）
Fig. 30 3号墳墓道出土遺物実測図1（1/4・1/2）
Fig. 31 3号墳墓道出土遺物実測図2（1/4）
Fig. 32 4号墳地山整形測量図（1/200）
Fig. 33 4号墳墳丘断面図（1/60）
Fig. 34 4号墳石室実測図（1/60）
Fig. 35 4号墳石室俯瞰図（1/60）・閉塞部実測図（1/40）
Fig. 36 4号墳墓道出土状況図（1/40）
Fig. 37 4号墳墳丘出土状況図（1/20）・該部遺物出土状況図（1/20）
Fig. 38 4号墳墳丘出土遺物実測図1（1/4・1/6）
Fig. 39 4号墳墓道出土遺物実測図1（1/4）
Fig. 40 4号墳墓道出土遺物実測図2（1/4）
Fig. 41 4号墳墓道出土遺物実測図3（1/6）
Fig. 42 4号墳墳丘出土遺物実測図2（1/6）
Fig. 43 4号墳石室出土遺物実測図1（1/2）
Fig. 44 4号墳石室出土遺物実測図2（1/2）
Fig. 45 4号墳石室出土遺物実測図3（1/2）
Fig. 46 4号墳石室出土遺物実測図4（1/2）
Fig. 47 4号墳石室出土遺物実測図5（1/2）
Fig. 48 4号墳石室出土遺物実測図6（1/2）
Fig. 49 4号墳石室出土遺物実測図7（1/2）
Fig. 50 4号墳石室出土遺物実測図8（1/2）
Fig. 51 4号墳石室出土遺物実測図9（1/2）
Fig. 52 5号墳地山整形測量図（1/200）
Fig. 53 5号墳墳丘断面図（1/60）
Fig. 54 5号墳石室実測図（1/60）
Fig. 55 5号墳閉塞部実測図（1/40）
Fig. 56 5号墳遺物出土状況図（1/40）
Fig. 57 5号墳墳丘出土遺物実測図（1/4・1/6）
Fig. 58 5号墳石室出土遺物実測図（1/4・1/2）
Fig. 59 5号墳墓道出土遺物実測図1（1/4）
Fig. 60 5号墳墓道出土遺物実測図2（1/6・1/4）
Fig. 61 01～03号焼土坑実測図（1/40）
Fig. 62 その他の遺物実測図（1/2・1/4）
Fig. 63 鉤状工具の類例
Fig. 64 圭頭大刀復元想定図

1 はじめに

1 調査に至る経過

平成7年9月19日、土木局道路建設第1課（当時。現、西部建設第2課）より一般県道周船寺有田線道路改築事業に伴い埋蔵文化財の事前審査について埋蔵文化財課に依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では申請地の一部が広石南古墳群A群に含まれることから同年9月21日に踏査を行った。この結果、福岡市文化財分布地図（西部I）に登録される5基と古墳の可能性がある高まり1箇所を確認した。この成果をもとに協議を行ったが、現状での保存は極めて困難であるという結論に達し、記録保存のための発掘調査を平成8年2月より実施することとなった。また1号墳と4号墳の一部が申請地外であったが、この部分のみを残しても今後調査を行える可能性が低いことから地権者である土斐崎種暉氏の承諾をいただきA群全てを調査することとした。ところがこの協議が整った直後の10月5日、福岡県道路公社より土木局外環状道路推進部に切土工事中に古墳にあたったとの連絡が入った。現地で確認すると5号墳の墳丘東側が掘削され天井石の一部が取り除かれた状況であった。このことは複合工事における工事主体者外の関係機関への周知化及び調整について今後の問題を提示した形となった。

調査は平成8年2月13日より開始し9月12日に無事終了した。

2 調査の組織

調査主体

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課長（前）荒巻輝勝（現）柳田純孝

第1係長（前）横山邦継（現）二宮忠司

庶務（前）入江幸男 内野保基（現）河野淳美

調査担当 屋山洋 中村啓太郎

作業員 大坪義典 甲斐正耕 木藤幸三郎 木藤猛美 小森公元 稲所通泰 坂口雄彦

島崎昭二 柴藤祐志 白川直 土井崎道人 竹下弘司 鶴田善治 楠崎耕助

峰不二夫 細川友喜 丸山大輔 山田裕次郎 中尾幸平 新井智美 有吉貞江

池田礼子 石田カネ子 石田テルエ 木トミエ 犬童陽子 大歯あづさ

金子ゆり子 木戸アサノ 木戸カズ子 木戸チヨノ 木藤勝子 小金丸ミネ子

近藤のり子 坂口和子 坂口加代子 佐藤テル子 重竹久仁子 柴田勝子

柴田シズノ 柴田タツ子 柴田常人 柴田ツネ子 柴田トシ 柴田春代

末松タツエ 末松ナミエ 末松美佐子 植宏子 谷吉美 土斐崎初栄 黒早津紀

党ツギノ 德重コマキ 德重忠子 德永千鶴子 友池富美恵 中村栄子 中田トメ子

西尾タツヨ 西田マキエ 間セツ子 波多江喜代子 浜野年代 原幸子 平井和子

深見佳子 堀川ヒロ子 堀田昭 堀ウメ子 堀タケ子 真鍋キミエ 宮原邦江

森友ナカ 八尋恵美 山口初子 古川春美 門司弘子

2 立地と環境

1 遺跡の立地

福岡市西部の早良平野と今宿平野は叶岳から長垂山へと南北に伸びる丘陵によって隔てられている。この丘陵は海岸から南に約1.5km入った現在の西陵高校近辺を分水嶺として、東西両方に大きな谷により開析されており、古くから東西両平野を結ぶ道として使用されていた。古代には海岸線に沿って福岡と唐津方面を結ぶ官道が設けられていたが、その官道もこの谷を通過している様に交通の要所であり、今宿側の谷の入り口である鈴崎遺跡内には第2次大戦末期、糸島方面に上陸した敵軍が福岡方面に進むのを阻止するための陣地なども築造されている。今回調査を行った広石南古墳群A群は今宿側に開いた谷に位置しており、谷に南側から突きでた小尾根の東側斜面上に位置している。

2 歴史的環境

弥生時代 早良・今宿平野とも弥生時代の遺跡が多い。今宿平野では鰐川から今山に延びる砂丘上に前期末の甕棺墓群が分布する。今山遺跡も北部九州で出土する磨製石斧の製作地として著名である。平野中央の舌状台地や丘陵縁辺では中期から後期の大規模な集落が点在しているが、青銅製小銅鋸や西部瀬戸内系の土器、半島系遺物が出土するなど、伊都国の大拠点集落として栄えた様子が窺える。

早良平野では藤崎、有田、飯倉など銅剣を持つ各拠点集落とその上に位置し青銅鏡等の威儀財をもつ吉武高木遺跡との階層差が明確にみられる地域である。また、金武・羽根戸から北側の丘陵裾部には磨製石剣が点在しているが、今回の調査地点でも墳丘盛土中から磨製石剣が出土しており、早良平

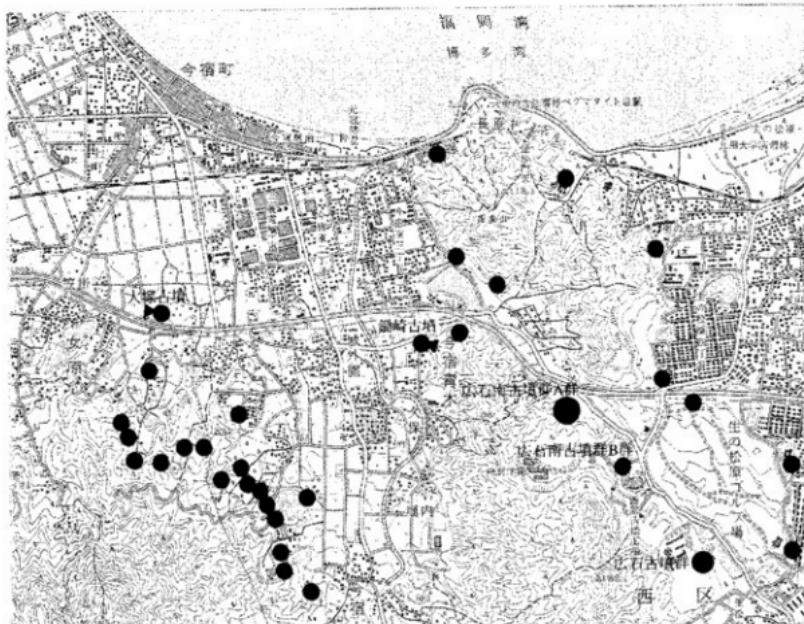


Fig. 1 周辺古墳分布図 (1/25,000)

野との関連が窺える。西新遺跡など海岸部の遺跡では陶質土器や甕など半島系の遺構や遺物が多く出土し、また海岸に面した砂丘では甕棺の倒置など糸島地方以西の特色をもつ墓制もみられる。

古墳時代 これまでも報告されている周辺遺跡の報告書で述べられているが、周辺の丘陵縁辺には多くの群集墳が築造されている。福岡平野側では金武から北側にかけて東側に突き出す丘陵の先端部に多く群集する。また、今宿平野側では平野を取り囲む丘陵の先端に群集墳が築造され、平野に突き出した台地や丘陵上に丸隈山古墳や鋤崎古墳などの首長墓が点在する。これまでこれら両地域の差として、今宿平野では平野南縁全体に首長墓が点在することと、その系列に入らない小型の前方後円墳が存在するにたいし、福岡平野側では首長墓は平野東南から中央部に集中することや、小型の前方後円墳がみられないことが言われてきた。しかし最近の羽根戸古墳群G群の調査によって、早良平野側にも小型の前方後円墳が存在することが判明した。しかし羽根戸古墳群では前方後円墳の可能性を持つ3基のうち1基は4世紀後半の築造と古く、時期的に6世紀を中心とする今宿平野とは違う様相を見せる。

歴史時代 早良平野では丘陵下に8世紀の城の原廢寺や鴻臚館の瓦窯である斜ヶ浦瓦窯址などがある。また海岸に面する生の松原遺跡では斜ヶ浦瓦窯址と同時期の瓦片などを含む整地層があり、古代の集落や官衙などの存在が予想されている。今宿平野では鶴川左岸の舌状台地上で溝で区画される古代末～中世の居館が予想される。また、奈良時代から平安時代中期には大陸からの海賊の襲撃が相次いだか、なかでも大規模な1019年の刀伊の入寇の時には平野内部まで上陸し、迎え撃った日本軍と激戦になったが、今宿育木は激戦地のひとつである。

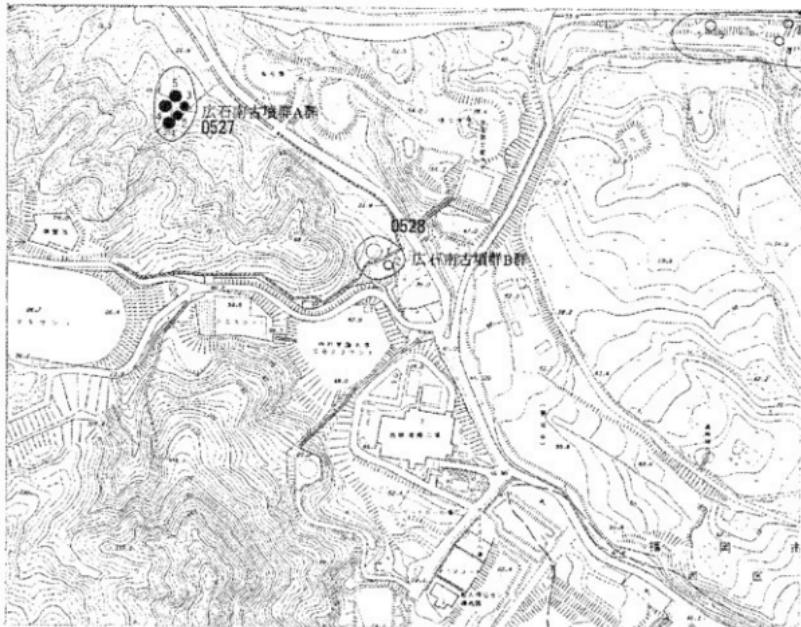


Fig. 2 調査区位置図 (1/6,000)



Fig. 3 調査区全体図 (1/300)

3 調査の記録

1号墳

(1) 位置と現状

本古墳群の南端、標高36~38mの東斜面、本古墳群で最も高所、奥まった地点に位置する。

(2) 墳丘

地山整形

石室は南北方向の等高線に平行に構築される。このため墳丘西側の斜面の掘削と墳丘基底面の整地が行われている。I区墳丘裾には掘削時に転石が露出しているが取り除かれていません。

墳丘

墳丘は良好に遺存する。盛土は西側掘削下端から約2m前後離れた所から開始される。盛土の工程は大きく3段階に分けられる。天井石が架けられるレベルまで比較的細かい盛土を行い、天井石架構後中段に土留の列石と盛土を施し、最後に整形を行う。列石はI・II区で裾部に2列、中段に1列、III・IV区で中段に1列配される。III・IV区裾部では確認されなかった。I区裾部の列石は開口部に向かい枝分かれするように配列される。また中段の奥壁側から右壁側の列石は数段にわたり堅固に組まれる。墳丘の規模は主軸方向が12.9m前後、直交方向が10.2m前後と考えられる。

(3) 埋葬施設

1号墳の埋葬施設は主軸をN-36°-Wにとり、南の谷に向かって開口する単室の両袖型横穴式石室である。羨道部右側から盜掘による擾乱が行われており、この部分と床面の破壊が著しいが他は比較的良好に遺存する。羨道に続く墓道は南に向かい、その後東へ延びたものと思われる。石室を構成する石材は全て花崗岩である。

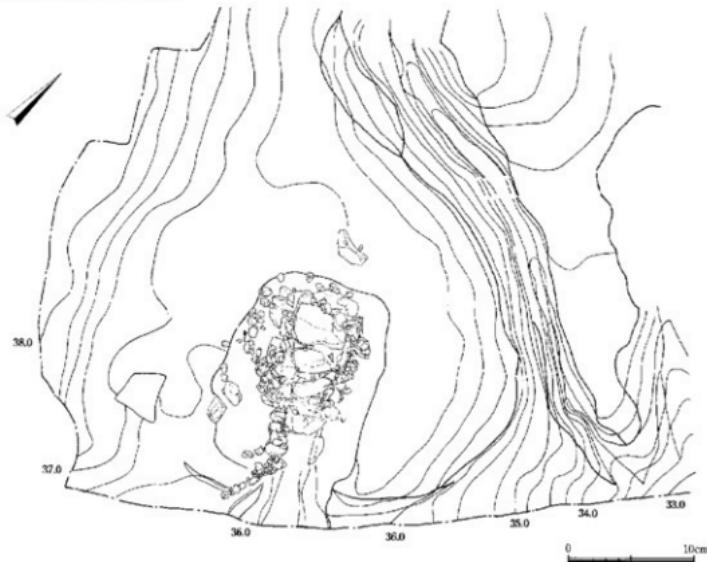


Fig. 4 1号墳地山整形測量図 (1/200)

石室掘り方

基本的には地山整形面から掘削されるが、一部は整地面より行われる。長さ8.6m、幅6.4mを測り、左右両壁及び、奥壁ともに掘り方からやや間を開けて構築される。最終的に腰石を除去できなかつたために完掘していない。

玄室

奥幅2.25m、前幅2.1m、右壁2.7m、左壁2.7m、現状での高さ2.7mを測る。壁体は奥壁は高さ2.5mの巨石を用い、両側壁は幅0.8~0.8m、高さ0.8~1mの石材を各2石、横位に立てて腰石としている。腰石より上方は大ぶりの割石や転石を右壁では斜めに途中まで目路が通るように横積みされ、奥壁側の空いた部分は小ぶりの石材が雑に積まれている。左壁は腰石より上方2段は水平方向に目路が通るように横積みされ、3段目以上はやや雑な積み方となる。玄門部は石材を縦位に立て構成し羨道から玄門を1段と狭くしている。天井は3石使用する。床面は盜掘時に敷石が全て剥がされている。

羨道

羨道は右壁を盜掘で一部破壊される。右壁3.5m、左壁3.8m、奥幅0.95m、開口部1.25m、高さ1.6mを測る。腰石は右壁2石、左壁で4石用いる。腰石より上方は0.5~0.8mの石材をやや雑に積み上げ隙間に小さな石を詰め込んでいる。仕切石は羨道中央に幅0.15m、長さ1.1mの石材を用い、足りない左壁との間に0.3m大の2石を基盤面を掘り下げて据えている。なお玄門部では盜掘のためか検出されなかった。床面に敷石は攪乱のためか存在しない。天井は2石用いる。

墓道

墓道は羨道に連接して直線的に伸びる。本来はこの後下方の東へ屈曲し、2~4号墳の墓道と連結するものと思われるが、現在の流路によって削平されており詳細は不明である。幅2.5~3.5m、長さは現状で2mを測る。

閉塞施設

仕切石の前面に15~50cm大の砾を積み上げ、下方に向かい石は大きくなる。現状で高さ1.7mが遺存する。

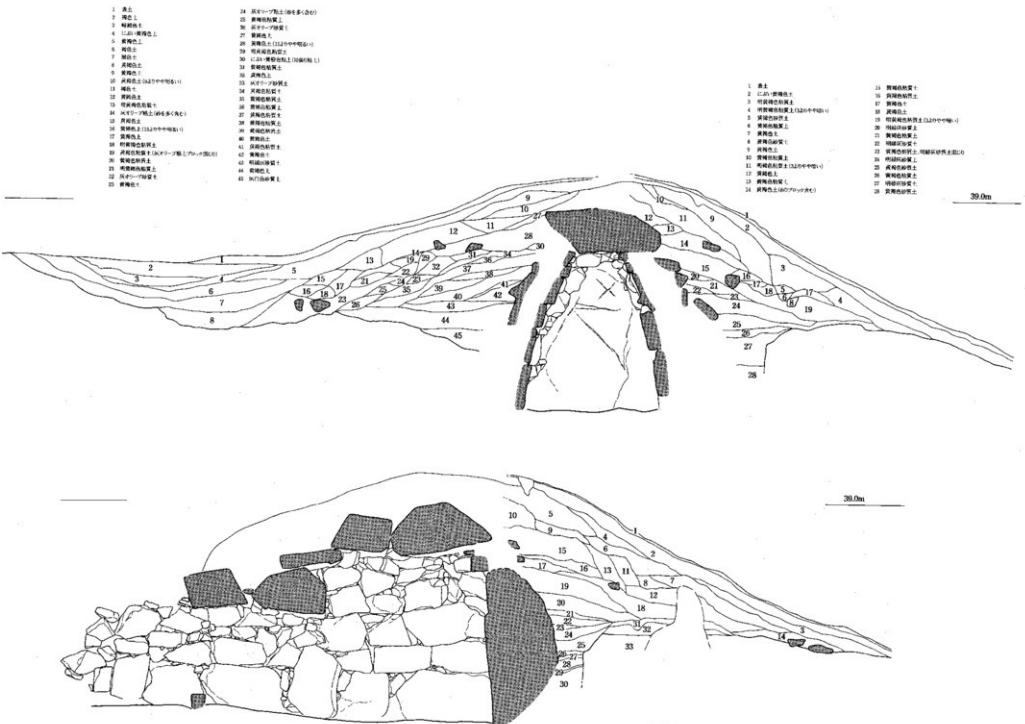


Fig. 5 1号墳埴丘断面図 (1/60)

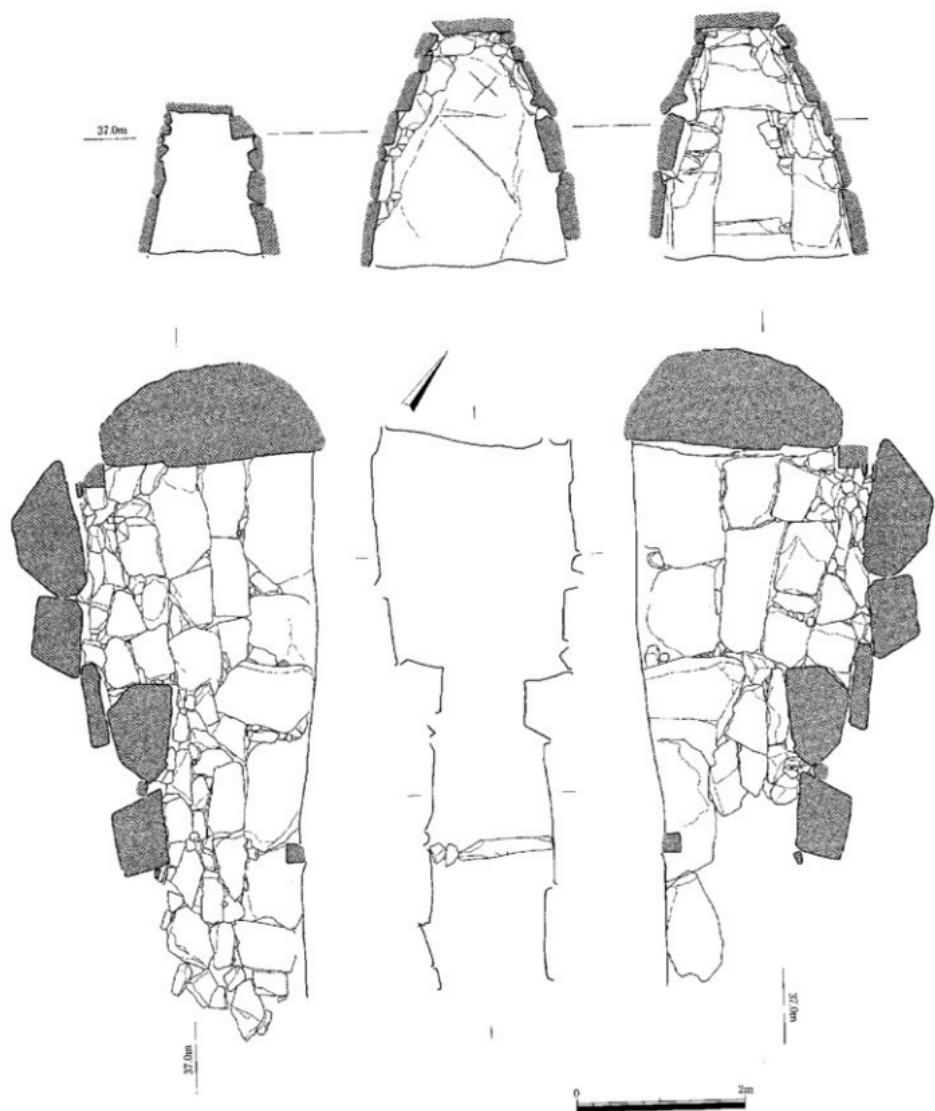


Fig. 6 1号填石室实测图 (1/60)



Fig. 7 1号填石室俯瞰图 (1/60)

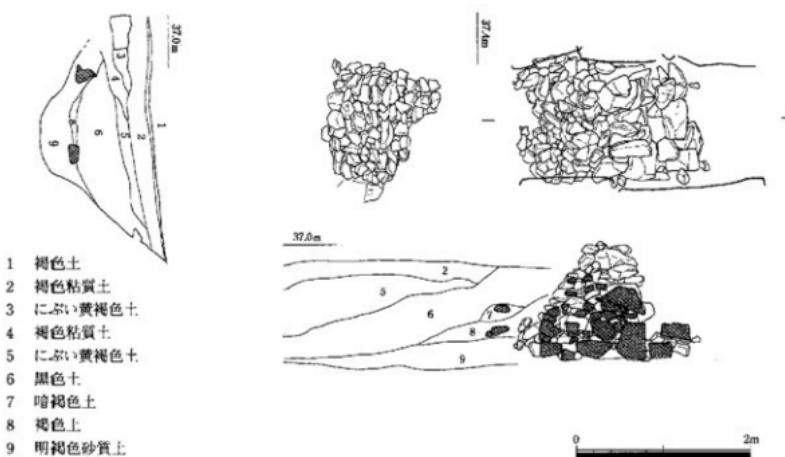


Fig. 8 1号墳内部実測図 (1/40)

(4) 遺物

前述のように1号墳は盜掘を受けており、石室内は遺物も少なく原位置を留めるものではなく、わずかに玉類が4点、刀子が2点出土するのである。大半の遺物は墳丘および墓道からの出土である。
(墳丘及び周溝出土遺物)

001～005は須恵器壺蓋である。口径12.2cm～13.2cm、器高3.2cm～4.3cmを測る。天井部外面はヘラケズリ、内面はヨコナデ後不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。002には天井内面に指頭による押圧痕が残る。005以外はヘラ記号を天井外面に付す。006～008は須恵器杯身である。口径10.8cm～11.6cm、器高3.5cm～4.6cmを測る。底部外面はヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。全てヘラ記号を底部外面に付す。009～010は高杯である。009は口径11.2cm、器高12.3cmを測る。調整は体部と底部の境に凹線を巡らせ、底部外面はカキメ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。脚部も内外ともにヨコナデを施す。012～013は壺である。012は肩の張った胴部に短い口縁部を有す。口径8.2cm、器高9.7cmを測る。調整は底部外面はヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、胴部上位はカキメ、他はヨコナデを施す。ヘラ記号を肩部に付す。013は球形の胴部をなす。調整は胴部下位がヘラケズリ、胴部上位はカキメ、他はヨコナデを施す。底部に2ヶ所、同一のヘラ記号を付す。011は平瓶である。肩の張った扁平の胴部に外反する頸部を有す。口径9.1cm、器高13.0cmを測る。調整は口頸部はヨコナデ、胴部上位はカキメ、下位はヨコナデ、底部未調整。内面はナデを施す。014～015は須恵器甕である。014は外反する頸部に卵形の胴部をなす。口径20.0cmを測る。調整は口頸部がヨコナデ、胴部外面は平行タタキ、内面は同心円文の當て具痕が残る。015は丸い胴部に外反する頸部をなす。口径43.4cmを測る。調整は口頸部外面に斜行列点文を2段に配し、それぞれを凹線で区分する。内面はヨコナデ。胴部外面は平行タタキ、内面は同心円文の當て具痕が残る。

(石室内出土遺物)

016～019は小玉及び丸玉である。016・017は径0.4～0.6cm、高さ0.3～0.5cmを測る。018・019は僅

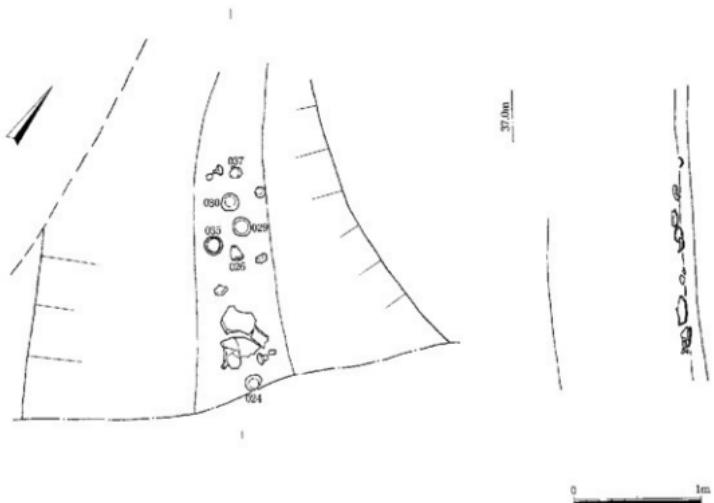


Fig. 9 1号墳墓道遺物出土状況図 (1/40)

0.8~1.1cm、高さ0.7~1.0cmを測る。いずれもガラス製で色調はコバルトブルーを呈す。020~021は管玉である。碧玉製で径1.0cm~1.1cm、長さ2.0cm~3.6cmを測る。穿孔は片側から行われている。色調はライトブルーを呈す。022~023は刀子である。023は完形で長さ12.7cmを測る。以上の遺物はすべて玄室覆土中からの出土で原位置を留めるものはない。

(墓道出土遺物)

墓道出土遺物はFig.9で出土状況を示したもの以外は流入土中からの出土であり墳丘のものを含んでいる可能性がある。024~028は須恵器坏蓋である。口径12.0cm~13.0cm、器高3.5cm~4.2cmを測る。天井部外面はヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。028以外はヘラ記号を天井外面に付す。029~032は須恵器坏身である。口径9.8cm~11.6cm、器高3.4cm~3.9cmを測る。底部外面はヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。032は底部外面は未調整。032以外はヘラ記号を底部外面に付す。036~038は高坏である。036は口径12.2cmを測る。調整は底部外面はカキメ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。037は口径12.0cm、器高14.2cmを測る。調整は杯部が内外ともにヨコナデを施し、底部近くに凹線が巡る。脚部は内外ともにヨコナデを施し、外面中位に2条の凹線を巡らせ、内面には絞り痕が残る。038は口径9.0cm、器高8.6cmを測る。調整は坏部、脚部とともにヨコナデを施し、ともに中段にカキメを施す。041~042は壺である。調整は041は胴部上位はカキメ、他はヨコナデを施す。042は肩部がヨコナデ、最大径付近に列点文を配し、下位はヘラケズリ。内面はヨコナデを施す。039~040は壇である。039は口径11.2cmを測る。調整は内外面ともにヨコナデを施し、口縁屈曲部に凹線が巡る。043は土師器の高坏である。口径12.2cm、器高9.7cmを測る。調整は坏部は内外ともミガキを施し、脚部は筒部がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。

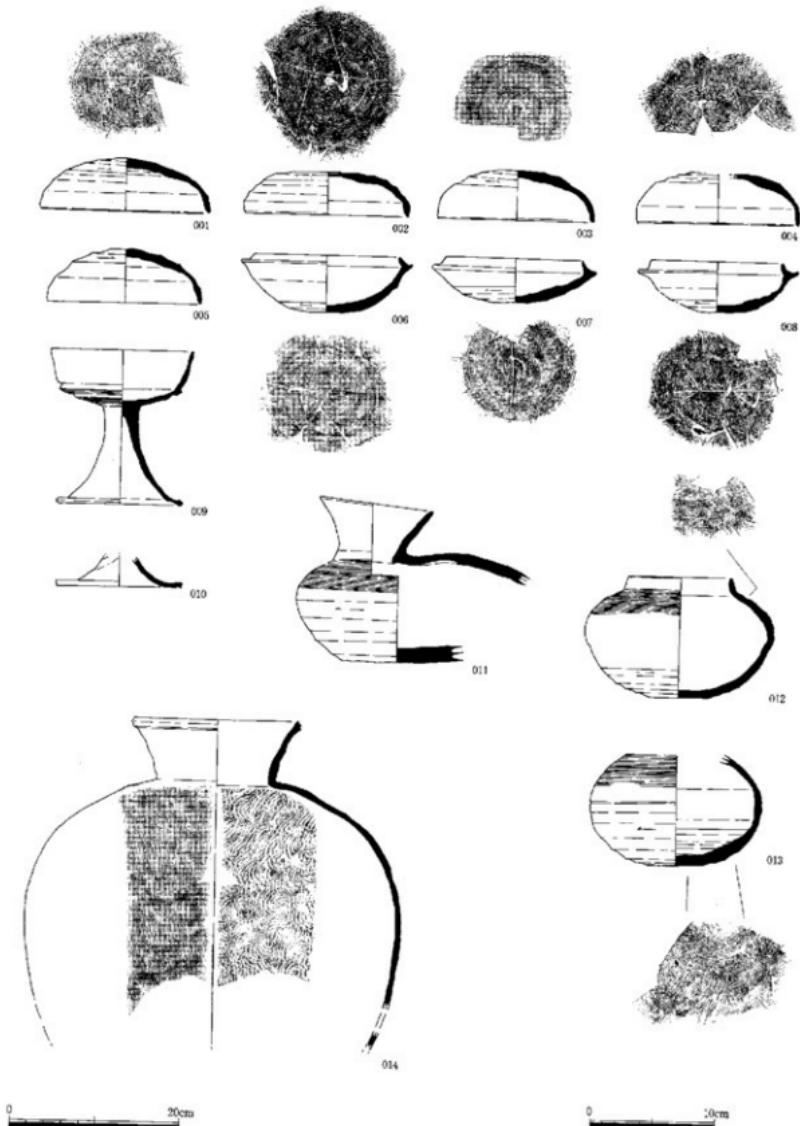


Fig. 10 1号墳墳丘出土遺物実測図 (1/4・1/6)

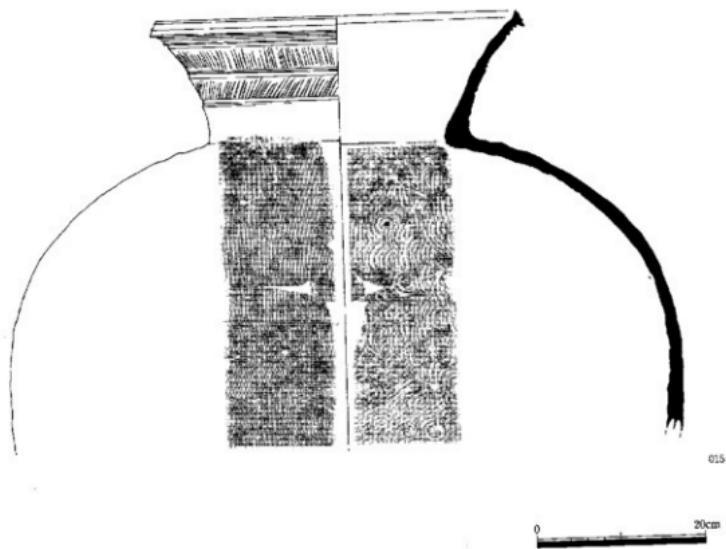


Fig. 11 1号墳墳丘出土遺物実測図 2 (1/6)

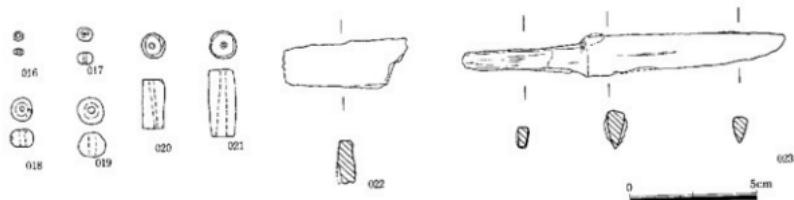


Fig. 12 1号墳石室出土遺物実測図 (1/2)

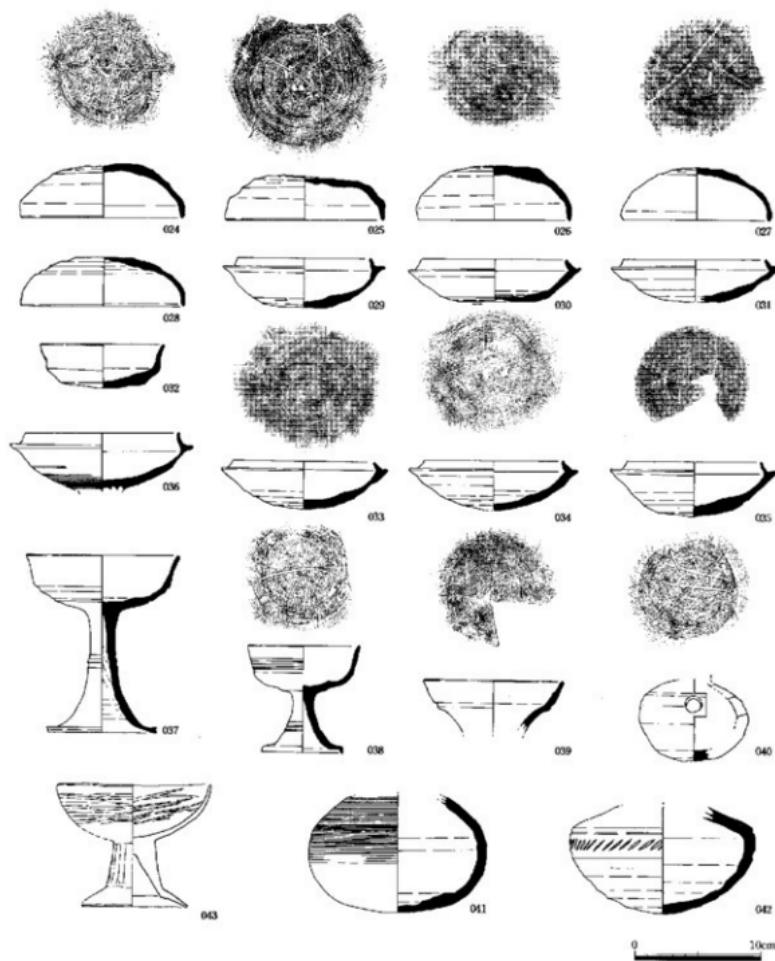


Fig. 13 1号墳墓出土遺物実測図 (1/4)

2号墳

(1) 位置と現状

1号、4号墳の東下方、標高34~35mの丘陵東斜面に位置する。

(2) 墳丘

地山整形

石室は南北方向の等高線に平行に構築される。このため墳丘西側の斜面の掘削と墳丘基底面の整地が行われている。西側斜面には4号墳の墓道が通るためどの位置より掘削したかは判らない。

墳丘

墳丘はI・II区が若干削平されるが、比較的良好に遺存する。盛土は整形面から行われており、I・II区は4号墳墓道の脇から積み上げている。天井石が架かるレベルまでの盛土を行い、中段に土留の列石を施し、天井石架構後、最後に整形を行う。III・IV区（斜面下方）は比較的に細かく盛土される。列石はIII・IV区の中段に1列のみ配列され、墳権には存在しない。

(3) 埋葬施設

2号墳の埋葬施設は主軸をN-48°-Wにとり、南の谷に向かって開口する単室の両袖型横穴式石室である。墓道は南に向かい、その後東へ伸びたものと思われる。石室を構成する石材は全て花崗岩である。釘の出土から木棺の存在したものと考えられる。

石室掘り方

基本的には地山整形面からやや緩やかに掘削される。長さ6.8m、幅4.3mを測り、左右両壁及び、奥壁ともに掘り方からやや間を開けて構築される。最終的に腰石を除去できなかったために完掘していない。

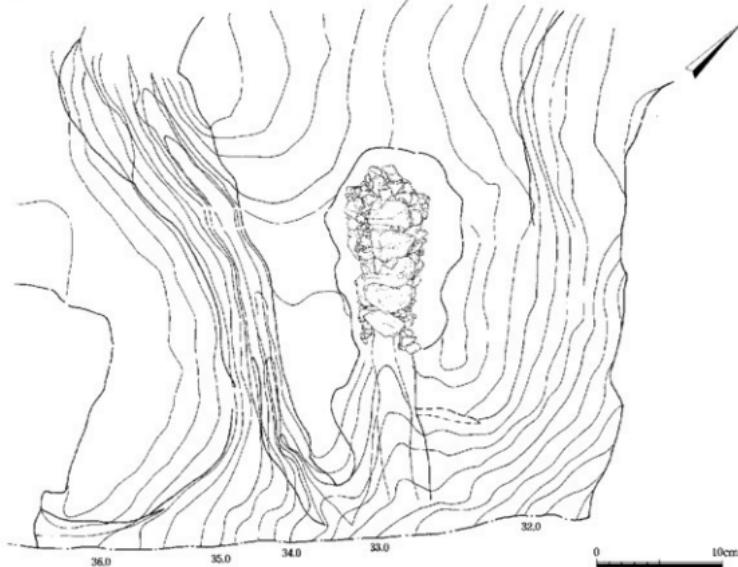


Fig. 14 2号墳地山整形測量図 (1/200)

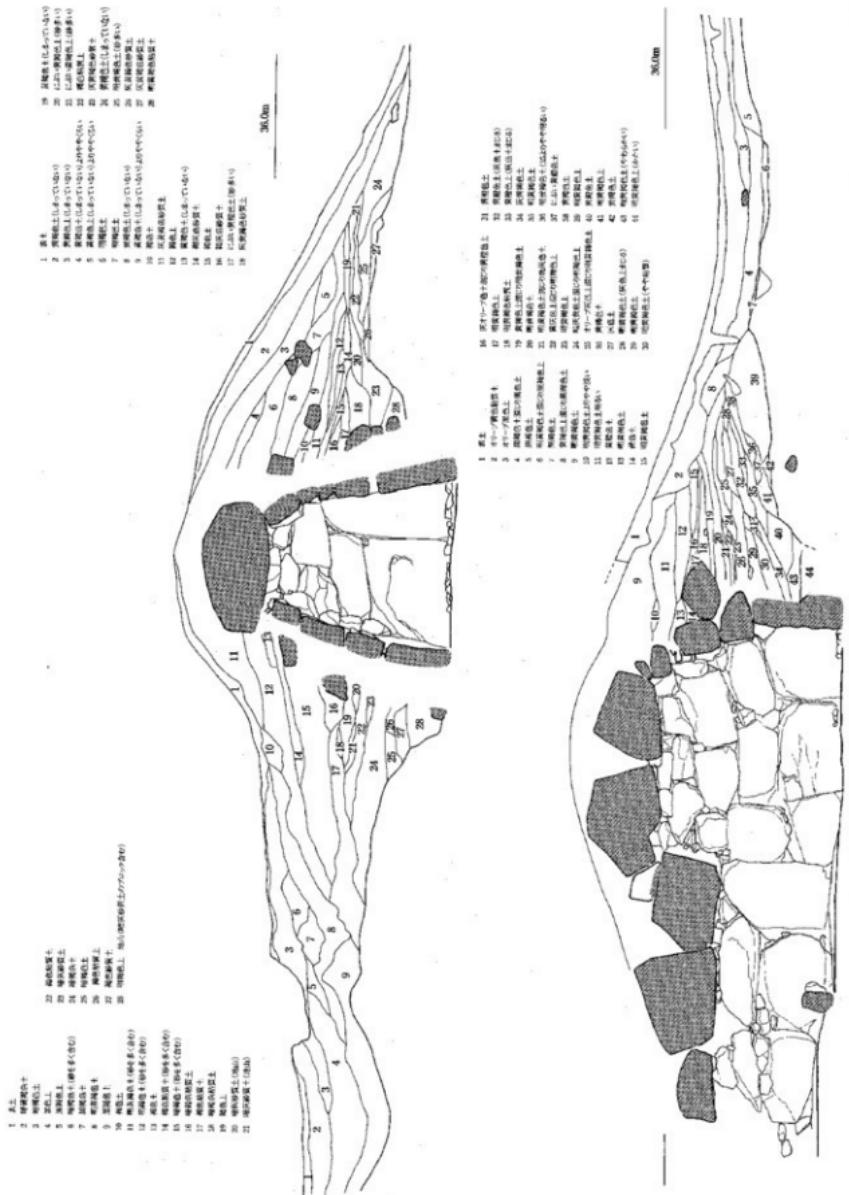


Fig. 15 2号墳埴丘断面図(1/60)

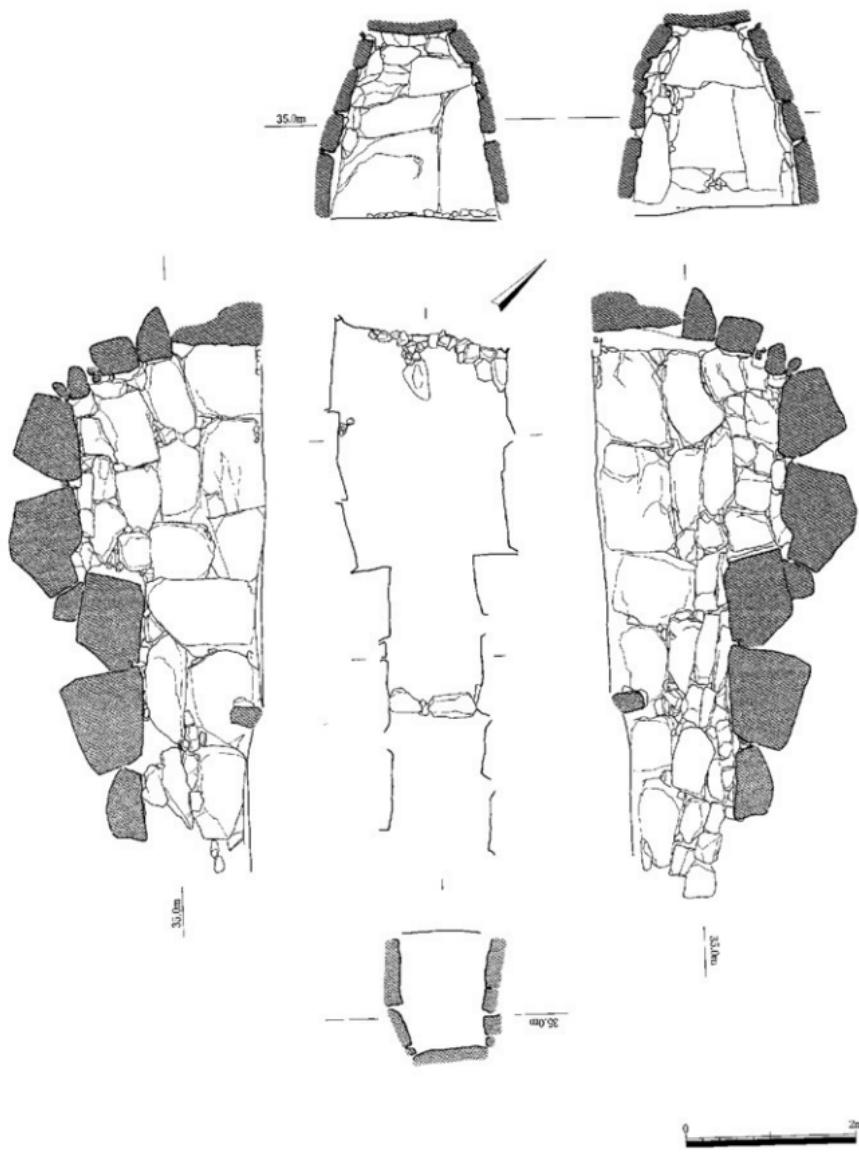


Fig. 16 2号墳石室剖図(1/60)

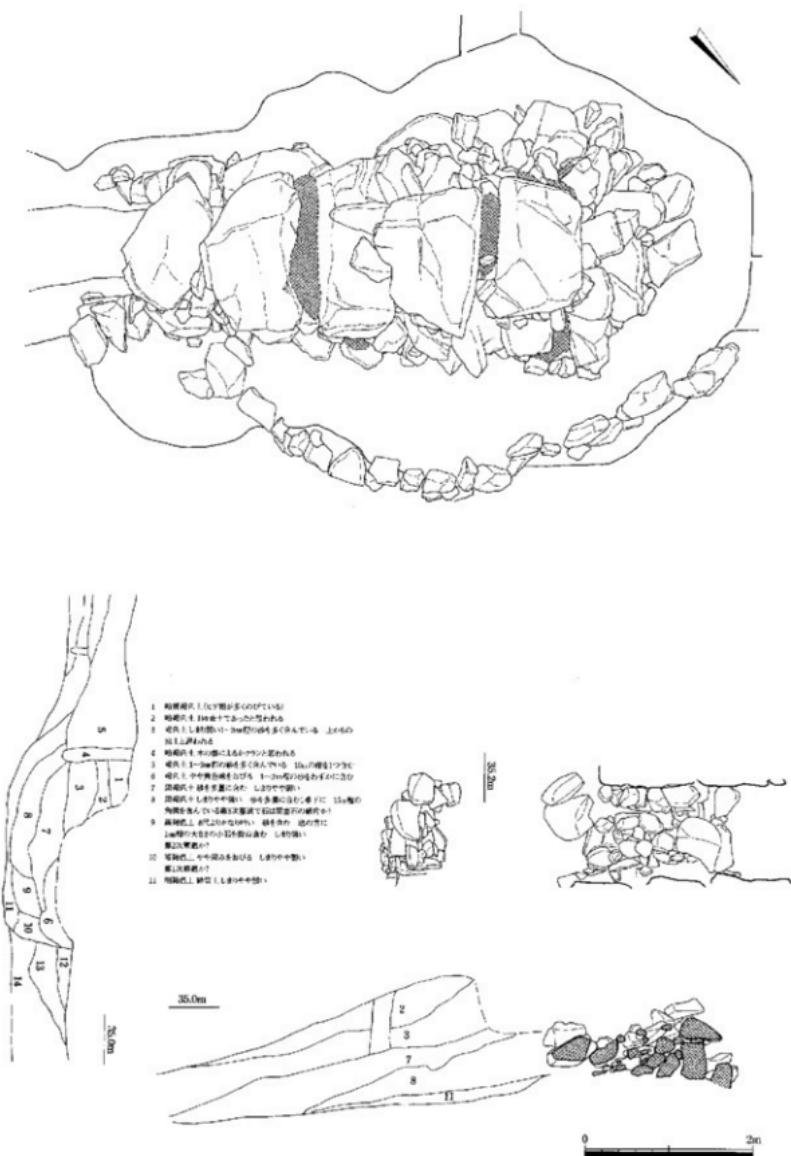


Fig. 17 2号墳石室略図 (1/60)・閉塞部実測図 (1/60)

玄室

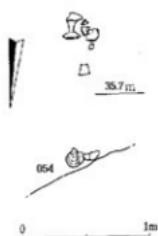


Fig. 18 2号墳墳丘遺物
出土状況図 (1/40)

奥幅 2.1m、前幅 1.9m、右壁 2.4m、左壁 2.9m を測る。壁体は奥壁は高さ1m、幅1.1mの石材を横位に、高さ1.5m、幅0.6mの石材を縦位に立て、両側壁は幅0.8~1.2m、高さ0.8m程度の石材を右壁2石、左壁3石横位に立てて腰石としている。腰石より上方は大ぶりの割石や転石を、右壁では横積みされ、羨道部との境は小ぶりな石材使用する。上方はやや小ぶりの石を使用する。左壁は腰石より上方2段は水平方向に目路が通るように横積みされ、3段目以上は小ぶりな石材がやや雜に積まれる。玄門部は石材を縦位に立て構成している。天井は2石使用する。床面は盃擣時に敷石がほとんど剥がされ、奥壁側にわずかに遺存するのみである。

羨道

羨道は良好に遺存する。右壁3.5m、左壁3.1m、奥幅1.0m、開口部1.2m、高1.4mを測る。腰石は右壁3石、左壁で2石用いる。腰石より上方は右壁では0.5~0.8m程度の石材を斜めに横積みし、隙間に小さな石を詰め込んでいる。左壁は1~1.3mの石材を2石横積みし、左右で積み方が異なる。樋石は羨道中央に3石を基盤面をやや掘り下げて据えている。なお玄門部では検出されなかった。床面に敷石は搅乱のためか存在しない。天井は3石用いる。

墓道

墓道は羨道に連接して直線的に延びる。本来はこの後下方の東へ屈曲するものと思われるが、1号墳と同様に現在の流路によって削平されており詳細は不明である。

閉塞施設

仕切石の前面に扁平な板石を立て、その上に大型の石を据え、前面に20~40cmの石材を積み上げている。現状で高さ0.9mが遺存する。

(4) 遺物

出土遺物は1号墳同様原位置を保つものはあまりない。墳丘出土の須恵器に較べ、石室内出土のものは、時期が新しく初莽時のものがほとんど見られない。また石室内からは土器類の他、耳環が4点（うち1点は閉塞石中）、小玉2点、刀子、鉄簇、釘などが出土している。

(墳丘及び周溝出土遺物)

044~048は須恵器壺蓋である。口径11.2cm~13.6cm、器高3.6cm~4.7cmを測る。天井部外面はヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。046~048はヘラ記号を天井外面に付す。049~053は須恵器壺身である。口径10.8cm~11.8cm、器高3.3cm~4.3cmを測る。調整は底部外面はヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。049以外はヘラ記号を底部外面に付す。054~055は須恵器高壺である。054は口径12.2cm、器高17.4cmを測る。調整は底部外面はカキメ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。脚部外面はヨコナデを施し、中位に円線が2条巡る。内面は絞り痕が残り、裾部はヨコナデを施す。055は口径13.6cmを測る。長脚で2段透かしが3方に穿たれる。上段の透かしは貫通しない。調整は底部外面がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。一部に自然袖がかかる。056~057は台付壺である。056は胴部最大径19.0cm、裾径11.8cmを測る。外面は胴部上位に3条の円線を巡らせ、下位から脚部にかけてカキメを施す。内面はヨコナデを施す。凹線下にヘラ記号を付す。057は裾径14.0cmを測る。裾部で屈曲し、凹線を巡らす。内外面ともにヨコナデを施す。058は平瓶である。胴部最大径21.0cmを測る。調整は胴部の大半をカキメ、下位はヨコナデ、底部未調整。

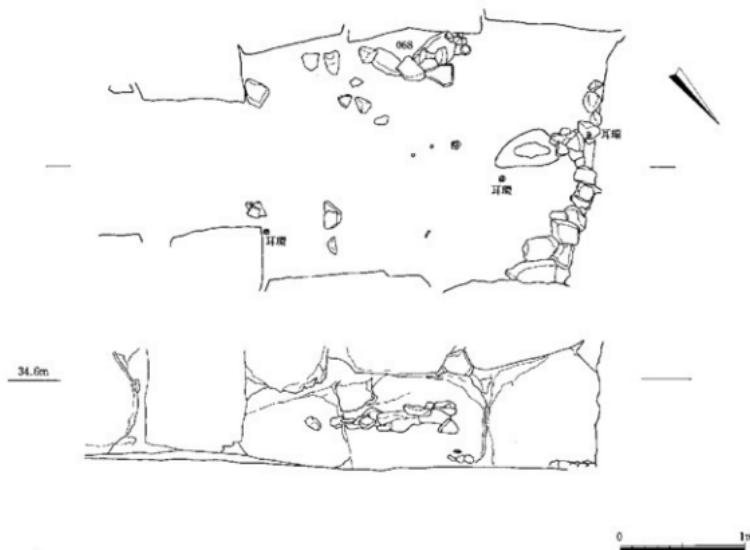


Fig. 19 2号墳石室遺物出土状況図 (1/40)

内面はナデを施す。肩部にヘラ記号を付す。061～063は須恵器壺である。061は口径38.4cmを測る。調整は口頭部外面が斜行列点文を2段に配し、内面はヨコナデ。胴部外面は平行タキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。062は口径30.8cmを測る。調整は口頭部外面がヨコナデ後、ヘラ描きによる山形文を配し、内面はヨコナデ。肩部外面は格子状タキの後、カキメを施す。内面は同心円文の当て具痕が残る。063は口径31.2cm、器高44.4cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ。胴部外面は平行タキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。059～060は土師器高壺である。059は口径14.6cm、器高9.7cmを測る。調整は全体に器面が荒れるが、壺部がヘラミガキ、脚部は筒部がヘラケズリ、裾部がヨコナデを施す。

(石室内出土遺物)

064～067は須恵器壺蓋である。口径7.5cm～12.5cm、器高2.1cm～4.0cmを測る。064～066はかえりを有し、065・066は天井につまみを付す。天井部外面はヘラケズリ、他はヨコナデを施す。068は須恵器高壺である。脚部の歪みが大きい。口径11.6cm、器高16.1cmを測る。調整は杯底部がカキメ、屈曲部に刻目を施す。他はヨコナデ。脚部は中位に2条の凹線を巡らせ、他はヨコナデを施す。外表面ともに絞り痕が残る。また脚部にはヘラ記号が付される。069～070は壺である。069は最大径が上位にある。胴部に高台を付す。最大径より上に穿孔される。頸部は比較的に短く口縁部で屈曲し明確に区別される。胴部最大径19.4cm、高台径13.4cmを測る。調整は内外ともにヨコナデを施し、底部は未調整。070は口径10.0cm、器高13.8cmを測る。小ぶりの胴部に高台を付す。口頭部は緩やかに開く。調整は口縁部に2段と胴部最大径付近に列点文を施し、それぞれ上下は凹線で区画される。他はヨコナデ。071は壺である。072は平瓶である。073～076は耳環である。073と074は、鏑に覆われていたり表

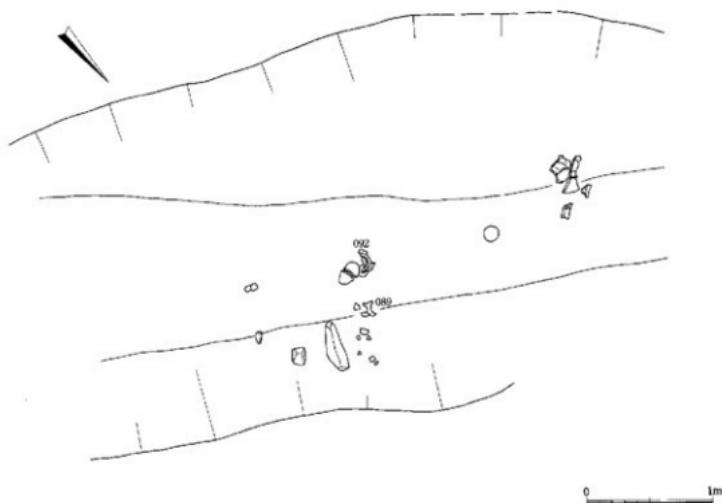


Fig. 20 2号墳墓道遺物出土状況図 (1/40)

面の剥落が見られるが、残りの良い部分を見ると、艶の無い白銀色あるいは白金色を呈している。これに対して75と76は被せてある金属板が地面と接していた部分で腐蝕し破れているもの、残った部分は非常に艶のあるやや赤みを帯びた金色を呈している。それぞれの構造であるが、近年の各種分析装置の文化財分野への援用によって、単純に見た目の色で「金環」、「銀環」というように単純な表現では取まらないことが判ってきている。しかしそのような分析装置が身近にない現時点では肉眼観察に頼る以外なく、ここに記す内容も推測の域をでないものである。今後分析装置が導入され、改めて多角的な分析が行われることで、構造解明が成されることを期待したい。現状ではその色調より、前者は中実の銅芯に銀の薄板を被せ鍍金を施した構造と思われる。後者は中実の銅芯に金属の薄板を被せているが、こちらは部分的な変色や色落ちが無く、均一な色調であることから、鍍金ではなく、更に腐蝕が見られることや顔が写り込むほどの艶があることなどから金を含む合金を被せたものと考えたい。077～078は小玉である。いずれもガラス製で、色調はコバルトブルーを呈す。079～081は刀子である。082～083は鉄鎌である。084は鉄釘である。長さ4.2cm、太さは中央部で5mmを測る。頭部が叩き潰されたように広がっているが細かい形状は鎌のため不明である。この頭部の裏側や脚のうちの2面には脚と直交する木目が観察できる。下端に破断面はみられず、これで本来の長さであった可能性が高い。古墳時代の棺釘としては小型である。

(墓道出土遺物)

墓道出土遺物はFig.20で出土状況を示したもの以外は流入土中からの出土であり2号墳墳丘のもの及び1号墳墳丘遺物を含んでいる可能性がある。085は須恵器壺蓋である。口径12.6cm、器高4.5cmを測る。天井につまみを付す。調整は天井部外表面はヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。086～088は須恵器杯身である。口径10.0cm～13.6cm、器高3.1cm～5.0cmを測る。調整は底部外表面はヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。089～090は須恵器高坏である。

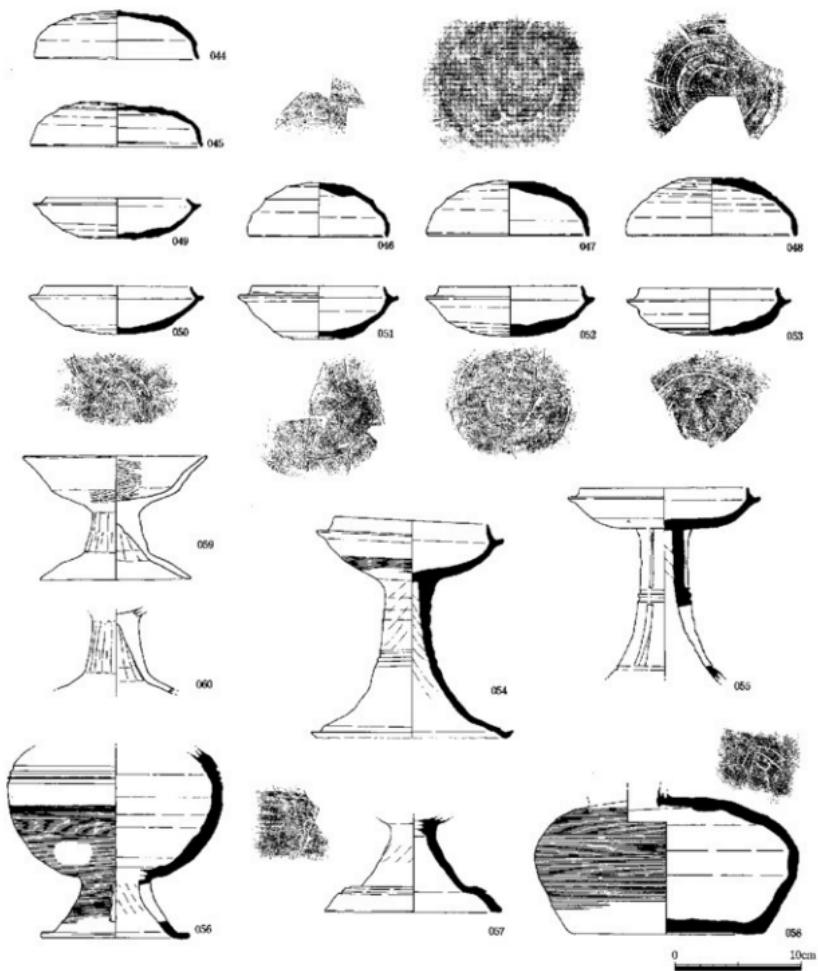


Fig. 21 2号墳墳丘出土遺物実測図 (1/4)

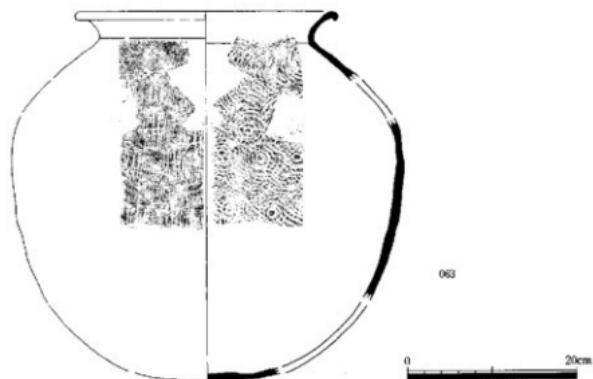
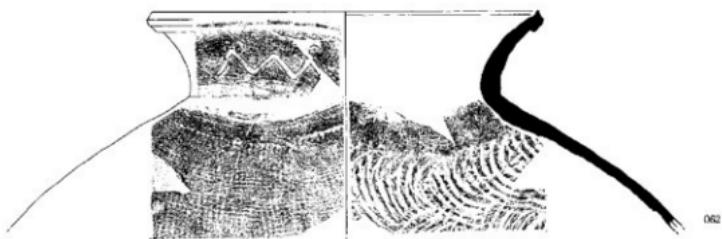
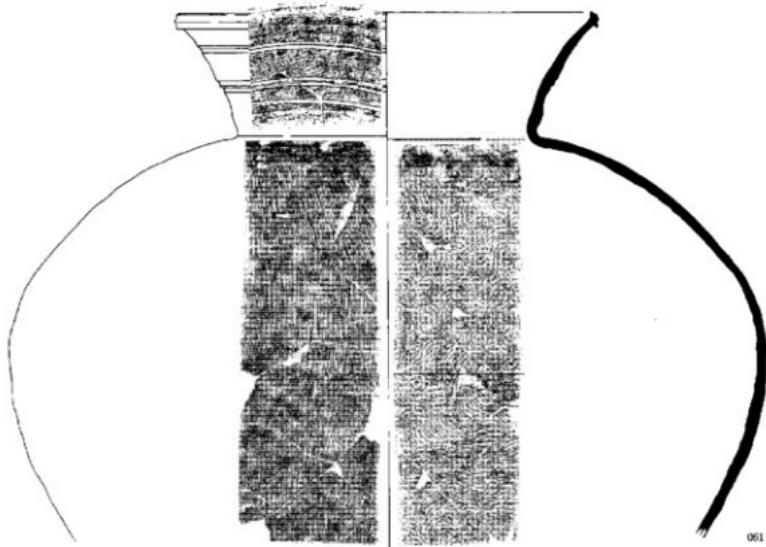


Fig. 22 2号墳墳丘出土遺物実測図 (1/6)

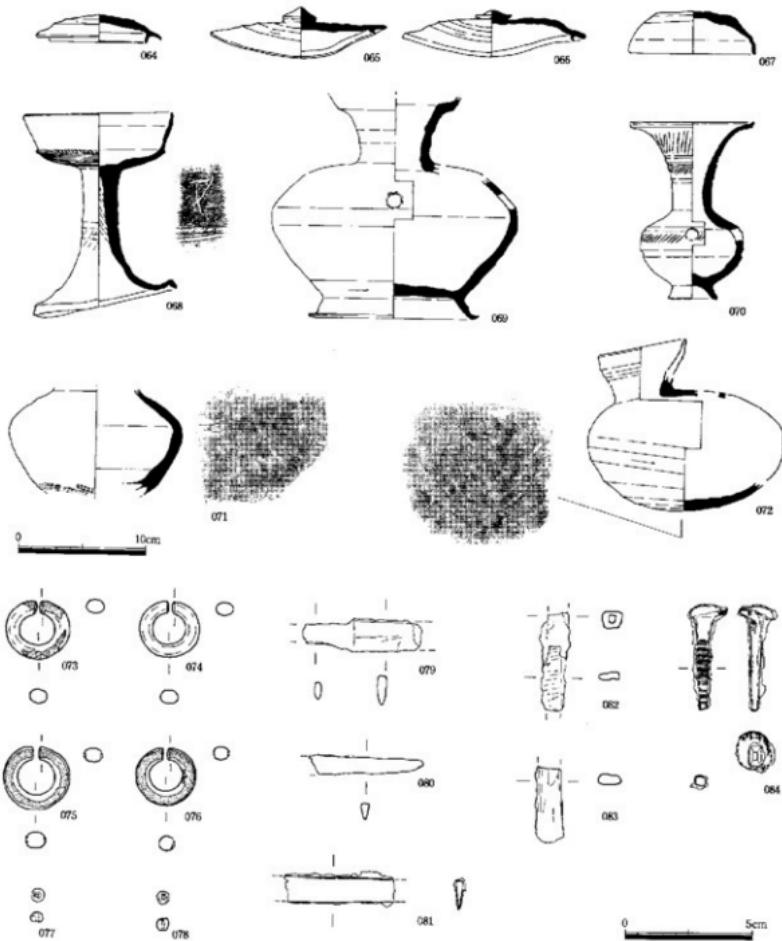


Fig. 23 2号墳石室出土遺物実測図 (1/4・1/2)

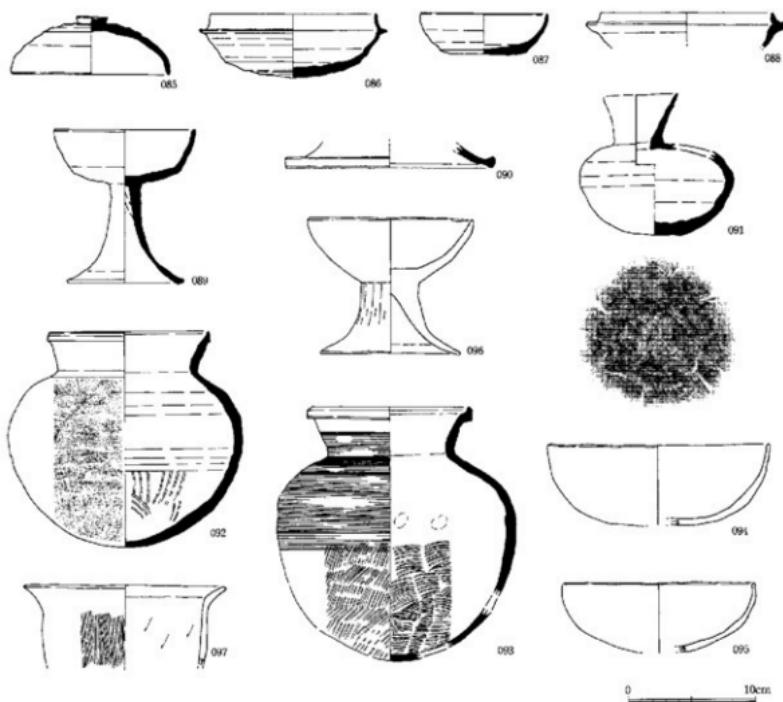


Fig. 24 2号墳墓道出土遺物実測図 (1/4)

089は口径11.2cm、器高12.0cmを測る。調整は杯部及び脚部ともにヨコナデを施す。脚部の内面には紋り痕が残る。091は平瓶である。底部にヘラ記号を付す。092～093は須恵器の小型の甕である。092は口径12.6cm、器高17.2cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面がタタキ後カキメ、内面は当具痕が下位に残り、上位はナデ消す。093は口径12.7cm、器高20.2cmを測る。調整は口縁部がカキメ、胴部外面がタタキ後上位はカキメを施す。内面は当具痕が下位に残り、上位はナデ消す。094～095は土師器の碗である。復元口径15.4cm～17.6cmを測る。いずれも器壁が荒れて調整は不明。096は土師器の高坏である。口径13.0cm、器高10.7cmを測る。器壁が荒れるが、坏部はヨコナデか。脚部は筒部がケズリで裾部がナデを施す。097は土師器の甕である。復元口径16.0cmを測る。厚手の口縁を成し胴部は張らない。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面は縱方向のハケメ、内面は下方へのケズリを施す。

3号墳

(1) 位置と現状

3号墳は北へ延びる丘陵の東側斜面に入り込む深い谷の斜面裾に位置する。南西側で2号墳と、また北西側では5号墳と接する。近年に東側を造成して平坦面を作り、その際に墳丘の東側半分と墓道の一部を除いて削平している。石室石組みの遺存状況は良好である。石室は緩斜面上の等高線に対し平行に構築しており、開口方向は他の古墳と同じく南側である。現存の5基の中では5号墳と並んで低い場所に位置する。石室基底面の標高は31.5mである。

(2) 墳丘

地山成形

墳丘西側の斜面上方に三日月状を呈す切削面を開削し、狭い平坦面を作り出して盛土をするための基盤としている。溝状にはならない。開削面の南側は2号墳の墳丘間際まで削っているが切り合は認められない。北側では5号墳地山成形時の開削面とつながる。

墳丘

東側は削平をうけており墳端は不明である。南西側の斜面上側も僅かに削られており、現状の墳形は開口部が尖った卵形をなす。現状で地山から2m程度の盛土がみられる。墳丘規模は主軸方向に11m、直行方向は推定で8m前後を測る。

盛土 墳丘は前述した地山成形による平坦面を基盤面として築造している。石室上方の墳丘基底面からの盛土の高さは現状で200cmを測る。盛土は石室構築の前後で2工程に分けることができる。まず^ギ1工程目は地山整形後に厚さ25~35cmの単位で盛土を行って平坦面を作り出し、その面から石室の

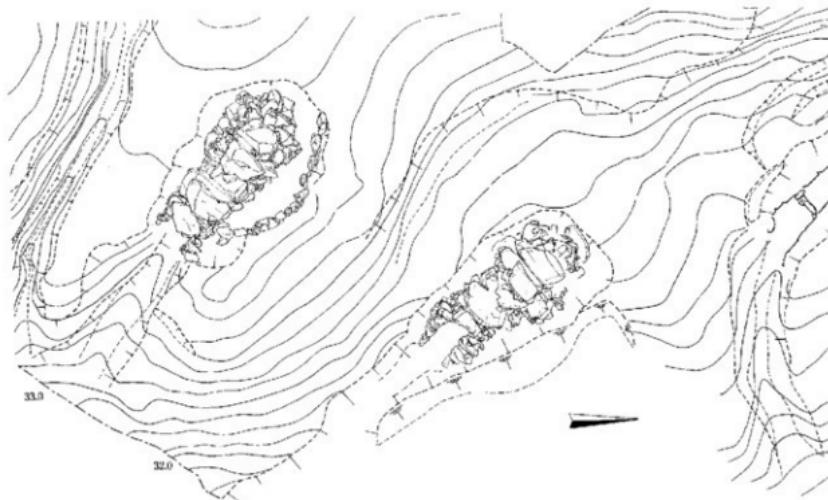


Fig. 25 3号墳地山整形測量図 (1/200)

掘削までである。掘り方は石室上方は垂直に掘り込んでいる。下方は削平のため不明であるが、4号墳同様石材運び込み用のスロープをつけていた可能性がある。2工程は石を積みながら掘り方上面まで水平に裏込めを行ない、その後は壁石の積み方にあわせて厚さ10~15cmの単位で版築を行っている。天井部の盛土や化粧土は流失しており、現在は天井石の上には40cmほどの盛土しが残存していない。地山成形時後、または盛土中の祭祀痕跡は確認できなかった。

(3) 埋葬施設

3号墳の埋葬主体は、主軸をN-38°-Wに据る单室の片袖型横穴式石室で、南東方向に開口する。石室石組みの遺存状況は良好である。斜面上方に開削し狭い平坦面を造った後、盛土で平坦面を整え、そこから石室掘り方を掘り込んでいる。羨道前面には墓道が連結する。羨道部側面や閉塞石の遺存状況も良好である。

石室掘り方

石室掘り方は等高線にはほぼ平行である。段状に造成した平坦面からさらに一段二等辺三角形に掘り下げている。掘り方は石室主軸方向で7.6m、直行方向で4.4mを測る。掘り込みの深さは約1.7mを測り、天井石までの高さの約2/3の深さである。

玄室

奥壁幅210cm、袖部幅158cm、右側壁長681cm、左側壁長688cmを測る。平面プランは長方形を呈す。石室の積み石は比較的目地が通る。腰石は高さ80~130cm程度の大石を使用している。2段目には100cm×60cm程度の石を置き、腰石の大きさのずれを調整している。その上は50×30cm程度の小さな石を段の高さを調整しながら積んでいるのがわかる。玄室の床面は盜掘のために掘り返されており、埋葬当時の敷石や遺物は残存していない。羨道との間を区切る第2仕切石は断面が三角形を呈す。殆ど掘り込みがなく、わずかな塗みに置いてあるだけである。

羨道・墓道

羨道部の側壁は第1仕切石までは石室の腰石同様高さ1m程度の石を使用している。第1仕切石より外は50cm×40cm前後の角石を使用する。このとき右側側壁は段毎に高さを揃えているが、左側側壁は不揃いである。羨門には構築した天井石が遺存する。床面は荒らされてはいないものの、当時の状況を残す遺物は出土していない。第1仕切石は厚さ20cmの板状の岩を35cm程掘り込んで使用している。

墓道

石室主軸にまっすぐに連結する。地山を70cmほど掘り込んでおり、断面は逆台形を呈す。床面上で須恵器壺蓋・壺等が出土している。3号墳北側の造成時に削平されており、羨門から5mのみ遺存している。

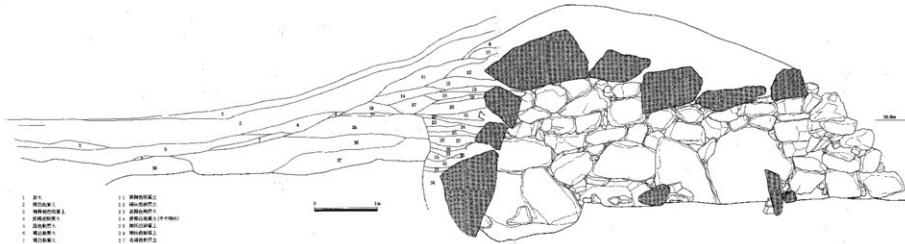
閉塞施設

床面から最大110cmほど遺存していた。天井までは40cmほど開く。第1支切石の外側1mの地点に床面から30cmほどの土盛りを行い、その間に閉塞を構築している。閉塞石は奥側に大きめの石を置き、外側に掘り掌大から25cmほどの礫石を積めている。

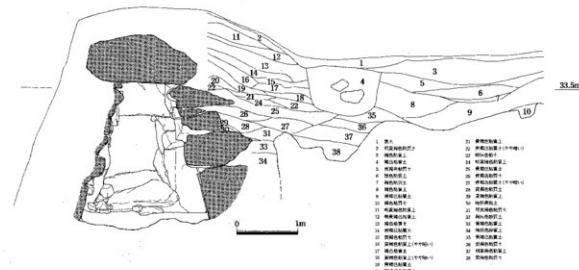
(4) 遺物

(石室内出土遺物)

石室内は盜掘をうけている。土師器高壺、須恵器壺蓋、須恵器平瓶等が出土しているが数は少ない。また、石室床面はほぼ全面が掘り返されており、出土した遺物も原位置を留める遺物は無い。098~100は須恵器壺蓋である。098は壺部が半球状を呈し、口径11.9cm、器高4.3cmを測る。鉢型の摘みを貼り付ける。胎土は精良で外面天井はヘラ削り、残りはナデを施す。099は口径10.9cm、器高



1. 砂土
2. 粘质砂土
3. 粘质砂土上
4. 粘质砂土下
5. 粘质砂土
6. 粘质砂土
7. 粘质砂土
8. 粘质砂土
9. 粘质砂土
10. 粘质砂土
11. 粘质砂土
12. 粘质砂土
13. 粘质砂土
14. 粘质砂土
15. 粘质砂土
16. 粘质砂土
17. 粘质砂土
18. 粘质砂土
19. 粘质砂土
20. 粘质砂土
21. 粘质砂土
22. 粘质砂土
23. 粘质砂土
24. 粘质砂土
25. 粘质砂土
26. 粘质砂土
27. 粘质砂土
28. 粘质砂土
29. 粘质砂土
30. 粘质砂土
31. 粘质砂土
32. 粘质砂土
33. 粘质砂土
34. 粘质砂土
35. 粘质砂土
36. 粘质砂土
37. 粘质砂土
38. 粘质砂土



1. 砂土
2. 粘质砂土
3. 粘质砂土
4. 粘质砂土
5. 粘质砂土
6. 粘质砂土
7. 粘质砂土
8. 粘质砂土
9. 粘质砂土
10. 粘质砂土
11. 粘质砂土
12. 粘质砂土
13. 粘质砂土
14. 粘质砂土
15. 粘质砂土
16. 粘质砂土
17. 粘质砂土
18. 粘质砂土
19. 粘质砂土
20. 粘质砂土
21. 粘质砂土
22. 粘质砂土
23. 粘质砂土
24. 粘质砂土
25. 粘质砂土
26. 粘质砂土
27. 粘质砂土
28. 粘质砂土
29. 粘质砂土
30. 粘质砂土
31. 粘质砂土
32. 粘质砂土
33. 粘质砂土
34. 粘质砂土
35. 粘质砂土
36. 粘质砂土
37. 粘质砂土
38. 粘质砂土

Fig. 26 3号填埋丘断面图 (1/60)

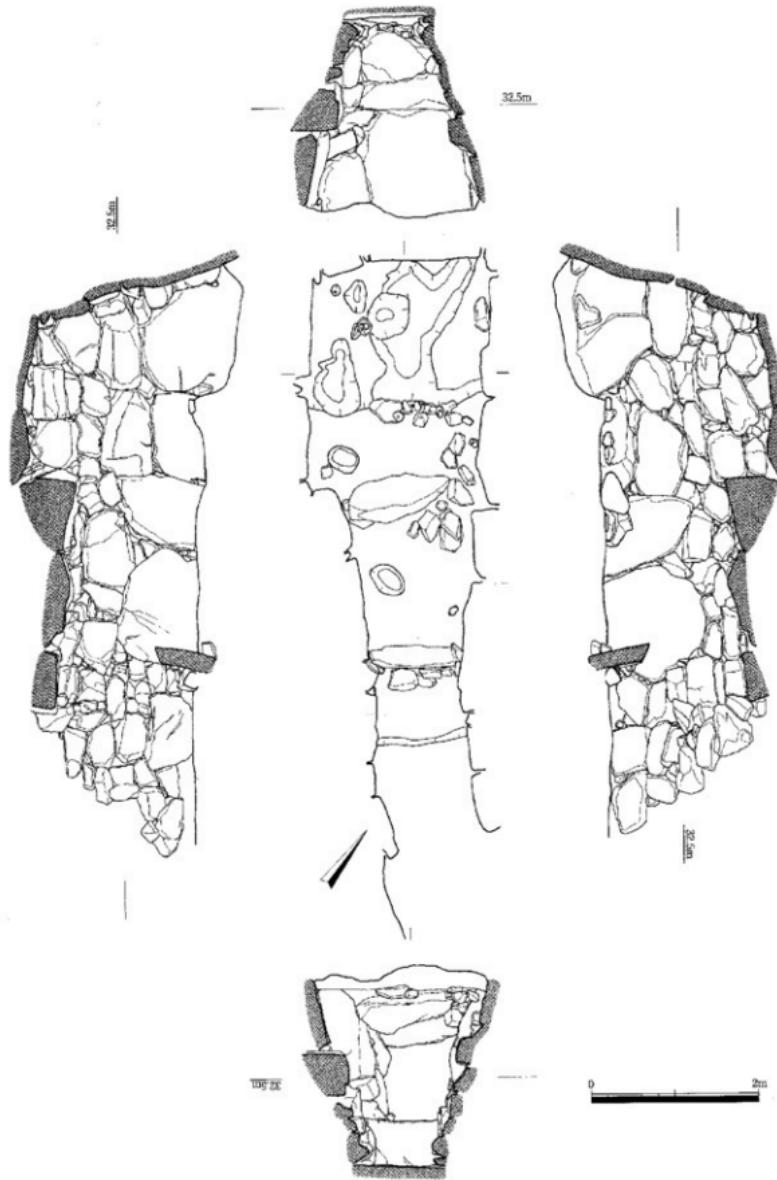


Fig. 27 3号墳石室実測図 (1/60)

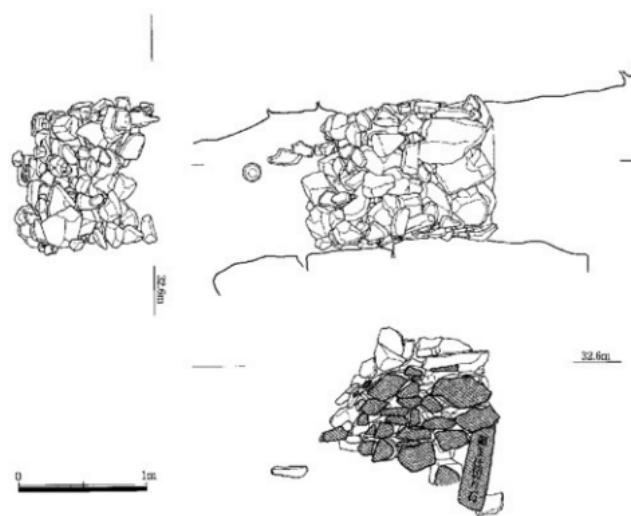
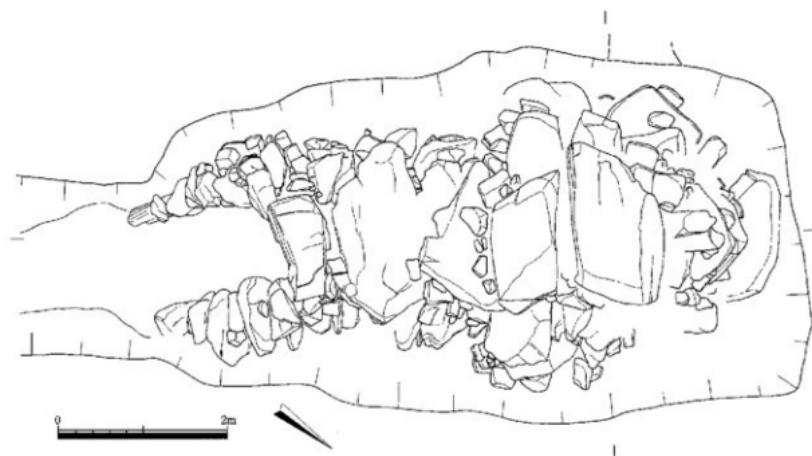


Fig. 28 3号墳石室依瞰図(1/60)・閉塞部実測図(1/40)

2.3cmを測る。器壁は肉厚で、口縁に受け部がつく。一部釉がかかり暗灰と褐色の斑を呈す。焼成は良好。100は口径12.5cm 器高4.1cmを測る。暗青灰色で砂を僅かに含んでいる。焼成は良好。外面口縁部にヘラ記号を施す。101~103は須恵器坏である。101は口径10.8cm、器高3.6cmを測る。受部は短い二等辺三角形で口縁は短く斜めに立ち上がる。外底部にヘラ記号を施す。砂を多く含み焼成は良好である。外底部がヘラ削りの他はナデを施す。102は口径11.3cm、器高3.6cmを測る。暗茶褐色を呈す。受部は細く水平で口縁は斜めに緩やかに立ち上がる。外底部にヘラ記号を施す。約半分を欠損しているため、全体は不明である。103は口径8.2cm、器高3.1cmを測る。焼成は良好であるが、胎土・調整は粗い。外底部が回転ヘラ切りの他はナデを施す。蓋の可能性も考えられる。104は須恵器短頸壺である。口径6.8cmを測る。灰色を呈し焼成は良好で外面に薄く釉がつく。成形した後外側に2mm程精良な粘土を貼り付けている。105・106は壺か。106は上部中央で繊維孔を塞いでいる。肩部が一部しか残っていないので口縁の形状は不明であるが、平瓶のように偏った口縁部がつくと思われる。須恵質で胎土は粗いが焼成は良好である。調整は上半部には一部刷毛目がつくが大半は繊維で巻き上げたままである。下半部がヘラ削りであるが粗い。106は焼成不良で軟質、黒斑の他は灰白色を呈す。胴径13.2cmを測る。表面は磨滅しており調整は不明である。上下も明確ではないが、繊維孔がある方を上と考えた。107は須恵器平瓶で口径7.4、胴径16.3cm、器高14.2cmを測る。胎土は細かく焼成は良好である。外面は全体に不明瞭なカキ目を施す。破片は玄室と窓造部に分かれて出土した。108・109は土師器高坏である。両方とも玄室からの出土した。108は口径14.1cm、器高9.3cmを測る。赤橙色を呈し、胎土は白色砂を含む。焼成はやや不良。坏部は横方向のミガキで脚部は縦にミガキを施す。109は口径14.2cm、器高8.4cmを測る。外面は赤色に彩色を施す。坏部の調整は不明。脚部は縦方向の粗いミガキを施す。

(墓道)

墓道からは多くの遺物が出土した。これらは元々墓道に置かれたものではなく、2・3号墳墳丘上からの流れ込みである。110~120は須恵器坏蓋である。110は口径10.8cm、器高2.7cmを測る。外面上半部はヘラ削りを施す。淡灰白色を呈し白色砂を多量に含む。胎土は粗い。111は口径10.8cm、器高2cmを測る。坏部はほぼ水平で丸い受部がつく。外部は釉がかかり灰白色を呈す。112は平面は楕円形で口径11.5cm、器高2.5cmを測る。外面上半がヘラ削りの他はナデを施す。上面には釉がかかる。113は口径11.8、器高4.2cmを測る。胎土はやや粗めて雲母片を含む。114は口径10.6cmを測る。全体に丸みを帯びる。受部は断面三角形を呈す。胎土粗く焼成は良好である。外面にヘラ記号を施す。115は口径10.3、器高2.8cmを測る。外面に薄く釉を施す。外面上半に粗いヘラ削りを施す。受部は細く短い。胎土は粗い。116は口径11.8cm、器高3.8cmを測る。外面上半はヘラ削りを施す。坏と合わせて立てた状態で焼成を行ったため、釉が一方の口縁のみに付き、天井部に垂れている。口縁端は坏に付着している。117は口径12.1cm、器高4.1cmを測る。砂を含み焼成は不良である。丸みを帯び半球状を呈す。外面上半はヘラ削り後ヘラ記号を施す。118は口径10.7cm、器高3.3cmを測る。天井部と口縁の境に明確な稜をもつ。119は口径10.3cm、器高4.3cmを測る。外天井はヘラ切り後未調整である。灰色を呈し焼成は良好である。内外面ともがらん化したような黒い粒が多くつく。120は口径11.9cm、器高3.5cmを測る。外面黒褐色を呈し、胎土は粗い。天井は平らでヘラ削り後ヘラ記号を施す。破片のため全体は不明である。121~131は須恵器坏である。121は口径12.7cm、器高3.6cmを測る。器壁は厚く、白色砂はガラス化している。受部は太い二等辺三角形で口縁は短く斜めに突き出す。外面に釉が厚くかかり緑色を呈す。122は口径13.6cm、器高3.5cmを測る。器壁は薄く、外面底部はヘラ削り、他はナデを施す。調整は粗めで全体に稜線の段がつく。口縁は垂直に立ち上がる。123は口径13.1cm、

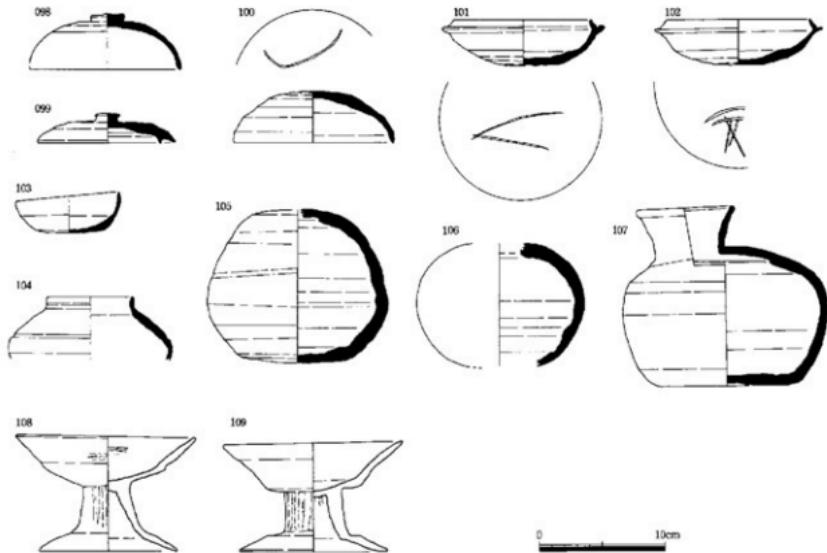


Fig. 29 3号墳石室出土遺物実測図(1/4)

器高3.95cmを測る。器壁は厚く砂は多く含まないものの胎土は粗い。口縁は斜めに立ち上がるものの途中で屈曲し、口縁端部は垂直である。外面底部はヘラ削りで他はナデを施す。124は口径12.1cm、器高3.2cmを測る。受部端は太くて角張る。口縁は斜めに立ち上がるが緩やかに屈曲し垂直になる。器壁は薄く、白色砂は多く含まないが胎土は粗い。焼成は良好である。125は受部は断面にと右辺三角形で、口縁は細長く斜めに立ち上がる。126は茶褐色を呈し、胎土精良で焼成は良好である。外面底部にヘラ記号を施す。127は口径10.3cm、器高3.4cmを測る。灰色を呈す。底部は回転ヘラ切り後軽くナデを施す。128は口径10.8cm、器高3.7cmを測る。黒褐色を呈す。白色砂を多く含み、焼成は良好。内面に釉を施す。129は平面梢円形を呈し、口径9.2~9.6cm、器高3.4cmを測る。灰色を呈す。胎土は粗く焼成は良好である。底部はヘラ切り後軽くナデを施す。130は口径10.4cm、器高3.2cmを測る。白色砂を多く含むが、ガラス化する直前である。底部はヘラ切り後未調整である。131は口径10.2cm、器高3.4cmを測る。内面茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に白色砂を多く含む。外面に釉を施す。底部はヘラ切り後、ヘラ記号を施す。132は須恵器高壊である。口径8.3、器高9.4cmを測る。口縁端は丸みを帯びる。胎土は粒が大きく粗い感じがするが、調整・焼成とともに丁寧である。灰白色を呈す。133は須恵器高台付き壺である。口径13.4、器高20.7cmを測る。胎土は粗めで焼成は良好。暗灰色を呈し内外面ともナデ調整である。肩部に薄く釉を施す。胴部下半はヘラ削りの後、台部を貼り付ける。台の直上にヘラ記号を施す。134は須恵器平瓶である。暗灰色を呈し、口径7.2、器高14.3cmを測る。外面は胴部下端にヘラ削りを施すが、その他は強いカキ目を施す。頸部にヘラ記号を施す。

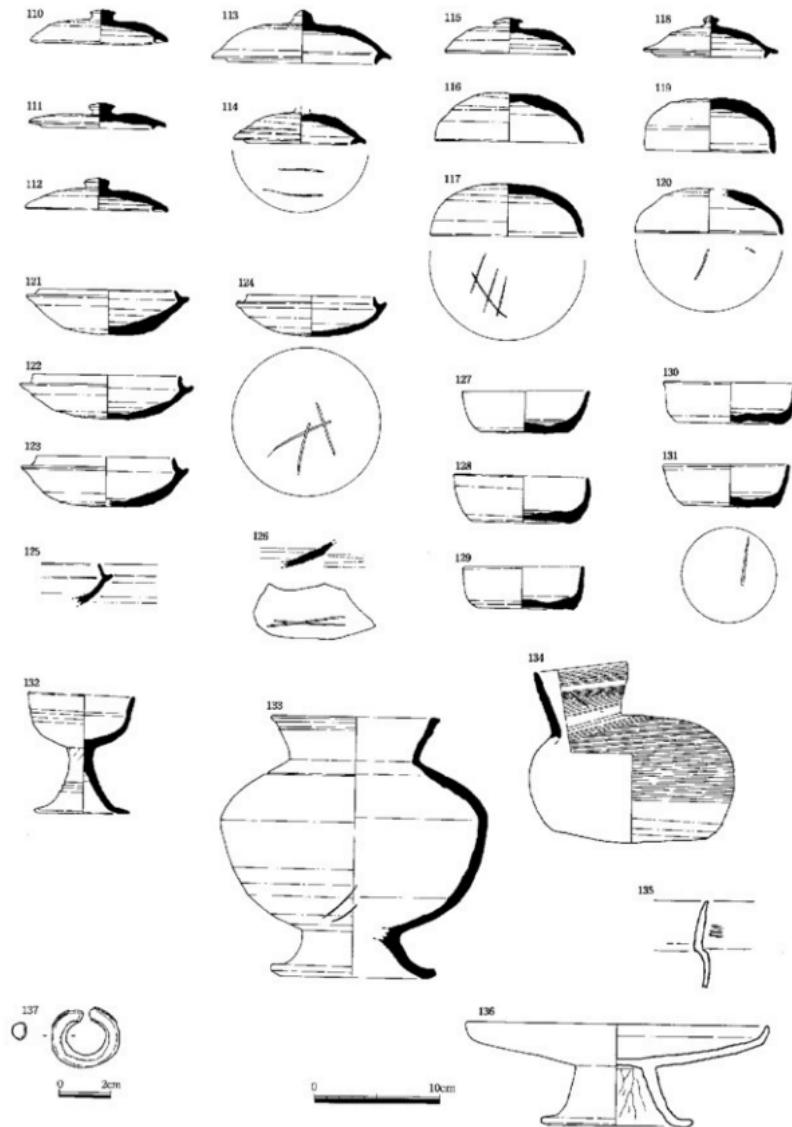


Fig. 30 3号墳墓遺出土物実測図 (1/4・1/2)

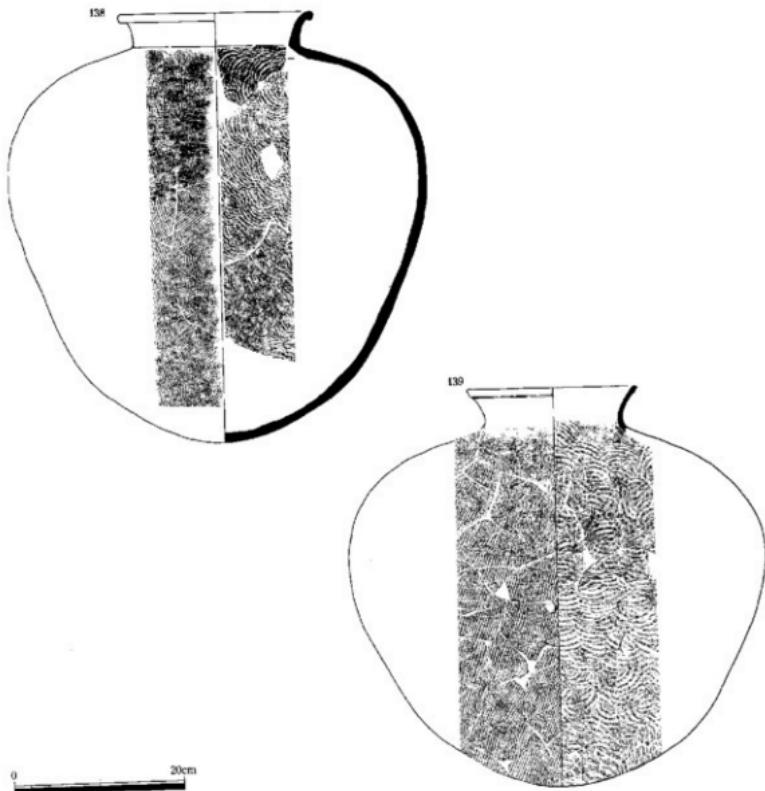


Fig. 31 3号墳墓出土遺物実測図 2 (1/4)

135は土師器壺である。調整は摩滅のため不明であるが、頸部の一部に横方向の粗いミガキがみられる。136は土師器高环である。口径24.1、器高8.1cmを測る。脚部内面を除いて、赤色顔料を塗布している。調整は不明瞭であるが、脚部外面は横方向のミガキ、内側は縫の削り、内面口縁は横方向の粗いミガキ、内底部は縫方向のミガキを施している。137は耳環である。2.6×1.4cmを測る。胴心に銀管を施すが、銀管は内側部分のみの残存である。138・139は須恵器壺である。138は口径23.1cm、器高45.5cmを測る。外面口縁から頸部にかけては自然釉がかかるため、白色を呈する。その他は茶褐色である。調整は外面上半はカキ目、下半は格子状のタタキを施す。内面は青海波紋と同心円状のタタキで、一部ナデを施している。口縁は上半が軽く外側に開き、端部は横方向に開きながら丸く巻く。139は口径20.1、器高47.2cmを測る。灰色で焼成は良好。調整は胴部全体に平行タタキを施した後、水平方向にまばらに刷毛目（カキ目）を施す。口縁から頸部には、薄く自然釉がかかる。内面は青海波紋と同心円状のタタキを施す。

4号墳

(1) 位置と現状

1号墳とは15m、2号墳とは12mと非常に接近している。2号墳とは墳丘・周溝の切合があるものと思われ、築造順序の確定に期待がもてたが、墳丘盛土自体は狭い範囲に留まり、周溝による墳丘の切り合いは観察できなかった。墳頂部に大きく盜掘孔があいており、墳丘の遺存状況は悪い。盜掘孔内は天井石の一部が抜かれており、石室内部を覗くことができた。石室入り口と墓道は調査開始時には完全に埋没していた。

(2) 墳丘

地山成形

西から東に向かって傾斜する斜面を段状に造成して、平坦面を築いている。石室下方には溝や円形の造成は見られない。掘削の端部は明瞭である。石室上方には斜面を三日月状に開削した段がみられる。石室後ろ上方には浅い溝が石室掘り方を巡るよう掘り込まれている。墳丘の土留め、もしくは排水用の溝であろうか。

墳丘

石室上方では地山成形による周溝立ち上がりはない。地山成形された上に黒色土が堆積しており、段造成後から墳丘築造までの間が黒色土が形成される程あくことが判る。墳丘盛土は約2mを測る。盛土は石室構築の前後で2工程に分けられる。まず1工程は石室下方で地山成形面上に盛土を行い、石室上方の地山成形面との高さをあわせ、それから石室掘り方を掘り込んでいる。黒色土直上は盛土の厚さは30cm前後であるが、上層は5~10cmと細かな単位で叩き締めを行っている。石室上方の掘り込みはほぼ垂直であるが、下方は石室底面から緩やかに立ち上がる。石材搬入のためであろうか。2工程は石室構築後、天井石を乗せる前に掘り方まで埋めて平坦面を作った後、天井石を乗せ、その後

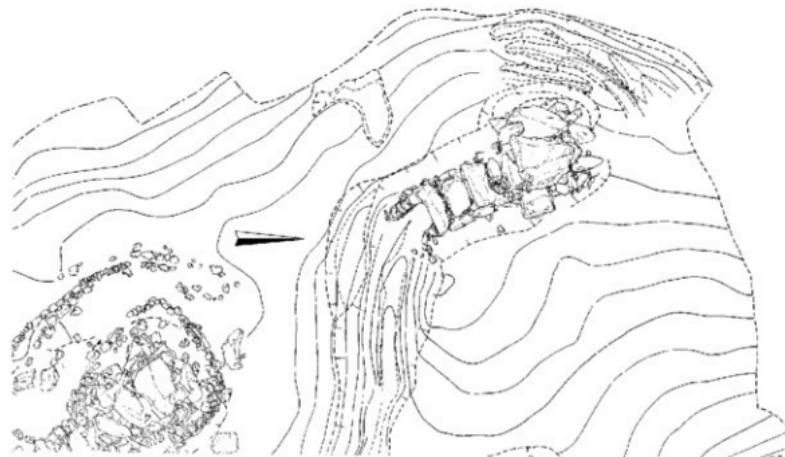


Fig. 32 4号墳地山整形測量図 (1/200)

天井石を覆うドーム状の盛土を行っている。この時、石室上方は粗いブロック状の盛土であるが、石室下方は丁寧な版築を行っている。その後、全体に化粧土を盛って墳丘を仕上げている。墳丘の規模は石室主軸方向で11m、主軸直行方向13mを測る。周溝を含めた規模は石室主軸方向で13.5m、主軸に直行する方向で15mである。また、石室基底面からの高さは4.5mを測る。

(3) 墓葬施設

4号墳の埋葬主体は主軸方向をN-23°-Wにとる単室の両袖型横穴式石室で、南東方向に開口する。盜掘坑として石が抜き取られている他は、遺存状況は良好である。石室は緩斜面上のテラスに掘込んだ掘り方内に構築され、羨道開口部に墓道が連結する。羨道部や閉塞石の遺存状況も良好である。

石室掘り方

石室掘り方は等高線にはほぼ平行である。段状に造成した平坦面をさらに一段楕円形に掘り下げており、石室上方で2.0m、下方では1.8mの掘り込みである。

玄室

奥壁幅224cm、袖部幅182cm、右側壁長692cm、左側壁長740cmを測り、平面プランは歪みのある長方形である。奥壁は高さ200cm以上の石を使っており、右壁は腰石に高さ120~160cm前後の石を使用し、その上の石で奥壁との高さを調整する。石の間には15cm程の石を積めて固定している。左壁は腰石に高さ100cm前後の石を使用している。羨道に投げ込んだ土の中に礫が多く含まれており、玄室は本来敷石があったと思われる。

羨道・墓道

羨道は出口付近でやや東向きに折れ、端部が八の字に開きながら墓道と連結する。石積みの方法は両壁とも奥側は玄室の壁体構築法の延長にあり、1m程の腰石を配し、その上に転石を横積みにして構築している。入り口側は腰石が小さくなり、石の大きさも不揃いになる。特に右壁側に顕著である。左右壁の構築法の変化は屈曲部を境としており、墓道に連結させるために無理に構築したと考えられる。床面は石室奥壁に向かって緩やかに傾斜している。墓道は連結部分から1号墳の墳裾に沿うように弧を描きながら北東方向に伸びる。幅3m、長さ約18mを測る。2号墳の開口部付近で2号墳墓道側に屈曲しており、2号墳墓道と連結していた可能性がある。墓道前庭部では多くの遺物が出土した。墓道は1号墳・2号墳間で墓道床面が溝状になっているのは、谷上部に降った雨が墓道に流れ込んで削平されたものである。

閉塞施設

閉塞石の遺存状況は良好で最大143cmを測る。まず第1仕切り石から外側120cmのところに30cm程度の盛土を行い、それと仕切り石の間に閉塞石をおいて、入り口側に崩れないように工夫している。第1仕切り石から手前120~130cmの間は人頭大の四角い石を一段ずつ高さを揃えながら石を積み、高さを揃えるため積石の隙間にには握拳大の割石をつめ、側壁との隙間に土と割石をつめこんでいる。とくに下から2段目は腰石の高さと揃えてあり、かなり丁寧に石を積んだことがわかる。最後に入り口側を握り拳大の割石で覆っている。積石の間からガラス玉が2点出土した。

(4) 遺物

(墳丘出土遺物)

140~145は須恵器壺蓋である。140は口径13.1cm、器高4.1cmを測る。破片が羨道からも出土している。141は口径13.3cm、器高3.7cmを測る。胎土は粗雑で、外面天井部のみヘラ削りを施す。142は口径12.9cmを測る。天井部から緩やかに傾斜し、口縁部で垂直に屈曲する。143は口径13.7cmを測る。全体に丸みを帯びる。外天井部は回転ヘラ削りの後、手持ちの削りを施す。144は口径12.4cm、器高

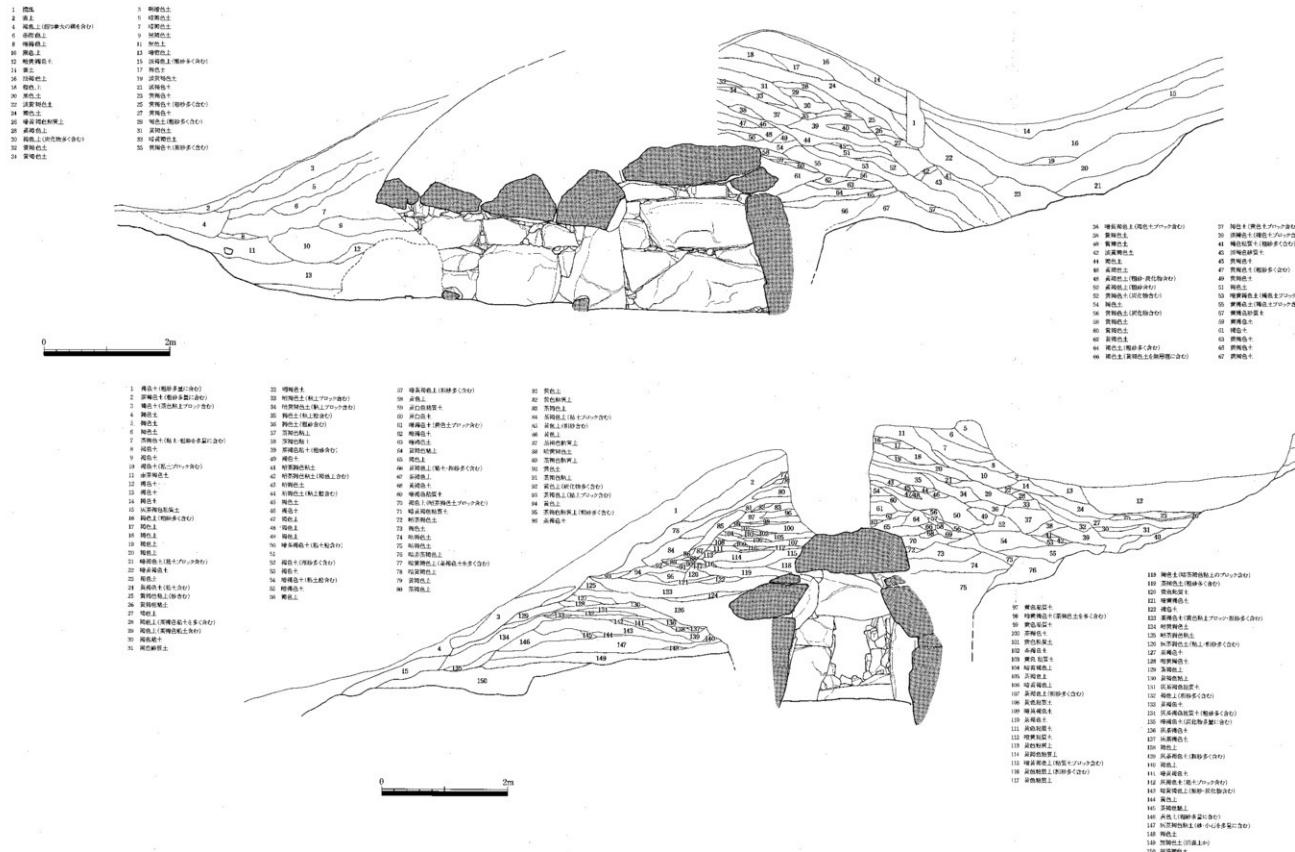


Fig. 33 4号墳墳丘断面図(1/60)

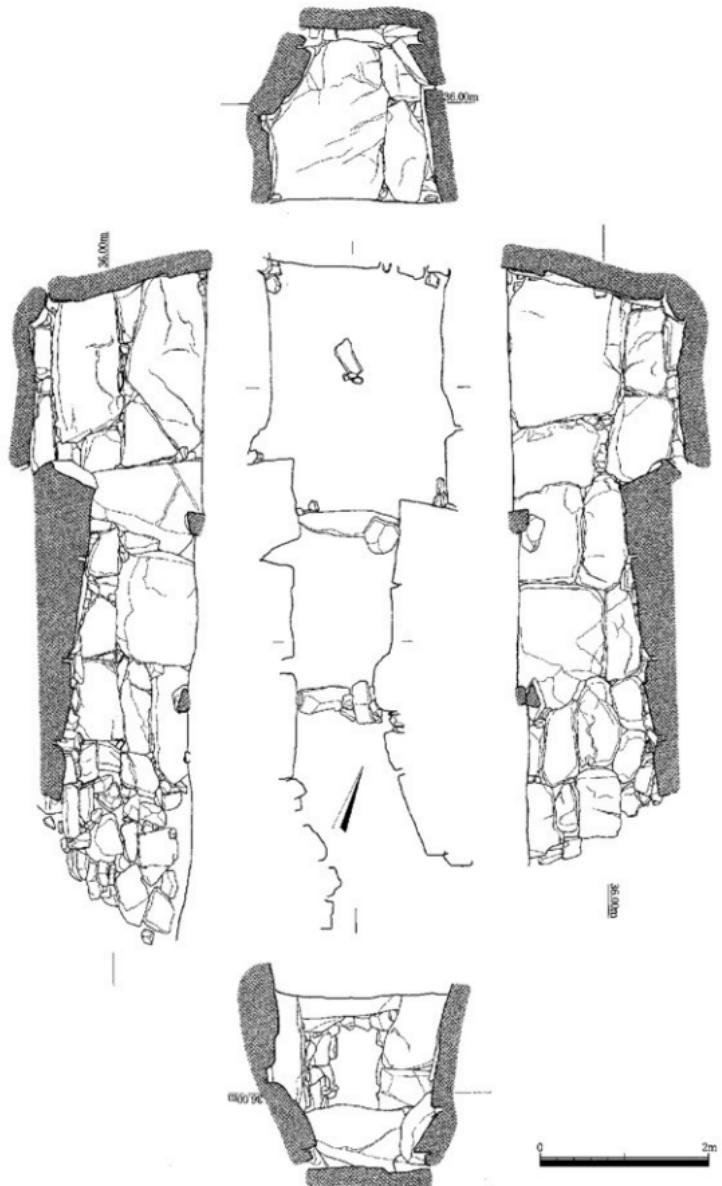


Fig. 34 4号填石室实测图 (1/60)

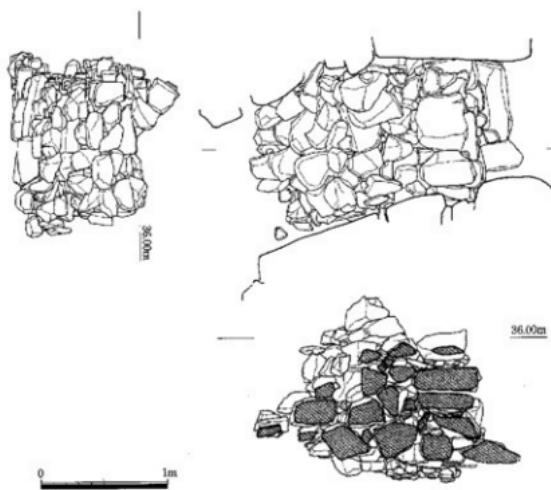
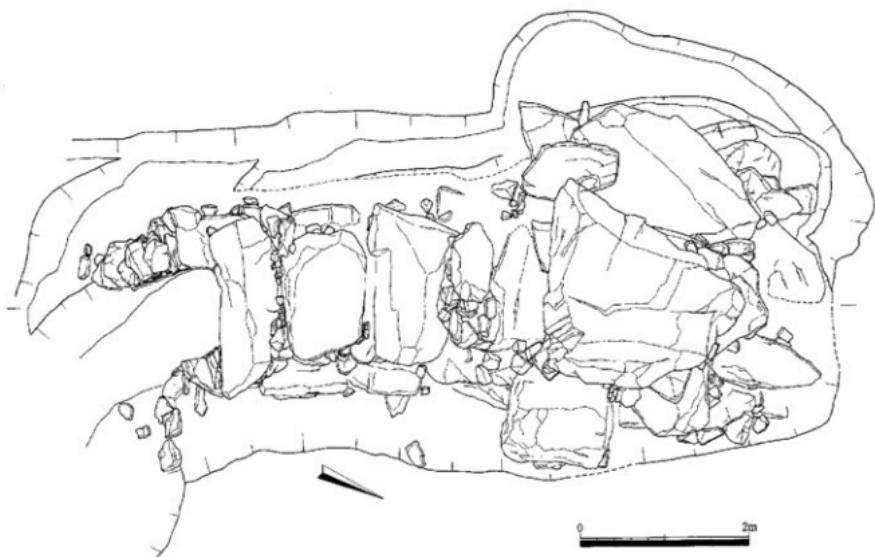


Fig. 35 4号填石室俯瞰图(1/60)·圈塞部实测图(1/40)

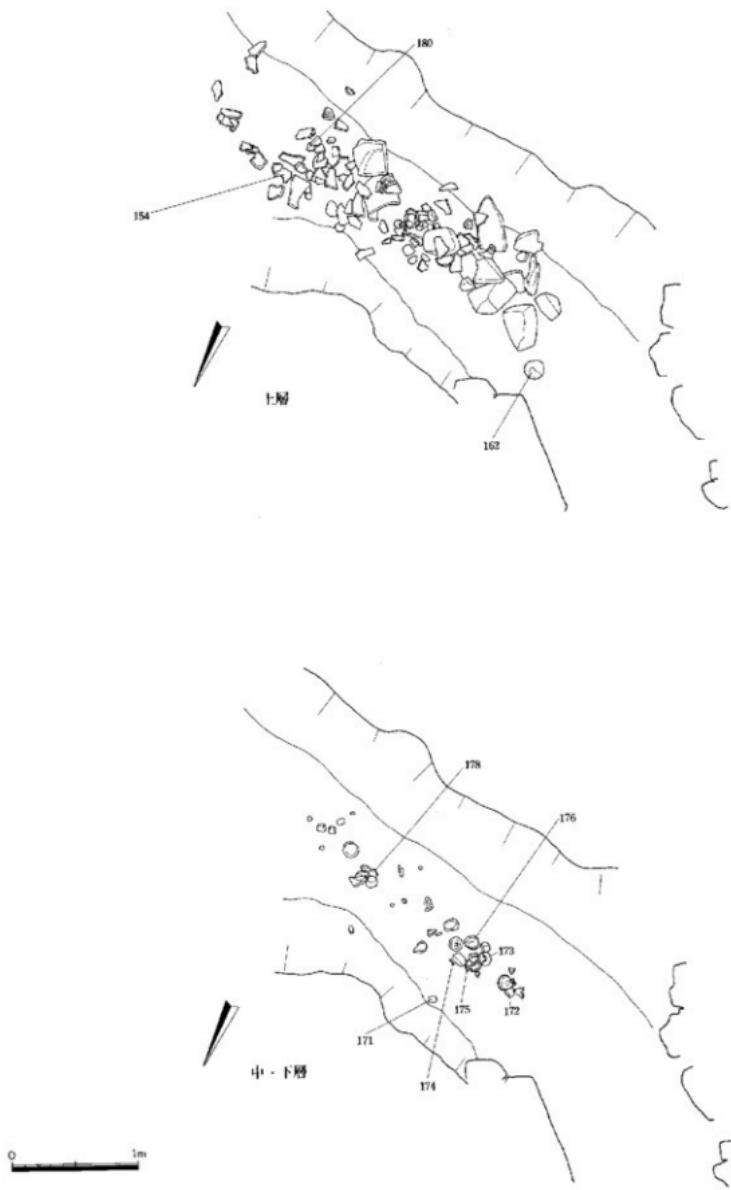
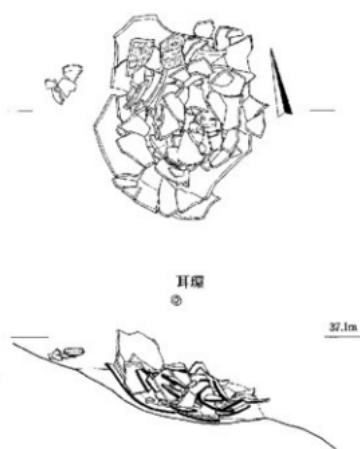


Fig. 36 4号墳墓道遺物出土状況図 (1/40)

4cmを測る。天井から口縁まで緩やかな曲線である。外面天井にヘラ記号を施す。145は口径12.1cm、器高3.9cmを測る。天井部は平らでヘラ削りを施す。外天井にヘラ記号を施す。破片が墓道上層からも出土している。146～150は須恵器坏である。146は口径10.9cm、器高4.1cmを測る。胎土、焼成とも良好である。全体に丸みを帯びる。口縁は細くわずかに立ち上がるのみである。147は口径11.25cmを測る。丸みを帯びる。口縁は短く斜めに立ち上がる。外底部に灰釉が付着しており、蓋をして逆さまの状態で焼成している。148は口径11cm、器高3.7cmを測る。丸みを帯びるが底部はわずかに窪んでいる。外底部にヘラ記号を施す。149は口径10.6cm、坏部高3.5cmを測る。口縁は短い断面が二等辺三角形で斜め方向に立ち上がる。外面にヘラ記号を施すが、全体の1/4程度しか遺存していないので全体の形は不明である。150は遺存状態が悪く口径は約11cmである。受け部の下にヘラ記号を施す。口縁は斜めに立ち上がるが途中で屈曲し、端部はほぼ垂直である。151～153は須恵器高坏である。151は口径14.3cm、器高17.5cmを測る。白色砂を多量に含み、胎土も粗雑である。調整も粗い。坏部は脚部の上にやや斜めにのる。脚には2段の透孔があけられているが、上段は脚内部まで貫通していない。152は口径10.6cm、器高6.1cmを測る。焼成時にわずかに歪んでいる。口縁は斜めに立ち上がりながら緩やかなカーブを描く。153は口径10.8cm、器高6.3cmを測る。口縁は強く外反する。脚部は焼成時に大きく歪んでいる。脚部の端に対角線上の2方向に円形の透孔を穿つ。150と同じく口縁受け部下にヘラ記号を施す。154は須恵器3耳壺である。口径16.3cmを測る。破片は墓道の上層と2号墳墓道から出土している。焼成は不良で灰白色を呈し、外面は平行タタキ、内面は同心円状のタタキを施す。口縁は殆ど外反せず端部外面は玉縁状を呈す。肩部に幅1cmの取っ手が3方向につく。155は口径23.9cm、器高44.1cmを測る。破片は1号墳墳丘・2号墳周溝からも出土している。外面は格子状のタタキの後一部に水平方向のカキ目を施す。内面は同心円及び青海波文のタタキである。口縁は外反し、端部は玉縁状をなす。肩部に自然釉が付着している。156は口径19.9、器高35.4cmを測る。外面は格子状タタキの後一部カキ目、内面は青海波文と同心円状のタタキを施す。口縁は緩やかなカーブで外反する。器壁は薄く焼成は良好である。

(墓道内出土遺物)

石室前庭部で多くの遺物が出土した。遺物は上層の黒色土中とやや有機質を含む茶褐色土層の中層、橙色土の下層に分けることができる。最下層は花崗岩バイランを主とし、最初は地山との判別がつかなかった。追葬時の整地層か。157～170は上層出土である。157～161は須恵器坏壺である。口径・器高は157が12.2cm・3.4cm、158が12.5cm・3.8cm、159が12.6cm・3.8cm、160が12.8cm・4.2cm、161が12.6cm・3.6cmを測る。160・161は外面天井部にヘラ記号を施す。162～165は須恵器坏である。口径・器高は162が10.9cm・4.4cm、163が11.0cm・4.0cm、164が11.6cm・4.3cmを測り口縁が垂直に近く立ち上がる。165は口径11.7cm・器高4.2cmを測る。調整は粗雑で口縁は短く立ち上がりが弱い。166は越の口縁か。167は須恵器長頸壺である。口径10.1cmを測る。暗青灰色を呈し焼成は良好である。168～170は土師器高坏である。171～174は中層出土遺物である。171は口径10cm、器高3.4cmを測る。口縁は二等辺三角形を呈す。172・173は須恵器壺で172は胴部に模描文を施し胸部穿孔の周囲を焼成後に打ち欠く。173は外面底部にヘラ記号を施す。174は須恵器平瓶である。ほぼ完形で口径6.1cm、器高14.5cmを測る。調整は良好で外面底部にヘラ記号を施す。175～179は下層出土遺物である。175は平面横円形で口径9.1～9.6cm、器高3.9cmを測る。白色砂を多く含む。摘みは貼り付けでなく差し込み式である。176は口径10.5cm、器高4.2cmを測る。外底部にヘラ記号を施す。177は器高16.3cmを測る。焼成は不良で軟質である。178は須恵器短頸壺である。外底部にヘラ記号を施す。179は平瓶である。焼成は不良で白色を呈す。



180・181は須恵器中型甕である。180は口径24cm、器高44.3cmを測る。調整は外面が格子状のタキ、内面が同心円状のタキである。181は口径38.5cmを測る。

182・183は須恵器大甕である。口径57.3cmを測る。破片は4号墳のみではなく他の古墳の墓道からも出土している。4号墳埴丘に埋められていた大甕の底部と同一個体と思われるが、破片が少なく今のところ接点はない。183は46.4cm、器高88.3cmを測る。灰色で外面は格子状、内面は同心円と青海波紋のタキである。この破片も2・3号墳の墓道や埴丘また2号墳の玄室からも出土している。

(石室出土遺物)

4号墳も盃掘を受けている。玄室は床全体が掘り返されており、原位置をとどめる遺物はない。搔き混ぜた土の中からガラス玉

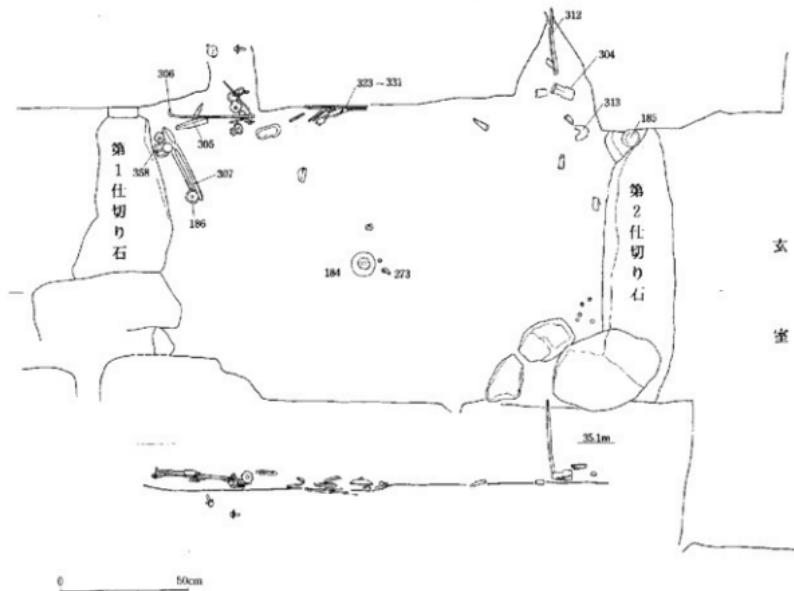


Fig. 37 4号墳埴丘遺物出土状況 (1/20)・漢道部遺物出土状況図 (1/20)

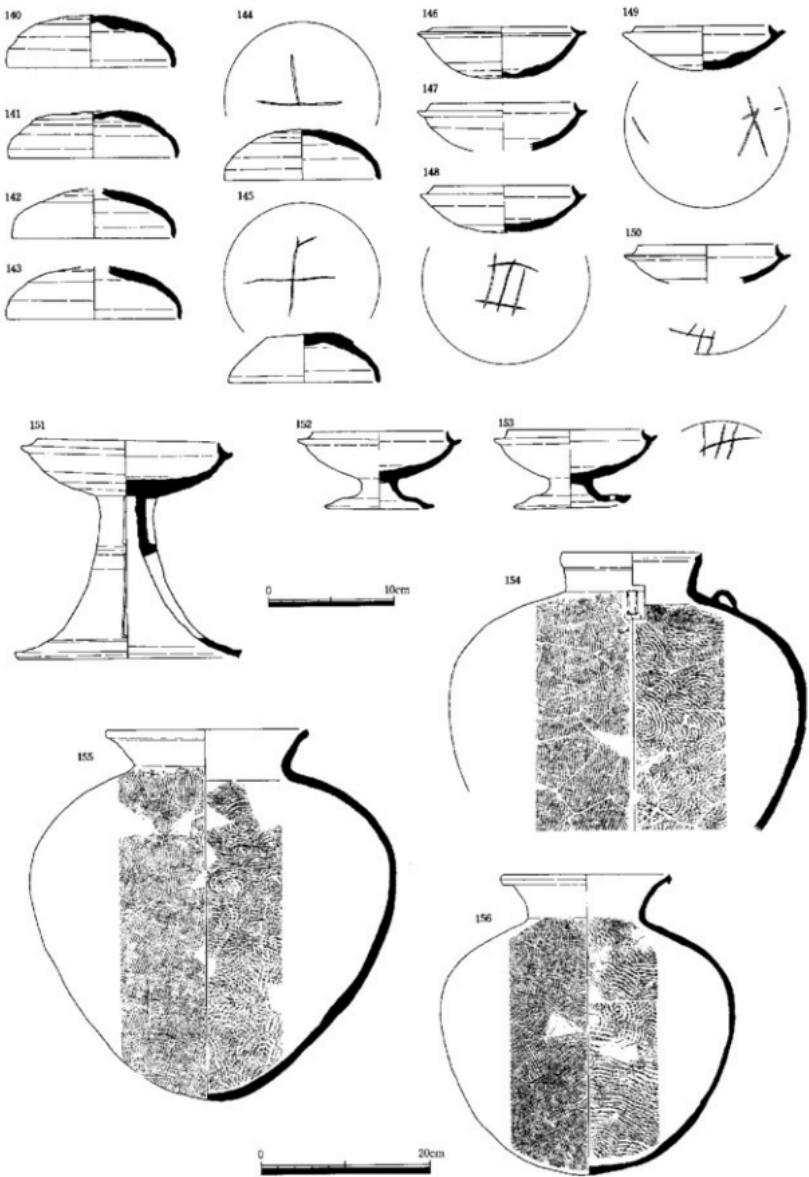


Fig. 38 4号墳墳丘出土遺物実測図1 (1/4・1/6)

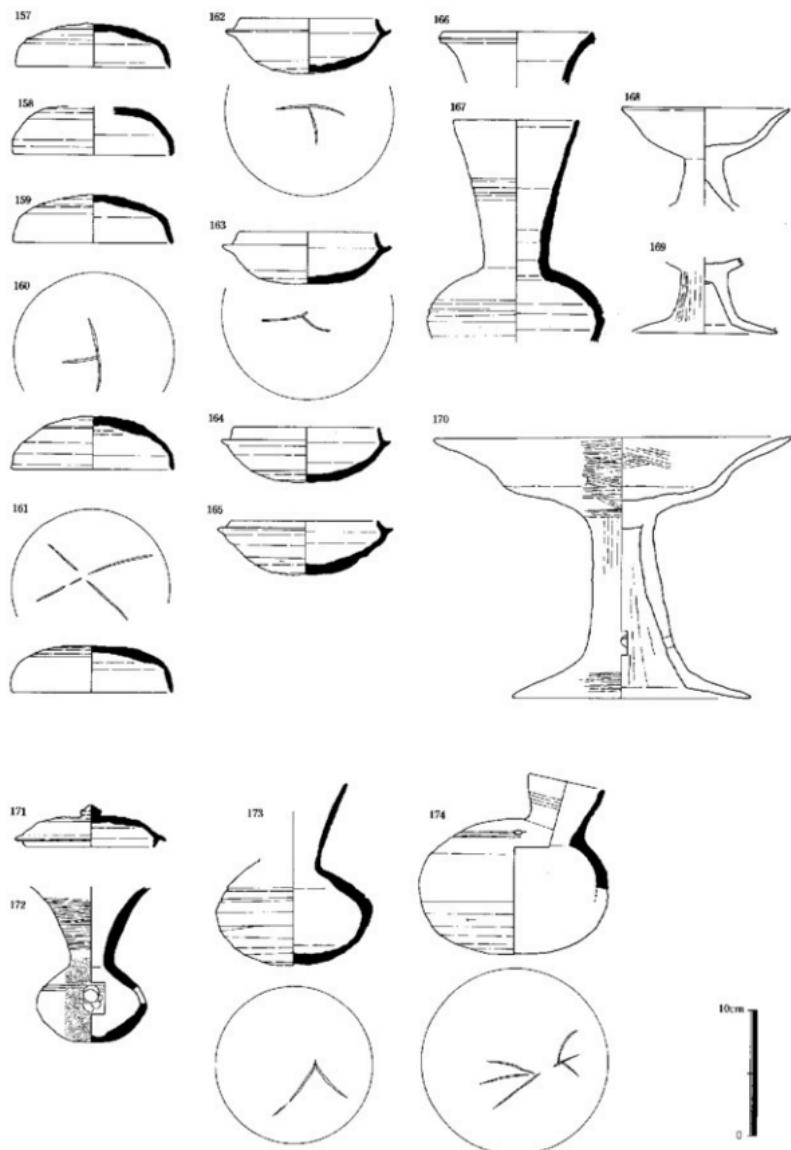


Fig. 39 4号墳墓道出土遺物実測図(1/4)

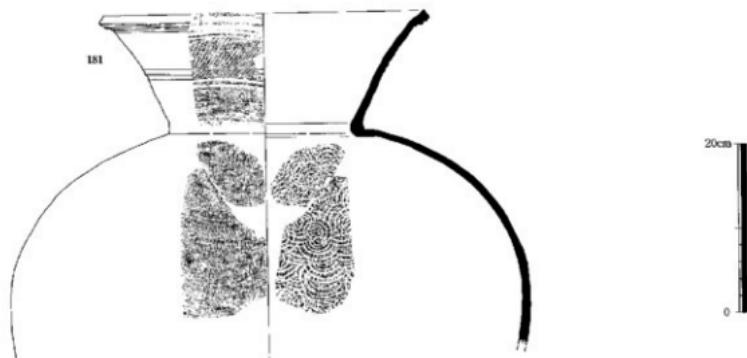
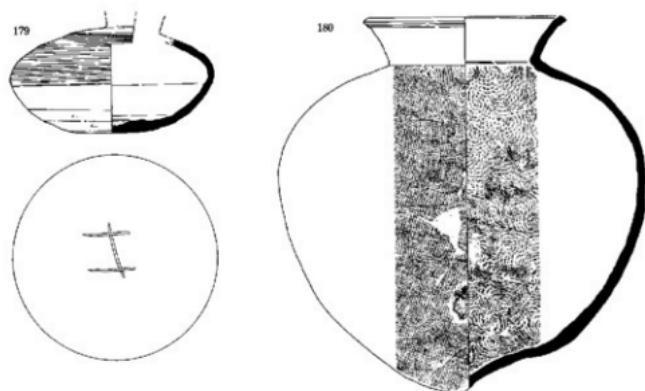
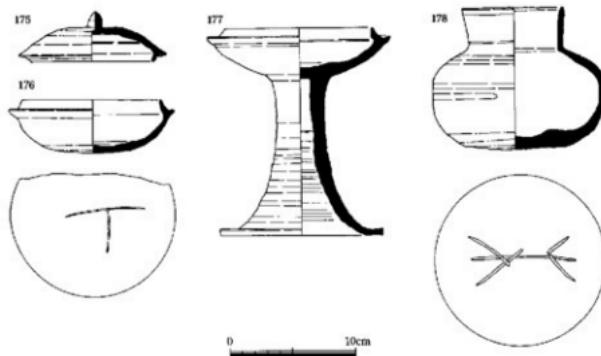


Fig. 40 4号墳墓道出土遺物実測図2 (1/4)

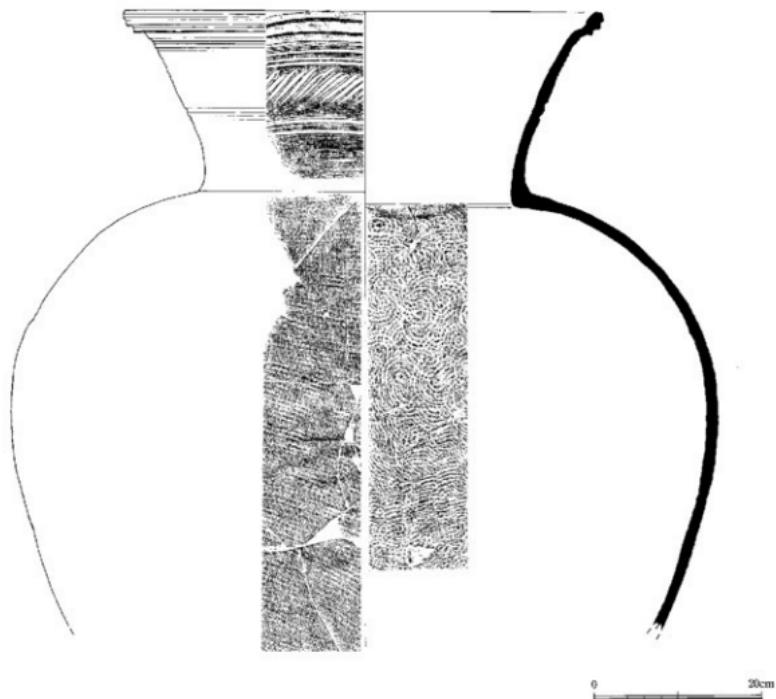


Fig. 41 4号墳墓道出土遺物実測図3 (1/6)

が数点出土している。1cm角ほどの鉄滓片が出土したが、大雨により埴丘が崩壊し、土が天井から流れ込んだ際に紛失した。墓道内に玄室床土を投げ込んでおり、土中から多くのガラス玉が出土した。墓道からは多くのものが出土した。184は須恵器壺蓋である。口径10cm、器高3.35cmを測り、摘みがつく。灰白色を呈し軟質である。185は須恵器壺である。口径9.5cm、器高3.4cmを測る。黒褐色を呈し、底部は静止ヘラ切りである。186は須恵質紡錘車である。径4.5cm、厚さ2.1cmを測る。灰色を呈し、焼成は良好である。側面は著しく摩耗している。鋳造道具と一緒に出土した。187~289は玉類である。187~219は玄室から出土した。220~272は石室の土を搔き出した土。273~280は墓道床面出土である。273は翡翠勾玉である。長さ3.3cm、重さ8.39gを測る。頭部に4本の突みを持つ丁字頭である。頭部は乳白色で、胸部から尾にかけては薄い半透明の緑色を呈す。274は水晶製切子玉である。281・282は閉塞から、283~289は墓道から出土した。その他、鉄鋤、鉄鎚、火搔き棒の鋳造道具や馬具、飾り金具、鉄鎌、太刀等の遺物が出土した。遺物は壺蓋と翡翠勾玉が墓道中央床面で出土した他は、墓道左壁下に集中する。太刀は左壁に立てかけた状態であったが、その下で鐔の破片が出土していることから盗掘時に寄せ集めたのではなく、最終埋葬時の状況を留めているものと考えられる。

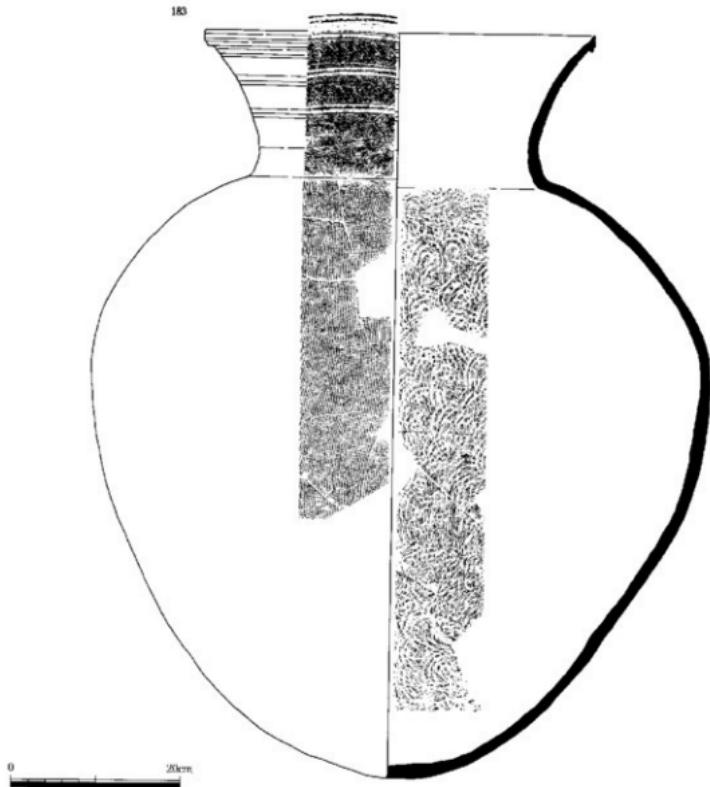


Fig. 42 4号墳墳丘出土遺物実測図 2 (1/6)

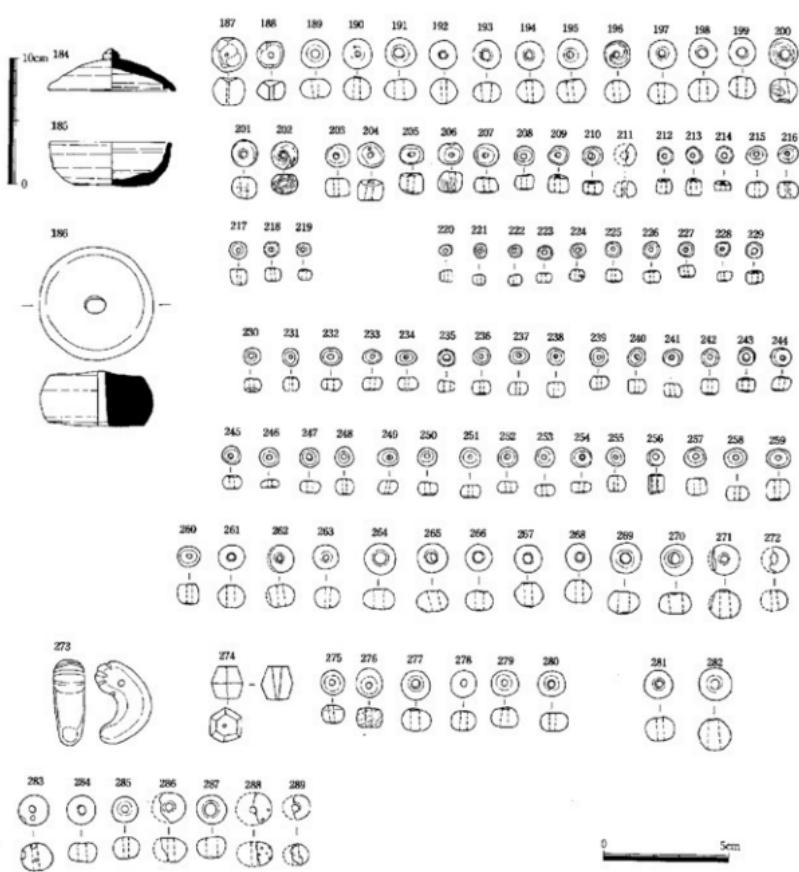


Fig. 43 4号墳石室出土遺物実測図1 (1/2・1/4)

装身具

耳環 (Fig. 44-290・291) 290は一部に破損が見られるものの、それ以外は良好に残存している。範があまり無く、銀色や白金色が斑になっている状況から、中実の銅芯に銀板を被せて鍍金した構造と推測される。接面に被せ板を絞った様子が観察できる。

291は290と異なり、被せ板は一切見られない。銅の無垢である。腐食が著しく、表面に鍍金等の何らかの加工があったのかや、接面の状況は不明である。

それぞれの寸法はTab. 1に示すとおりである。

工具

刀子 (Fig. 44-292~301) ほぼ完形といえる293の他、切っ先や基の端部を欠いたものが3点、茎・刃部・切っ先の破片が6点あり、少なくとも本来は5本以上存在していたものと思われる。

295は刀子に含めているが、現存長で10.4cmあり、刃部にしては非常に長いものである。

鉄鎌 (Fig. 44-302・303) 刃部302と柄に掛ける部分と思われる破片303がそれぞれ1点ある。303には僅かではあるが、木質の付着が見られる。

鉄斧 (Fig. 45-304) 有肩の袋状鉄斧である。刃部に近い部分の広範囲に錆瘤が見られる以外に破損は無く、非常に残りの良い資料といえる。

全長9.3cm、刃部幅4.2cm、現状で重さ157.2gを計る。

鍛冶工具 (Fig. 45-305・46-306・307) 当墳を特徴付ける遺物として、鍛冶工具が挙げられる。この鍛冶工具はセットで副葬され、しかも遺存状態が良好であり、今後古墳時代における北部九州の鉄器生産を考える上での重要な資料となるものと考える。

金槌 (305) は全長14.5cm、現時点での重量417gを計る。中央より若干上側に柄を通す隅丸長方形の穴があり、柄を固定する楔が残っている。

306は全長34.5cm、頭部は板状を呈し緩くL字に曲げている。そこから断面矩形の頭部を介して、袋状の基部に至る。袋部の最も広がった部分の内径は1.6cm、深さはX線写真などから約8cmと推測される。

当初周辺に類例が無く用途も不明であったが、幾つかの資料を手懸かりとして、鍛冶の際に使用する炭焼き棒という結論を得た。

袋部の合わせ目に長頭鎌の頭部が挟まっている。

鉗 (307) は全長33.5cm、先端から7.3cmの位置に鉛を通し、支点とする。図左側の握りが右側に比べて4cm程短くなっているが、端部に新しい破断面ではなく、早い時期に破損したか、あるいは当初から短かった可能性もある。

武器

刀・刀装具 (Fig. 47-308~322) 直刀刀身や茎部の破片が5片出土している。この中には茎部の破片が2点分あることから、複数の刀の存在が想定される。しかし、いずれの破片も層状剥離や錆瘤が発生し、原形をとどめていない。茎の端部が残る312も、闇の位置は判別できなくなっている。ただし茎部分は比較的の残りが良く、目釘や責金具、柄の木質などが観察できる。また、責金具の外面上に布と思われる織物の付着も見える。

更に刀装具として、鐔 (313)・鞘尻または鞘口金具や責金具 (314~319) がある。全て鉄製であり、内側に木質の付着が見られる。

320は花弁状をした銀製の飾り金具である。現存長2.2cm、最大幅1.8cmを計り、厚さは0.7mm前後と非常に薄い作りである。長片の片側に1mmに満たない程度の立ち上がりが観察され、この部材から

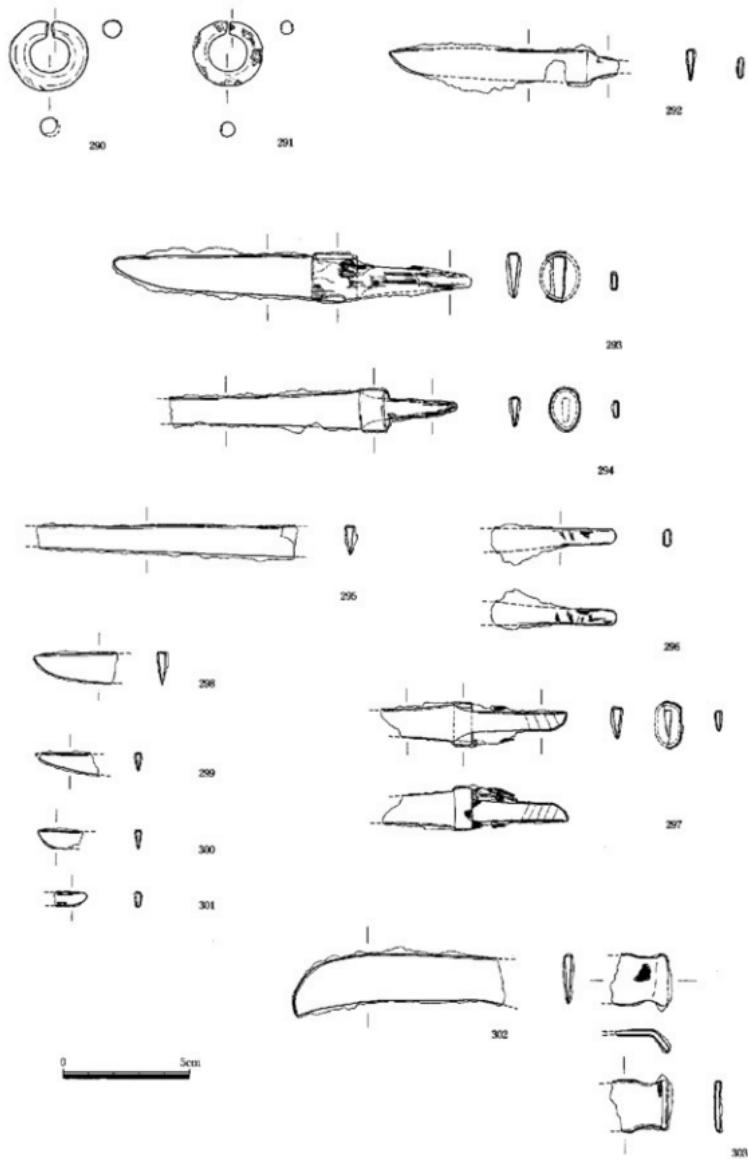
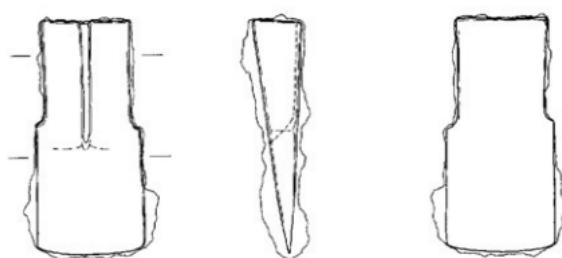
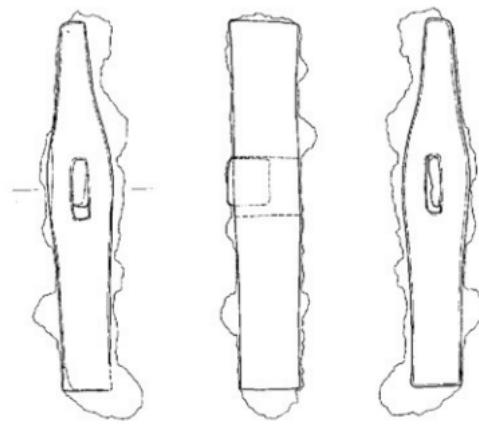


Fig. 44 4号墳石室出土遺物実測図 2 (1/2)



304



0 5cm

305

Fig. 45 4号墳石室出土遺物実測図3 (1/2)

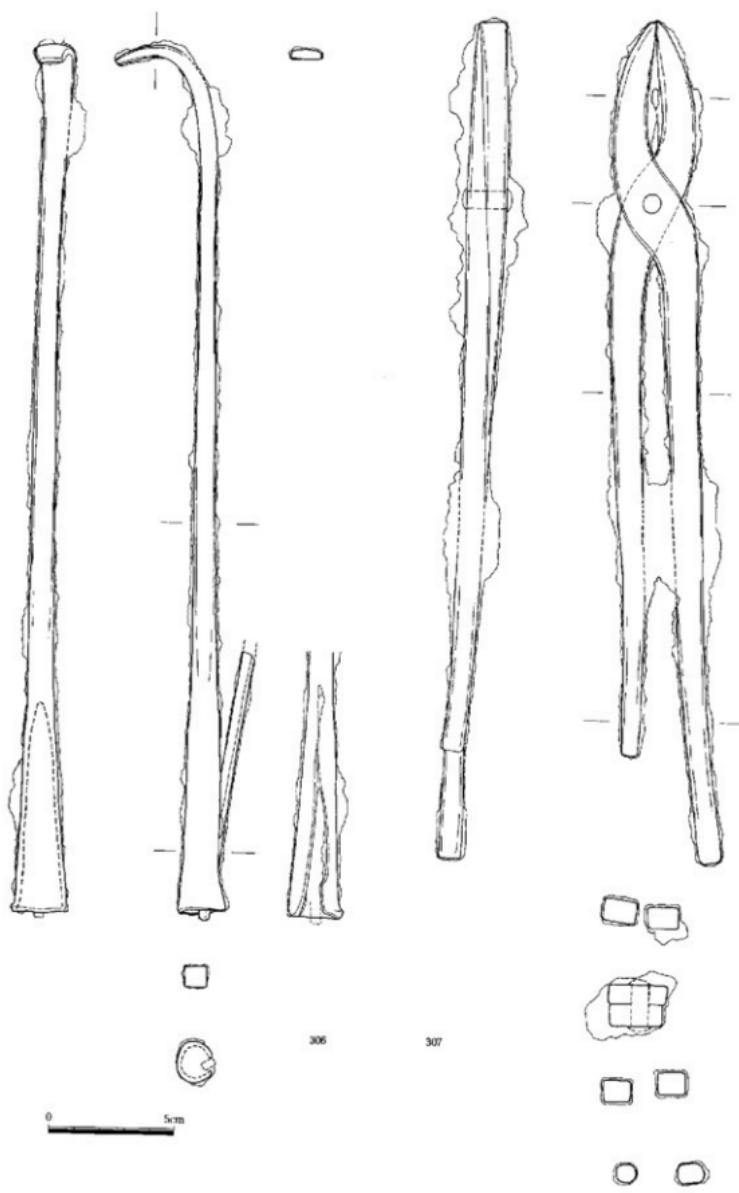


Fig. 46 4号墳石室出土遺物実測図4 (1/2)

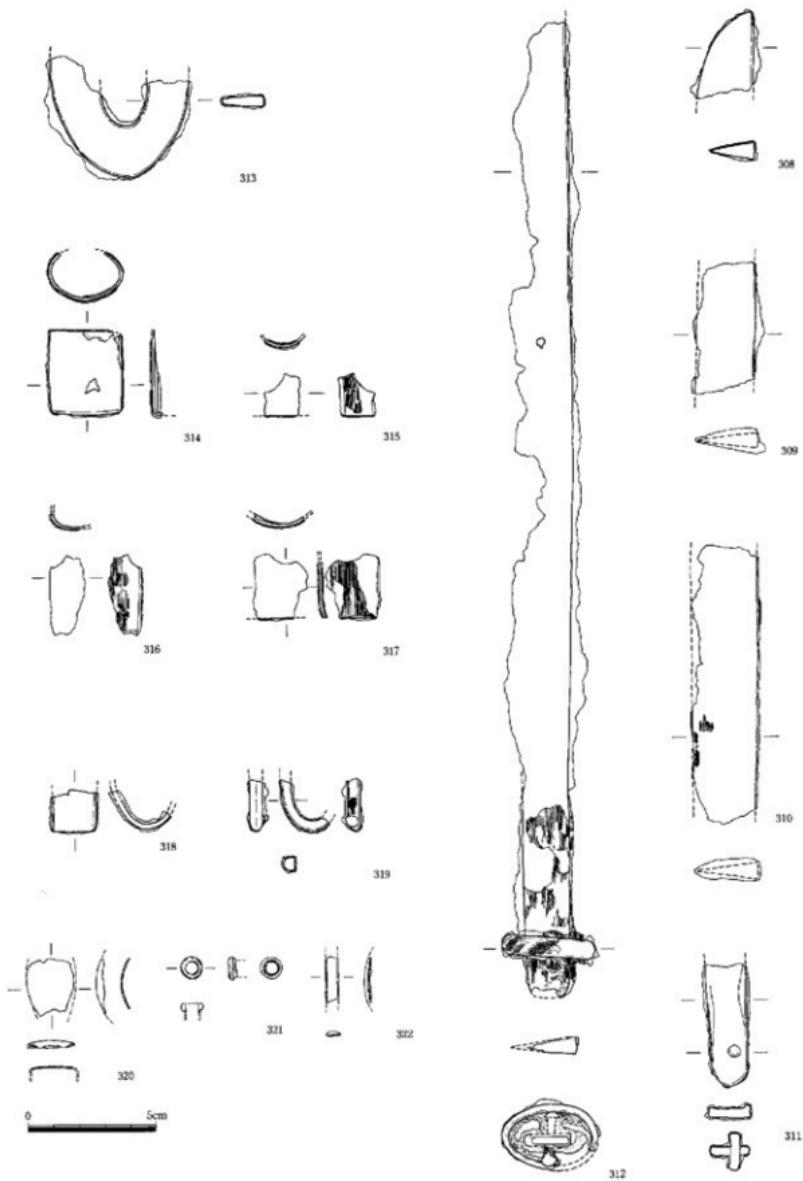


Fig. 47 4号墳石室出土遺物実測図 5 (1/2)

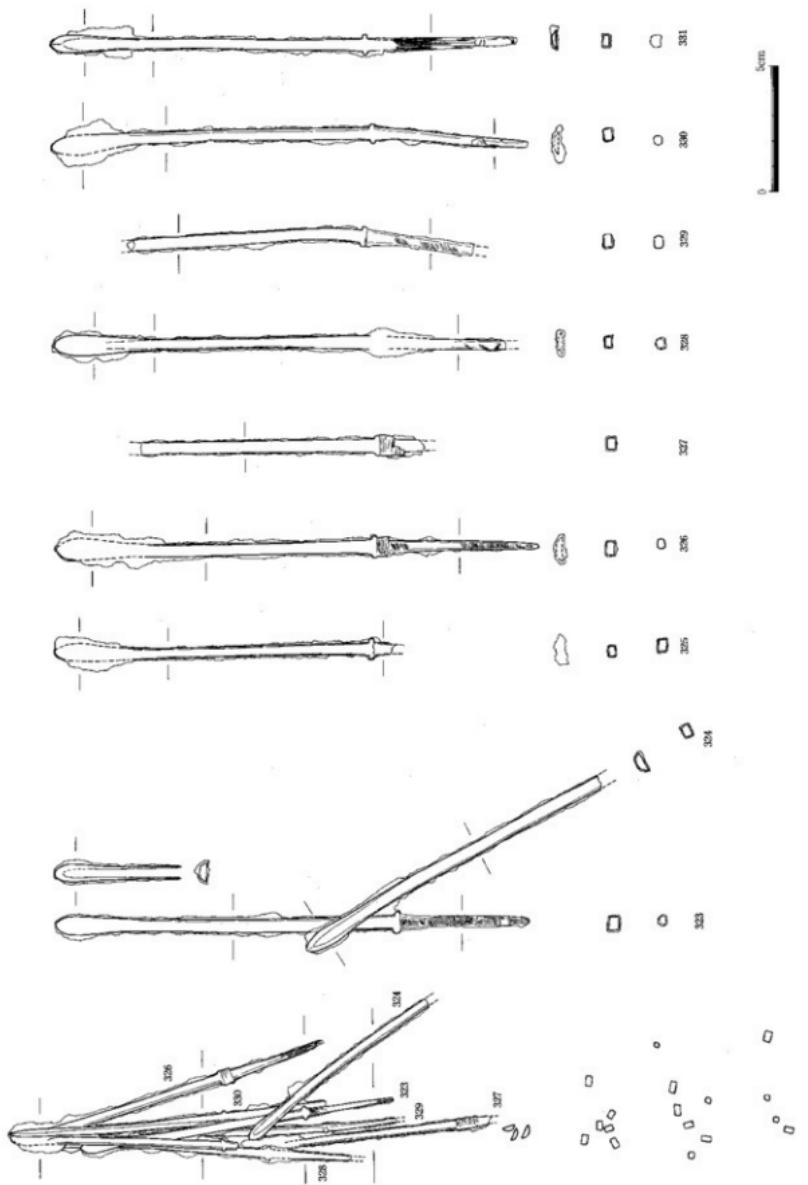


Fig. 48 4号坑石室出土遗物实测图 6 (1/2)

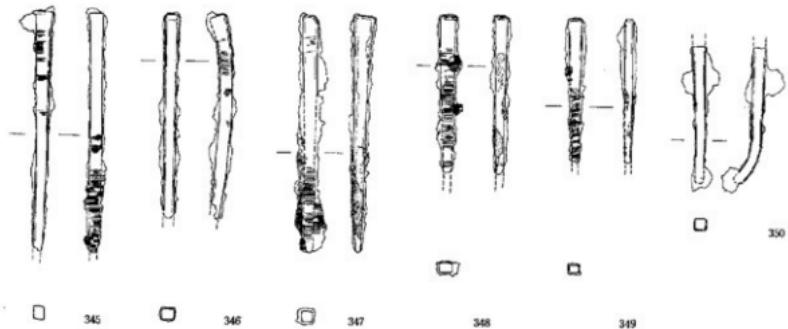
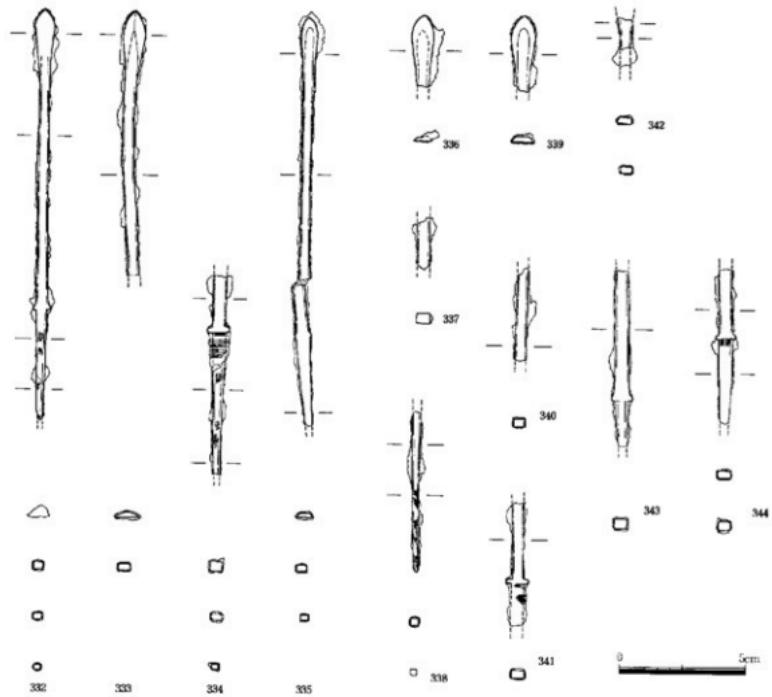


Fig. 49 4号墳石室出土遺物実測図 7 (1/2)

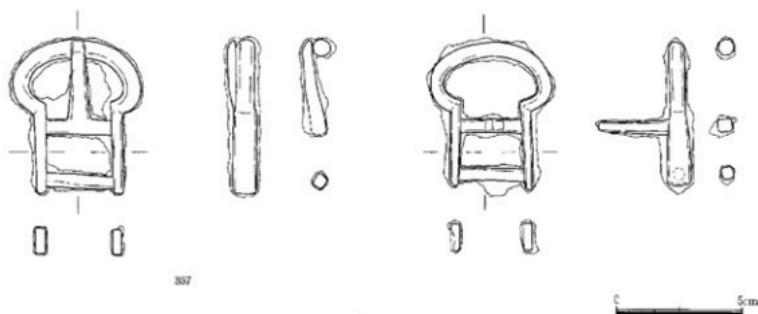
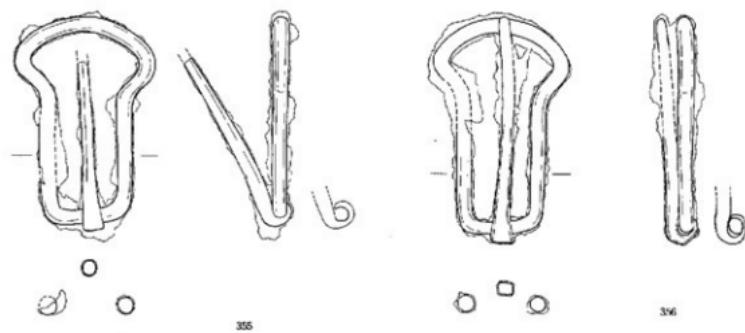
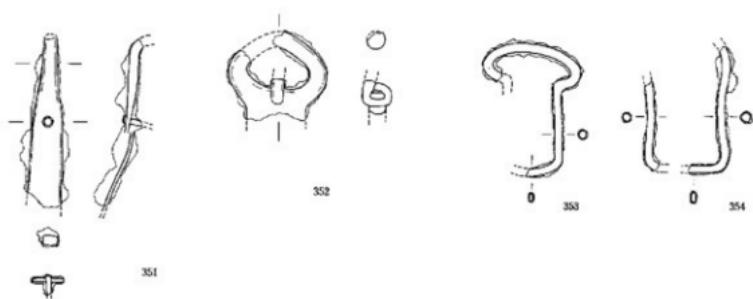


Fig. 50 4号墳石室出土遺物実測図 8 (1/2)

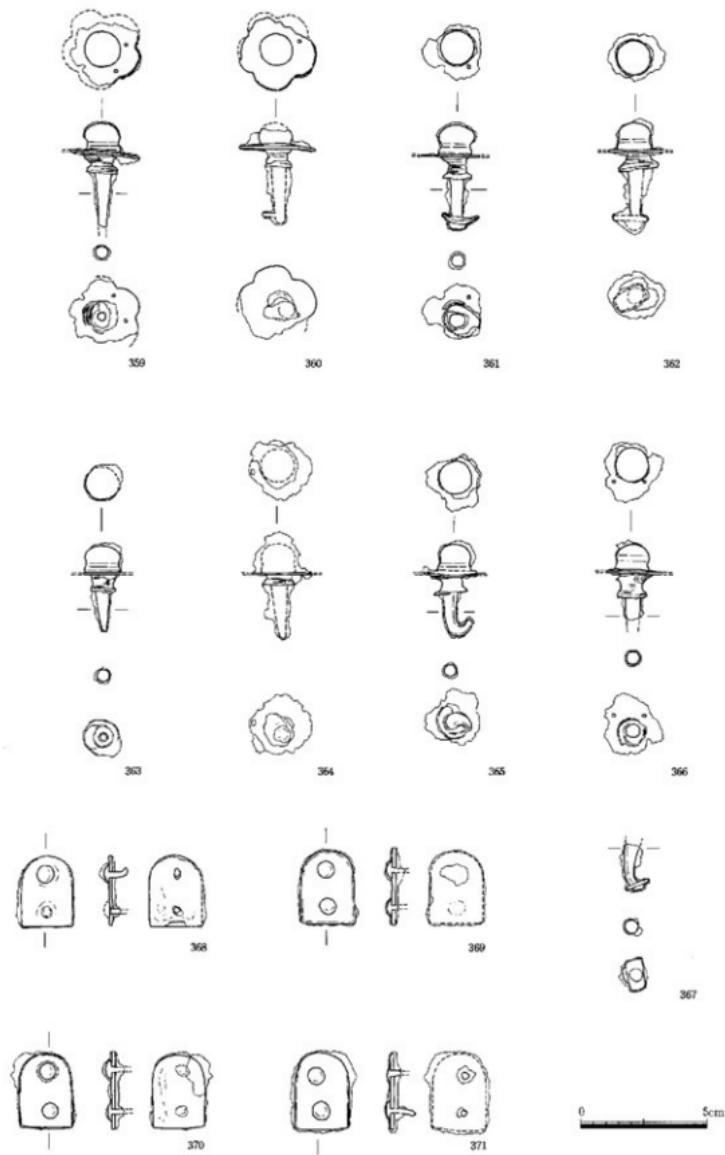


Fig. 51 4号填石室出土遺物実測図 9 (1/2)

90°に延びる面が存在したことが推測される。この形状や、これ以外に銅地に銀を被せたと思われる鱗目金具、銀製と見受けられる断面蒲鉾形の貴金属片があり、これらの存在から、この花弁状の銀製金具が圭頭大刀の柄頭頂部の断片であるという判断に至った。

鉄鎌（Fig. 48-323～49-344） 個体として確認できるものは関部で数えて全部で14本出土している。その他に破片が8点見られる。出土状況ではバラバラの状態であったが、保存処理の過程で、表層の鏽を除去した後に破片の接合を行ったところ、Fig.48の様に接合する一群が含まれていた。

これら鉄鎌は腐食が著しく、特に刃部や籠被部分といった微妙な部分は身近にX線撮影装置がない現状では正確な観察や鋸取りができず、今後に課題を残す結果となった。（平成11年度より埋蔵文化財センターにてX線撮影装置が稼働する予定であり、今後何らかの場で結果を改めて報告したい。）とりあえず現状で観察可能なものを見る限り、全て長頭の無闇鎌被鎌であった。また鏽の少ない部分から覗く頭部は非常に華奢で、細いものでは幅5mm、厚さ3mm程度しかない。

馬具

鎧金具（Fig. 50-351） 351は木製三角錐形壺蓋の吊り金具である。この資料は1号墳の墳丘上で表掲されたものであるが、1号墳では馬具の出土ではなく、金属器も刀子等數片があるにすぎない。隣接する4号墳で馬具のセットが確認されていることから、4号墳が盜掘された際の排土に混入したものと判断した。片側が完全に失われ、残っている側の下半も欠損し、鏽のため段差が生じているが、現存する部分で長さ6.7cmを測る。板状になっている部分の上端近くに鎧本体の木部を固定するための鉄が1本残る。

轡（Fig. 50-352） 352は鉄製釘具立圓環状鏡板付轡の釘具部分と考えられる。環状の鏡板につながる部分の破断面は鏽に覆われており、早い時期に鍛接部分から破損したものと思われる。この他に轡の部材と目される破片は見られない。

釘具・継（Fig. 50-353～358） 大型のもの4個体と、小型のもの複数個体分の破片がある。大型品は枠の部材を組合せて作る継2個と、一体型の枠に刺金を巻き付けるように組合せる釘具2個がある。釘具のうち大型品は鎧、小型品は頭繫にそれぞれ使用されたものと推測される。

飾金具（Fig. 51-359～367） 全部で9片8個体分出土している。（367は脚部の破片で、アタリは無いものの脚の短い366と同一個体を成すものと考えられる）

残存状況が悪く本来の姿を知る手懸かりは少ないが、金銅製の5弁の花形座金具中央に、宝珠形で鉄地金銅張の頭をもつ鈎状の金具を通した構造である。鈎状部分の下端には別造りの鉄板がはめ込まれているものや、屈曲しているものがあり、何らかのものを留めていたことが判る。

この金具は過去の研究によって、馬具の繫を留める金具とされているもので、元々は輪切りにしたイモガイ蝶頭の中央部に取り付けられていることから「イモガイ座飾金具」の名称が与えられている。本例の場合イモガイそのものは既に腐食して消滅しているが、鈎状の部品の花形座より下の部分に、幅5mm程度の何かが巻き付いていたような痕跡があり、その存在が確認できる。

腐食が著しく正確な値は得られなかったが、各部分の計測値はTab. 2のとおりである。

帶金具（Fig. 51-368～371） 鉄地金銅張爪先形（小ハゼ形）のものが4点出土している。いずれも鈎が縦に2本打たれている。4点ともほぼ同形同大を呈する。

その他

鉄釘（Fig. 49-345～349） 木棺の組み合わせに使用したと考えられる釘が5本出土している。いずれも木質が広範囲に付着しており用途を推測する手懸かりとなっている。

不明鉄器（Fig. 49-350） 長さ5.5cm、断面方形、太さ4mm角の鉄製品で、片側が緩くカーブしてい

る。鉄錆の頸部が破損したものとも考えられるが、決め手が無く不明としておく。

Tab. 1 耳環計測表

(単位 : mm)

計測部位 Fig No	A	B	C	D	E	F	G	H	I
2号墳 23-073	24.45	14.15	1.55	22.90	12.40	7.05	5.10	7.30	5.20
2号墳 23-074	23.70	13.30	1.65	21.85	12.10	6.90	5.35	6.90	4.80
2号墳 23-075	25.45	14.70	2.6+ α	24.15	14.10	8.0+ α	5.45	6.9+ α	4.80
2号墳 23-076	23.60	13.45	1.70	22.15	12.85	6.0+ α	5.05	5.7+ α	4.55
4号墳 44-291	30.10	16.60	1.80	27.00	14.00	7.0	6.75	7.40	6.30
4号墳 44-292	27.10	15.55	—	25.15	14.90	26.0+ α	5.60	—	—

Tab. 2 イモガイ座飾金具計測表

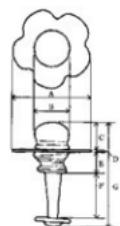
(単位 : mm)

計測部位 Fig No	A	B	C	D	E	F	G
51-359	27.85+ α	13.7	(11.6)	1.15	6.7	2.2	41+ α
51-360	30.0+ α	12.5	5.5+ α	1.0	6.2	19.3	32+ α
51-361	24.3+ α	14.0	(11.5)	0.8	7.7	11.1	(42)
51-362	21.5+ α	(13.5)	(10.8)	—	7.0	(13.5)	42.5
51-363	—	12.8	(11.0)	—	6.85	14.9+ α	34.4+ α
51-364	25.5+ α	(13.5)	(12.0)	1.1	4.6	22.5	(37)
51-365	24.0+ α	12.8	(10.0)	0.95	6.5	11.3	36.1
51-366	23.8+ α	13.5	10.5	0.9	9.9	9.5+ α	30+ α

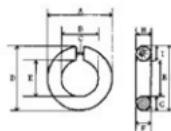
() は蔭を除いた推定値

Eは最大値

365の下は折り返し部分までの値



イモガイ座飾金具計測部位



耳環計測部位

5号墳

(1) 位置と現状

本古墳群の北端、最も低い標高30~35mの丘陵南東斜面に位置する。本墳の北西側は急に立ち上がるため築造可能な限界がこの地点となる。前述のとおり、墳丘東側(Ⅲ区、Ⅳ区)部分が切土工事によって掘削され、天井石を除去されている。また東側墳裾部下は道路によって削平されている。

(2) 墳丘

地山整形

石室は南北方向の等高線に平行に構築される。このため墳丘西側の斜面の掘削と墳丘基底面の整地が行われている。斜面の掘削は段状に行われている。墳丘を除去した時点では握りすぎてしまったが、土層断面からは溝状に削り出されていることがわかる。土留めのためであろうか。また3号墳の地山整形との前後関係は土層からは判断できなかった。同時期か近い時期に行われた可能性が考えられる。

墳丘

墳丘は本古墳群中においては遺存状況は悪く、天井石以上の盛土は削平されている。盛土は地山整形面、掘削下端から行われる。他と同様天井石が架かるレベルまでの盛土を行い、天井石架構後、最後に整形を行ったものと考えられる。Ⅲ・Ⅳ区(斜面下方)と石室掘り方内は比較的に細かく盛土される。外護列石はⅣ区の墳裾のみにみられる。墳丘の規模は主軸方向が7.8m前後、直交方向が8.6m前後と考えられる。

(3) 埋葬施設

5号墳の埋葬施設は主軸をN-37°-Wにとり、南に向かって開口する単室の両袖型横穴式石室で

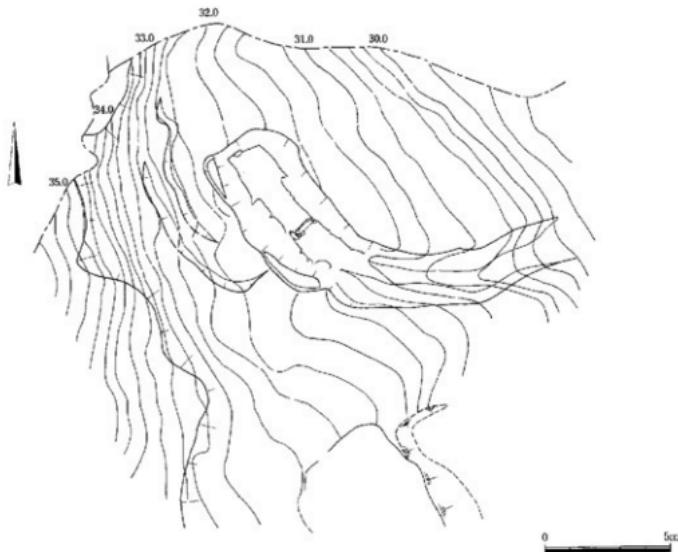


Fig. 52 5号墳地山整形測量図 (1/200)

あるが、袖はあまり張らない。羨道は玄室に対し、主軸をわずかに東に振る。羨道に連接する墓道は南東へ緩やかに曲がりながら延びていく。石室を構成する石材は全て花崗岩である。釘の出土から木棺の存在が考えられる。

石室掘り方

基本的には地山整形面からやや緩やかに掘削される。平面形は隅丸長方形を呈し、西隅2ヶ所にテラスが付設される。長さ5.9m、幅5.1mを測る。左右両壁は掘り方からやや間を開けて構築されるが、奥壁は掘り方に間をおかずに入り口を設けられている。最終的に腰石を除去できなかったために完掘していない。

玄室

奥幅1.4m、前幅1.65m、右壁1.6m、左壁2.0mを測る。壁体は奥壁は高さ1.5mの石材を1石用い、両側壁は幅1.6~1.8m、高さ0.8mの石材を各1石、横位に立てて腰石としている。腰石より上方は大ぶりの割石や転石を用い、右壁では水平方向に目路が通るように横積みされ、上方は小ぶりの石材が雜に積まれている。左壁は水平方向に横積みされるが、石材の形が不揃いのため隙間に小ぶりの石を詰め込むように積まれる。右壁に比べるとかなり雑な積み方となる。玄門部は石材を縱位に立て構成している。天井は1石使用したと思われる。床面は盜掘時に敷石が全て剥がされている。

羨道

羨道は良好に遺存する。玄室に対し、主軸をわずかに東に振る。右壁4.4m、左壁3.9m、奥幅1.1m、開口部1.0m、高さ1.3mを測り、東に向かい緩やかにカーブする。腰石は右壁、左壁とも2石用い、開口部に向かい上がっていい。腰石より上方は様々な形の石材を雜に積み上げ隙間に小さな石や粘土を詰め込んでいる。玄室とは逆に左壁に対し右壁のつくりが雑となる。仕切石は羨道中央に幅0.25m長0.9mの石材を用い、足りない左壁との間に0.4m大の1石を基盤面を掘り下げて据えている。なお玄門部では盜掘による搅乱のためか検出されなかった。床面は搅乱が激しいが仕切石付近に敷石が僅かに残る。天井は3石用いる。

墓道

墓道は比較的の良好に確認される。羨道に連接して南東へ緩やかに曲がりながら延びていく。幅1.8~3.0mを測り、長さ8m程まで確認できた。以降は不明瞭になり、旧流路によって削平される。

閉塞施設

仕切石の前面に10~40cm大の石材を積み上げ、下方に向かい石は大きくなる。現状で高さ0.8mが遺存する。

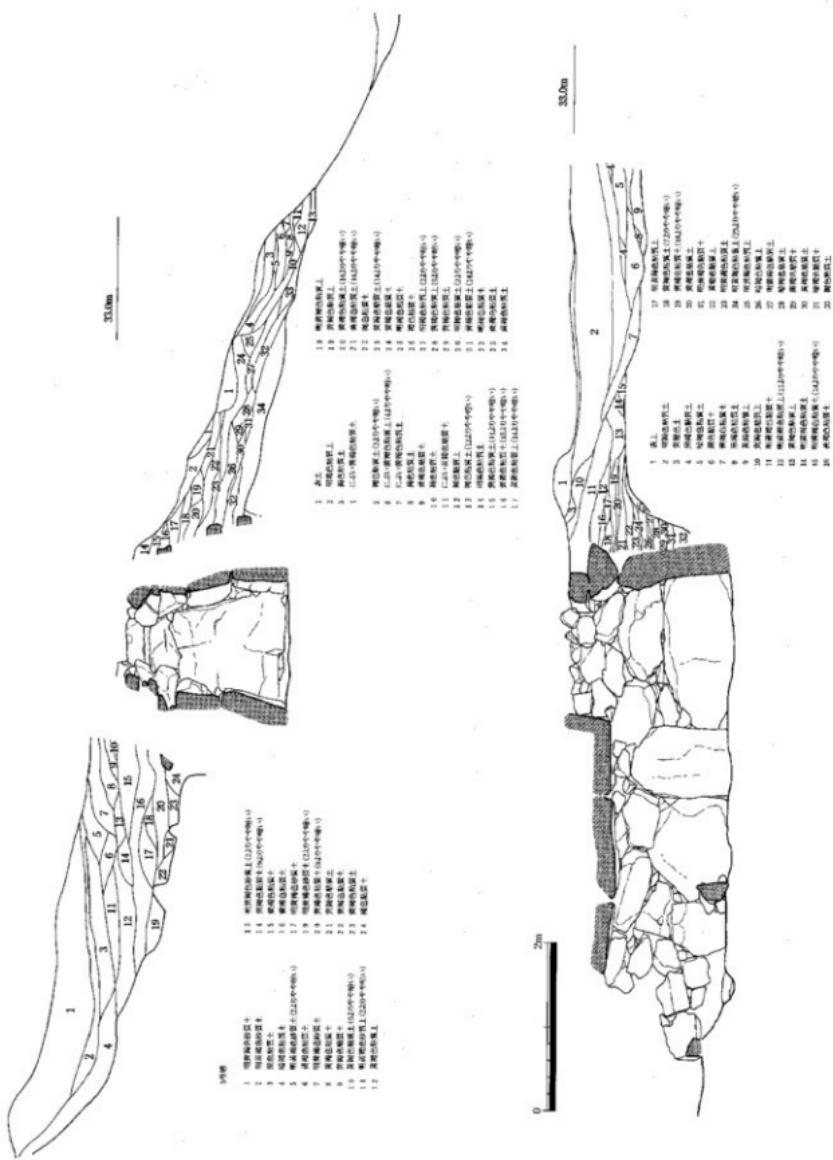


Fig. 53 5号墙墙压断面图 (1/60)

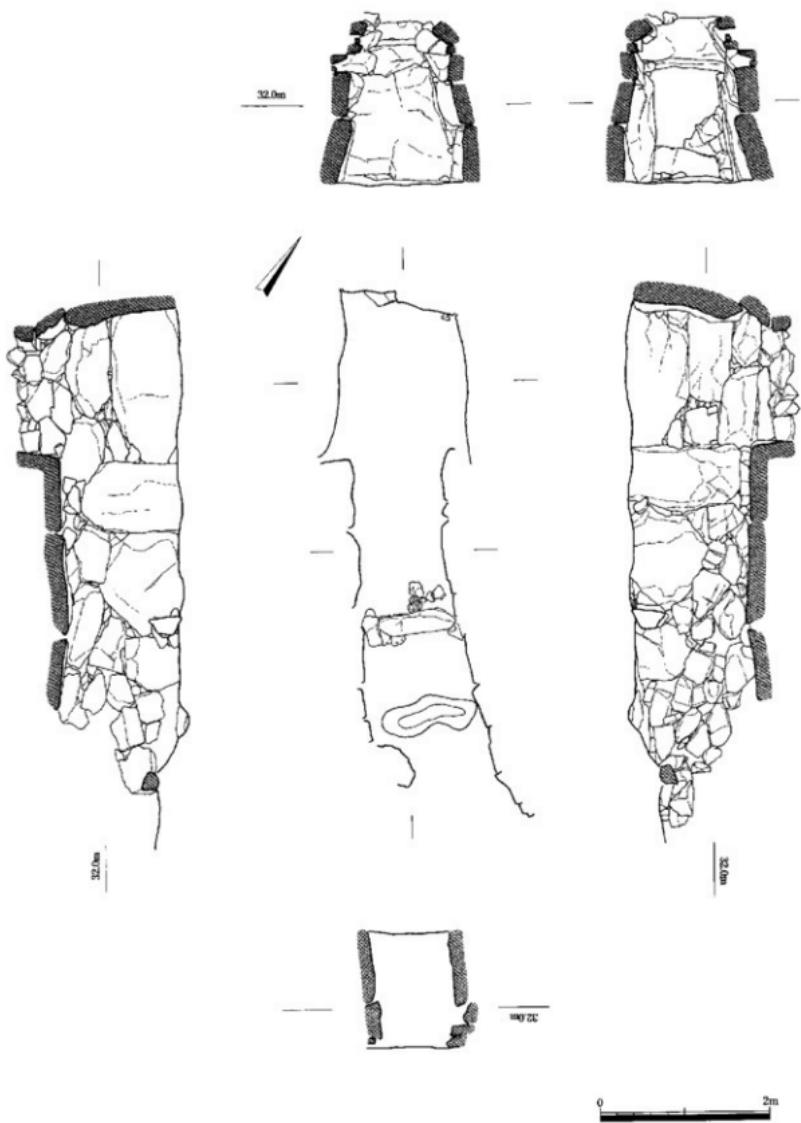


Fig. 54 5号墳石室実測図 (1/60)

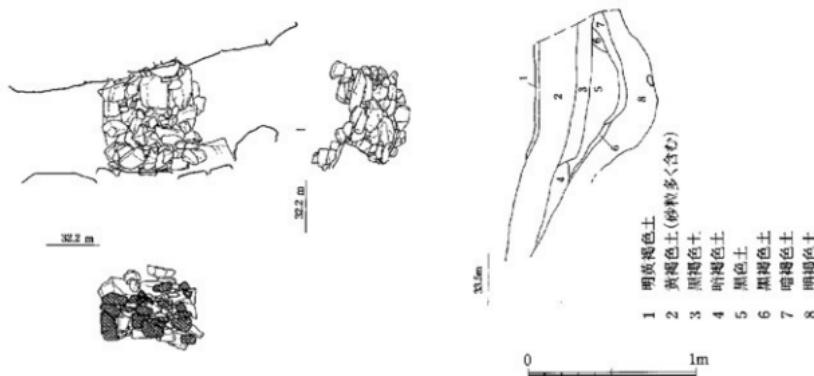


Fig. 55 5号墳閉塞部実測図 (1/40)

(4) 遺物

5号墳も他と同様、原位置を保って出土した遺物は少ない。特に玄室内の遺物は全て覆土の中のものである。玄室内及び羨道部からは須恵器の他耳環2点、釘等が出土している。墳丘上はI区とIV区に位置を保つものがある。(Fig. 56) I区の出土状況は祭祀行為を表したものであろうか。また墓道出土の須恵器には墳丘や石室出土のものに較べ古い様相のものが見られる。

(墳丘及び周溝出土遺物)

372～373は須恵器壺蓋である。口径13.8cm～18.0cm、器高4.5cm～4.6cmを測る。天井部はヘラケズリ、他はヨコナデを施す。373にはかえりを有し、天井につまみを付す。075は須恵器高环で、工事による擾乱土中より出土。原位置を留めていないが、さほど動いていないものと思われる。379付近に位置したものか。口径12.3cm、器高14.5cmを測る。調整は底部外表面がヘラケズリ、内面が不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。脚部はヨコナデを施すがシボリ痕が残る。375～378はI区出土。375は須恵器壺である。口径10.0cm、器高16.3cmを測る。焼成不良で器壁は荒れるが、底部付近はヘラケズリ、他はナデか。376は瓶である。口径10.0cm、器高12.0cmを測る。小ぶりな胴部をなし、頭部は途中で屈曲し、口縁に至る。胴部最大径よりやや上に穿孔する。調整は胴部下半はカキメ、他はヨコナデを施す。377～378は平瓶である。379はIV区出土。須恵器壺で口径42.0cm、器高89.3cmを測る。胴部は長く、底部はやや尖り気味になる。調整は口縁部が3段に区画され、上2段に櫛描き波状文、3段目に列点文が施される。胴部外表面は平行タタキ、内面は中位に平行タタキ、上下に青海波状の当て具痕が残る。焼成はやや悪い。380は土師器碗で復元口径14.0cmを測る。調整は外表面が斜め方向のヘラミガキ、内面が上位が横方向のミガキ、下位が縱方向のミガキを施す。381、382は上師器高环である。381は口径12.8cm、器高9.6cmを測る。器壁が荒れるが、壺部はヨコナデか。底部は筒部がケズリで裾部がナデを施す。

(石室内出土遺物)

工事により天井石が除去されていることから墳丘上の遺物が混入している可能性がある。383～385は須恵器蓋である。口径7.6cm～10.9cm、器高2.5cm～3.2cmを測る。天井部はヘラケズリ、他はヨコナ

テを施す。386～387は須恵器坏身である。羨道部出土。口径9.4cm～10.4cm、器高3.2cm～3.5cmを測る。底部外面は未調整、他はヨコナデを施す。386は外面に自然袖がかかる。387はヘラ記号を底部外面に付す。388、389は耳環である。肉眼による観察によるが、いずれも中実の銅芯金箔張りであると思われる。390～393は釘である。いずれも途中で欠損しており、全長は不明である。388～393は玄室覆土中からの出土である。

（墓道出土遺物）

墓道出土遺物はFig.56で出土状況を示したもの以外は流入土中からの出土であり、5号墳が低所に位置することから5号墳墳丘出土遺物及びその他各古墳墳丘出土遺物を含んでいる可能性がある。394～401は須恵器坏蓋である。口径10.2cm～13.6cm、器高3.9cm～4.4cmを測る。天井部はヘラケズリ、他はヨコナデを施す。394～396はヘラ記号を天井内面に、397から399は外面に付す。402～412は須恵器坏身である。口径9.4cm～12.2cm、器高2.9cm～4.8cmを測る。底部外面はヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、他はヨコナデを施す。408～409は底部外面は未調整。403～404はヘラ記号を底部内面に、405は底部外面に付す。394～396、403～404のヘラ記号を内面に付す一群は焼成具合、口縁端部にわずかに段がつく造りに共通性があり、加えてヘラ記号が同じであることから同一工人、あるいは同一工人集団によってつくられ、同時に焼成されたものと考えられる。413は平瓶である。口径7.6cm、器高12.6cmを測る。調整は胴部下半がヘラケズリ、他はヨコナデを施す。底部は未調整。414は盤である。焼成時の歪みが大きい。口径28.7cm、器高4.5cmを測る。調整は底部が粗いヘラケズリ、他はヨコナデを施す。焼成はやや悪い。417は横瓶である。卵形の胴部をなし、口頸部は直線的に開く。口径14.2cm、器高34.4cm、胴部最大径41.3cmを測る。調整は頸部に1条の凹線を巡らせ、他はヨコナデを施す。胴部外面は格子状タキ後カキメを施す。内面は同心円文の當て具痕が中央部では並列に残

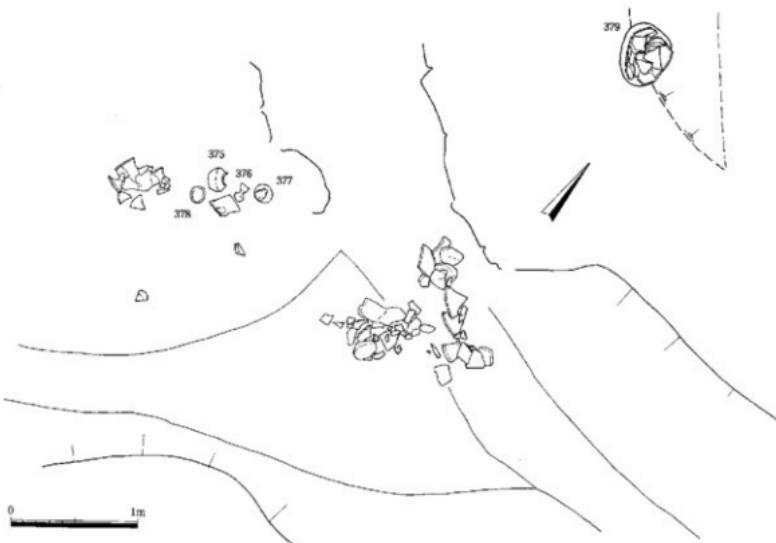


Fig. 56 5号墳遺物出土状況図 (1/40)

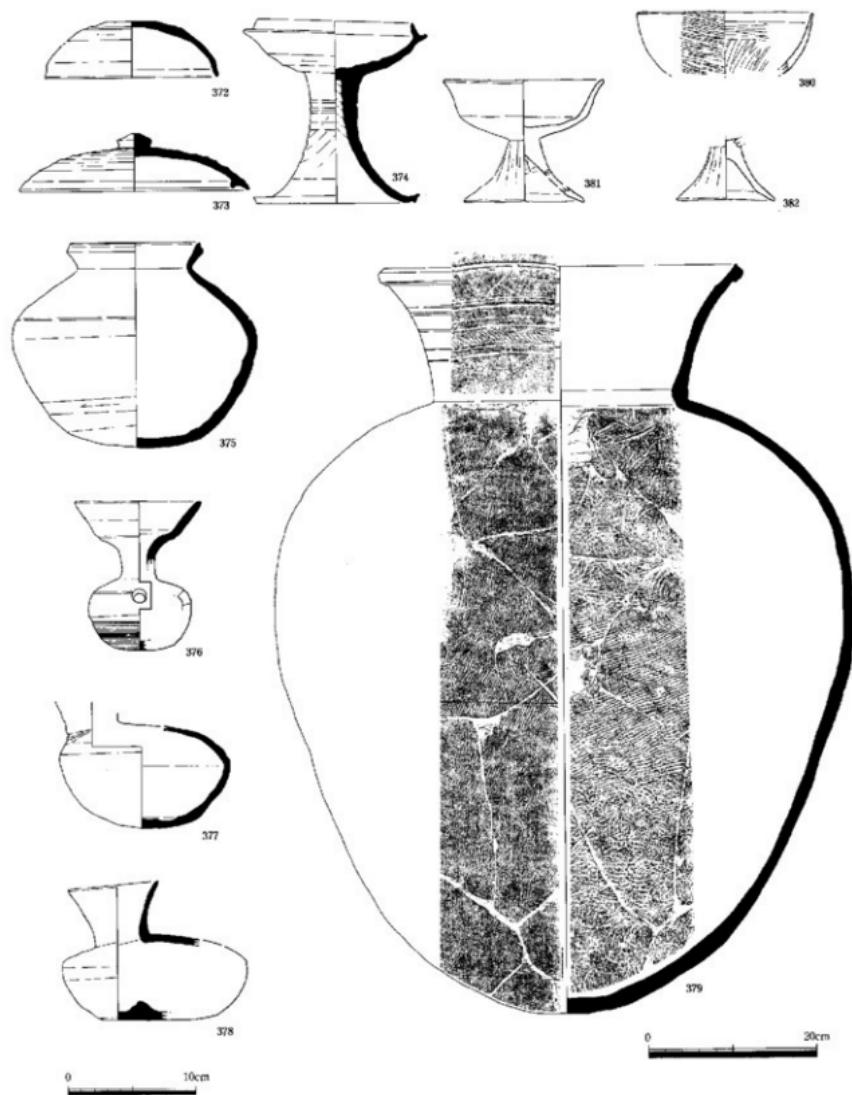


Fig. 57 5号墳出土遺物実測図 (1/4・1/6)

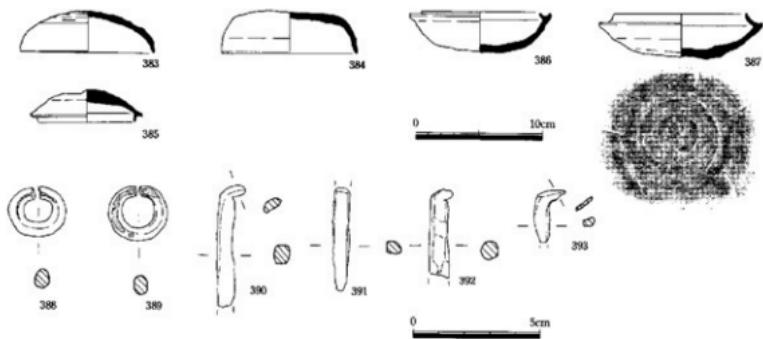


Fig. 58 5号墳石室出土遺物実測図 (1/4 · 1/2)

り、横に広がるにつれ青海波状になる。416は壺である。胸部最大径は上位にある。復元口径37.6cmを測る。頭部の上位はヘラ描き文、下位はカキメを施す。胸部外面は上位が格子状タタキ、下位が平行タタキとなる。内面は同心円文の当て具痕が残る。415は土師器高杯である。脚部は屈曲して開く。脚裾径10.4cmを測る。調整は筒部が縦方向のケズリ、柄部はヨコナデを施す。

その他の遺構と遺物

焼土坑

0 1号焼土坑

3号墳の東に位置する焼土坑である。主軸をN-78-Wにとる。長さ136cm、幅124cm、深さ45cmを測り、隅丸方形の平面形を呈す。壁面は僅かに焼け、底面には花崗岩の転石が露出している。遺物は須恵器の壺が1点出土している。時期的には近いと思われるが、3号墳に伴うものであるかは不明である。

0 2号焼土坑

調査区西の標高35m付近に位置する焼土坑である。主軸をN-26-Eにとる。長さ166cm、幅120cm、深さ35cmを測り、隅丸長方形の平面形を呈す。底には直径40cm程のピットが付設する。壁面は上位が焼け、底面はほんと焼けていない。下層の約5cmは炭化物層となり、ピットにも炭化物は詰まっていた。遺物は出土しなかった。どの古墳に伴うものであるかは不明である。

0 3号焼土坑

0 2号焼土坑の西に位置する焼土坑である。主軸をN-56-Wにとる。長さ158cm、幅100cm、深さ70cmを測り、隅丸長方形の平面形を呈す。壁面は上位が焼け、底面はほんと焼けていない。下層の約10cmは炭化物層遺物となる。は出土しなかった。どの古墳に伴うものであるかは不明である。

その他の出土遺物

墳丘盛土内やその下の黒色土中から古墳築造以前の遺物が数点出土した。418は磨製石剣である。1号墳墳丘盛土中から出土した。石材は頁岩で全長15.9cm、幅4.1cm、厚み0.8cm、刃部13cmを測る。全体に扁平で両側に非銳利な刃を形成する。基部は刃部から緩やかに細くなる。片方は丁寧に磨いて

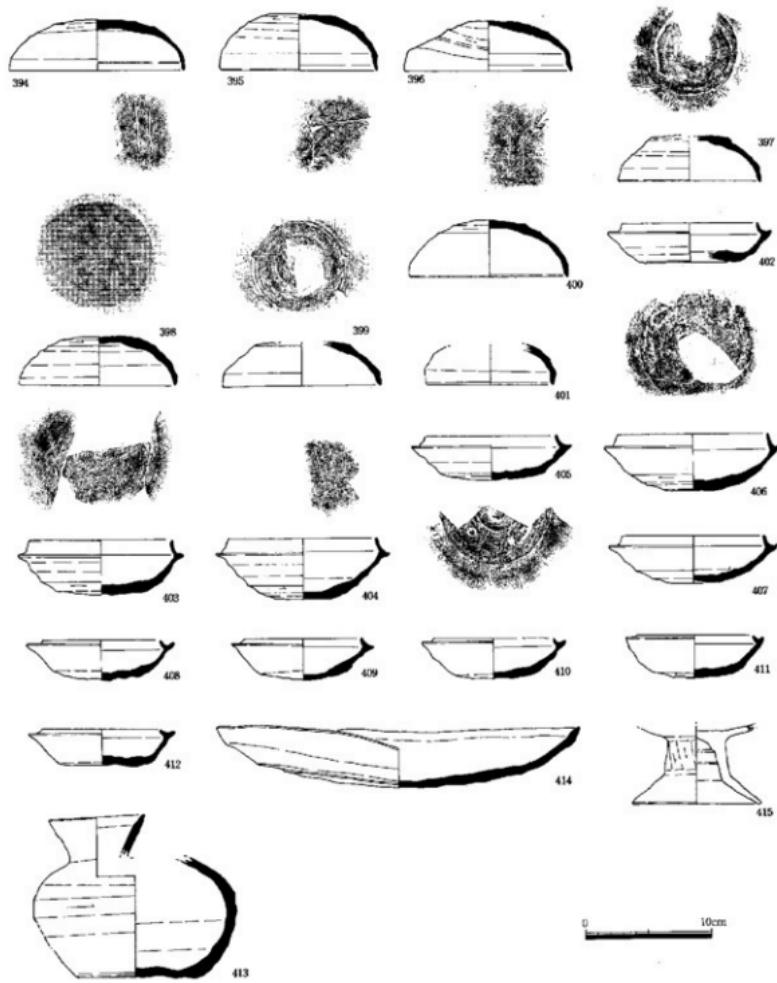


Fig. 59 5号墳墓道出土遺物実測図(1/4)

いるが、もう片方は割れ面を残す。他に弥生時代の遺物は出土しておらず、どの種の遺構に伴っていたのかは不明である。419は石匙である。安山岩を使用し、片側に刃部を形成する。背部は基部に衝撃を施す。刃部と背部に抉りが入る。全長8.9cm、幅3.1cm、重さ7.2gを測る。420は石鎌である。安山岩製で長さ2.6cm、幅1.9cm、重さ1.28gを測る。421は縄文粗製深鉢片である。時期は明確ではないが、後期から晩期前半であろうか。胎土は淡い橙白色を呈し、2~3mmの白色砂を多量に含んでいる。内外面共に幅4mm程のスサ状の植物痕がみられる。

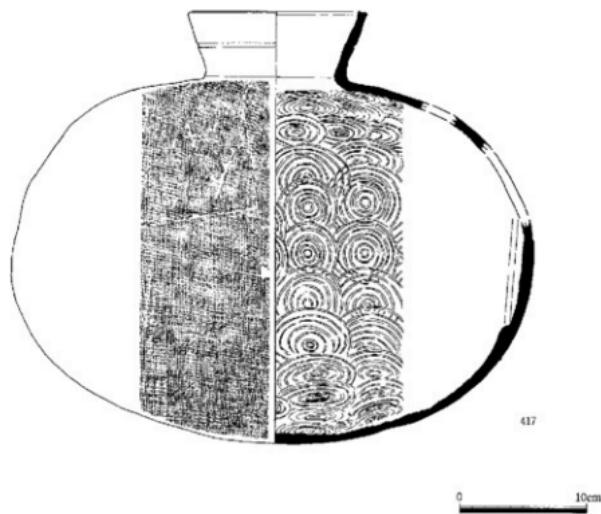
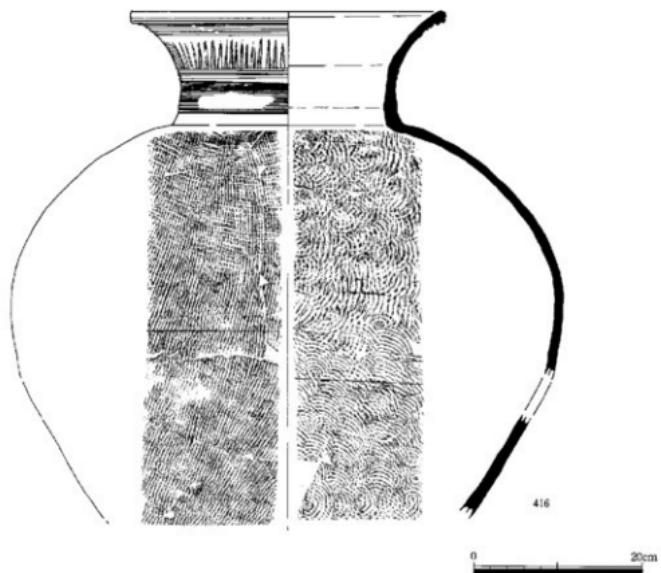


Fig. 60 5号墳墓道出土遺物実測図2 (1/6・1/4)

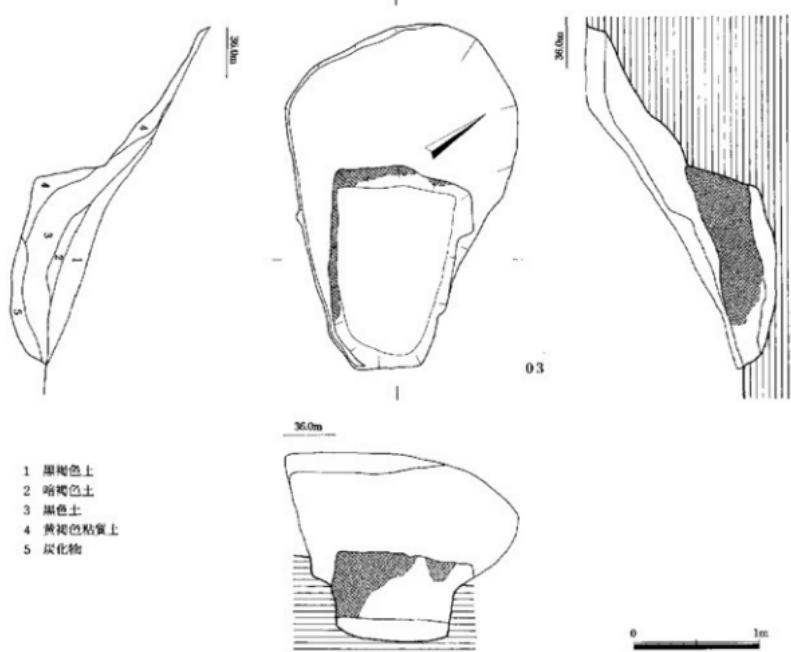
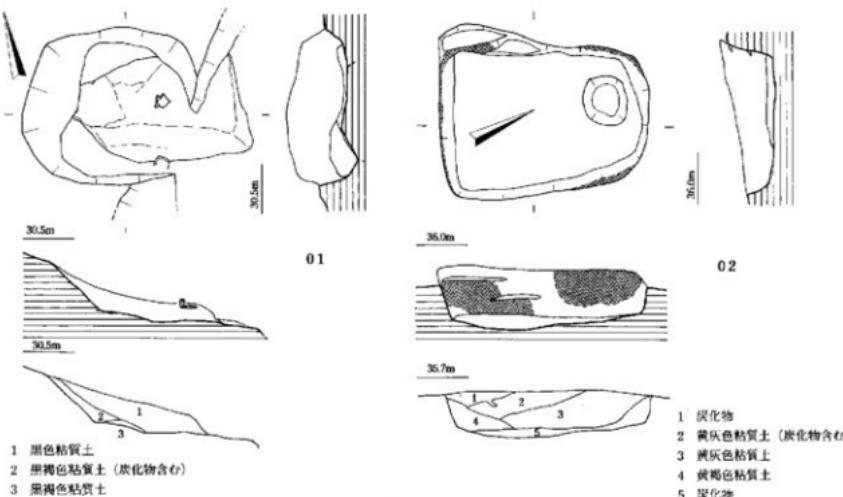


Fig. 61 01~03 墓土坑实测图 (1/40)

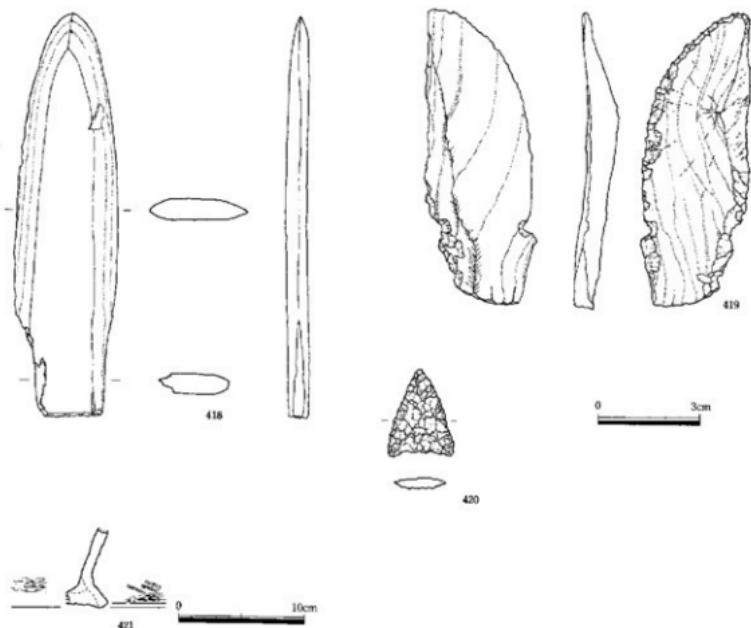


Fig. 62 その他の遺物実測図 (1/2・1/4)

4号出土玉類一覧						
遺物番号	種別	出土位置	法量(径×厚mm)	孔 径	色 情	備 考
187	瑪瑙玉	玄室上	18.5×11	—	暗赤褐色	
188	瑪瑙玉		11×8	1.5	暗赤褐色	
189	ガラス丸玉	玄室	12×7.5	3	濃紺	
190	ガラス丸玉	玄室	12×9	—	緑	
191	ガラス丸玉	玄室	12.5×8.5	3.5	緑	
192	ガラス丸玉	玄室	11×10	2	緑	
193	ガラス丸玉	玄室	12×8	4	緑	
194	ガラス丸玉	玄室	11×9	2.5	緑	風化著しい
195	ガラス丸玉	玄室	12×10	2.5	緑	気泡まんべんなく含む
196	ガラス丸玉	玄室	11×9	3	緑	表面に擦方向の傷あり
197	ガラス丸玉	玄室	12×8.5	2.5	緑	表面に擦方向の傷あり
198	ガラス丸玉	玄室	12×9	3.8	緑	表面に擦方向の傷あり
199	ガラス丸玉	玄室	10×8.5	4	緑	表面に擦方向の傷あり
200	ガラス丸玉	玄室	11.5×10	4	緑	表面に擦方向の傷あり
201	ガラス丸玉	玄室	11×9	3	緑	表面に擦方向の傷あり
202	ガラス丸玉	玄室	10×8	3	緑	表面に擦方向の傷あり
203	ガラス平玉	玄室	10×7	1.5	緑	表面に縦方向の傷あり
204	ガラス平玉	玄室	11×8	2.5	緑	表面に縦方向の傷あり
205	ガラス平玉	玄室	9.5×8	2.5	濃緑	表面に縦方向の傷あり
206	ガラス平玉	玄室	10×8.5	2.5	緑	表面に縦方向の傷あり
207	ガラス平玉	玄室	10×6.5	3	緑	表面に縦方向の傷あり
208	ガラス丸玉	玄室	8×5.5	2	緑	
209	ガラス平玉	玄室	8.5×7	2	緑	
210	ガラス小三	玄室	7.4×5.3	2.7	コバルトブルー	表面に縦方向の傷あり
211	ガラス小三	玄室	小判×6.2	2.5	コバルトブルー	孔内に詰いて穿った痕あり
212	ガラス平玉	玄室	7×6	1.8	濃緑	
213	ガラス平玉	玄室	6.5×7	2	緑	
214	ガラス平玉	玄室	7.4	1.8	緑	

215	ガラス小玉	玄蜜	7.9×6.1	1.9	コバルトブルー
216	ガラス小玉	玄蜜	7.7×6.1	2	コバルトブルー
217	ガラス小玉	玄蜜	6.8×5.8	1.3	コバルトブルー
218	ガラス小玉	玄蜜	6.5×4.5	2	コバルトブルー
219	ガラス小玉	玄蜜	5.3×4.2	1.8	やや黄みかかった水色
220	ガラス小玉	灰透(玄蜜)	4.8×4.6	1.3~1.9	やや黄みかかった水色
221	ガラス小玉	透道(玄蜜)	5.2×4	2	コバルトブルー
222	ガラス小玉	透道(玄蜜)	5.4×4	1.4	コバルトブルー
223	ガラス小玉	透真(玄蜜)	6.2×8	2.2	コバルトブルー
224	ガラス小玉	透道(玄蜜)	6.2×4.3	2	コバルトブルー
225	ガラス小玉	透真(玄蜜)	6.3×4.8	1.5	コバルトブルー
226	ガラス小玉	透道(玄蜜)	6.5×4.5	1.5	コバルトブルー
227	ガラス小玉	透道(玄蜜)	6.1×4.1	1.9	コバルトブルー
228	ガラス小玉	透道(玄蜜)	5.9×3.7	1.5	コバルトブルー
229	ガラス小玉	透道(玄蜜)	6.4×4.7	2.3	コバルトブルー
230	ガラス小玉	透道(玄蜜)	6.6×4.9	2.4	コバルトブルー
231	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.1×5.1	1.6	コバルトブルー
232	ガラス小玉	透道(玄蜜)	8.1×4.4	2	コバルトブルー
233	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.4×4.4	2	コバルトブルー
234	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.9×5	1.4	コバルトブルー
235	ガラス小玉	透道(玄蜜)	6.8×4.7	2.8	コバルトブルー
236	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.2×5.2	1.7	コバルトブルー
237	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.7×5	1.7	コバルトブルー
238	ガラス小玉	透道(玄蜜)	6.8×5.5	2	コバルトブルー
239	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.5×5.1	1.8	コバルトブルー
240	ガラス小玉	透道(玄蜜)	6.9×5	2.1	コバルトブルー
241	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.0×5.3	1.9	コバルトブルー
242	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.2×6.0	1.9	コバルトブルー
243	ガラス小玉	透道(玄蜜)	6.7×5.2	3.1	コバルトブルー
244	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.5×4.9	2.2	コバルトブルー
245	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.7×4.6	1.9	コバルトブルー
246	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.7×3.3	2.4	コバルトブルー
247	ガラス小玉	透道(玄蜜)	8.2×4.4	2.7	コバルトブルー
248	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.7×5.9	2	コバルトブルー
249	ガラス小玉	透道(玄蜜)	8.0×5.1	1.5	コバルトブルー
250	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.7×5.0	2	コバルトブルー
251	ガラス小玉	透道(玄蜜)	8.2×4.9	1.8	コバルトブルー
252	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.8×4.4	2.2	コバルトブルー
253	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.8×4.3	2	コバルトブルー
254	ガラス小玉	透道(玄蜜)	8.2×3.8	2	やや青味のコバルトブルー
255	ガラス小玉	透道(玄蜜)	7.6×5.9	2	コバルトブルー
256	ガラス小玉	透道(玄蜜)	6.6×7.1	2.5	コバルトブルー
257	ガラス小玉	透道(玄蜜)	8.5×6.7	2.6	コバルトブルー
258	ガラス小玉	透道(玄蜜)	8.8×5.4	2	コバルトブルー
259	ガラス小玉	透道(玄蜜)	9.3×7.9	2.3	コバルトブルー
260	ガラス小玉	透道(玄蜜)	8.9×7.3	2	コバルトブルー
261	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	10.3×8.6	3.4	コバルトブルー
262	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	10.9×8.4	3.5	明緑色
263	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	10×8.3	2.5~2.8	明緑色
264	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	12.5×7.2	4.7×5	明緑色
265	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	11.6×8	4.3	明緑色
266	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	11.1×8.1	3.6~4.5	明緑色
267	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	11×9.2	3	明緑色
268	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	11×9.1	3.7	明緑色
269	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	12.3×8.6	4.6	明緑色
270	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	1.31×8.1	4.3~5	明緑色
271	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	12×10	3.4×5.3	明緑色
272	ガラス丸玉	透道(玄蜜)	10×7.1	4.7	明緑色
273	翡翠丸玉	透道(玄蜜)			乳白色 非常に濃い緑
274	水晶	透道(透)	12×13	3.5	
275	ガラス丸玉	透道	9×7	1.5	無
276	ガラス平玉	透道	11×7.5	2.5	透
277	ガラス丸玉	透道	1.6×7.8	4.5	明緑色
278	ガラス丸玉	透道	11×7.6	2.6~3.9	明緑色
279	ガラス丸玉	透道	10.6×7.8	2.9~3.5	明緑色
280	ガラス丸玉	透道	10.9×7.1	2.7~3	コバルトブルー
281	ガラス丸玉	開光石	11.5×8.8	2.8~3.5	明緑色
282	ガラス丸玉	開光石	13.3×12	4.1~4.9	コバルトブルー
283	ガラス丸玉	開光上層	12.3×12	4.1~4.9	明緑色
284	ガラス丸玉	開光	11.5×7.5	3.7	明緑色
285	ガラス丸玉	墨道	10.5×8.5	3.2	緑色
286	ガラス丸玉	墨道	12.7×9.2	3.8	明緑色
287	ガラス丸玉	墨道	11.9×7.9	0.49	明緑色
288	ガラス丸玉	墨道	不明×8.9	2.8	明緑色
289	ガラス丸玉	墨道	9.8×8	3.2	緑色

終わりに

広石南古墳群A群は5基から成る古墳群である。今回の調査で5基全ての調査を行った。墳丘の残りが良かったためか盗掘は激しく、特に石室出土遺物は4号墳を除き原位置を保つものは少ないが、限られた資料から以下の項目について簡単に述べたい。

	石室構造	須恵器・土師器	須恵器型式	その他の遺物
1号墳	両袖单室	蓋、身、高坏、平瓶、甕、壺、罐	IV・V	管玉、丸玉、刀子
2号墳	両袖单室	蓋、身、高坏、平瓶、甕、壺、罐	III B・IV・V・IV	耳環、刀子、鉄族、釘
3号墳	片袖单室	蓋、身、高坏、平瓶、甕、壺	IV・V・IV	耳環
4号墳	両袖单室	蓋、身、高坏、平瓶、甕、壺	III B・IV・V	耳環、玉類、武器、鍛冶工具、馬具、釘
5号墳	両袖单室	蓋、身、高坏、平瓶、甕、壺、罐 提瓶、盤	IV・V・IV	耳環、釘

古墳の年代について

まず土器から見てみると須恵器はIII B期～IV期の古段階からIV期にかけて出土している。その上限は、3号墳は墳丘出土遺物がないためか、新しい傾向を示し、2、4号墳がやや古い傾向を示す。つぎに石室形態を比較すると、1～4号墳の石室規模はほぼ同じである。しかし、1号墳が羨道の一部が広くなり、複室を意識していること。3号、4号墳の石室が1・2号分と比べて形態が崩れています。2号墳も石室の左右横長が異なるが、これは広石南B群などでもみられ、普遍的なものと思われる。また、4号墳は2・3・5号墳に比べ左右両壁の目地が整っており、また天井石と楣石の段差が右壁の2段目の高さとあることから、他の古墳に比べ非常に丁寧な作りをしていることがわかる。5号墳は小型になり、新しい様相が見られる。羨道の配置状況をみると、各古墳とも基本的には谷に向かい延びていくが、その中で4号墳は1号墳、2号墳を、5号墳は3号墳を避けるようにそれぞれ配置されており、これらから考えると本古墳群の造営時期は6世紀後半以降の短い一定期間において築造され、1、2、4墳においては1号墳、2号墳、次いで4号墳、3、5号墳においては3号墳、5号墳の順に築造されたものと推定される。なお3号墳は2号墳に後出するものであろうが4号墳との先後関係については明確にできない。またその営まれた期間は7世紀後半が下限として考えられる。

被葬者の性格について

詳しくは比佐氏が4号墳出土遺物の分析から後述するが、やはりその出土遺物からみて鍛冶生産に関わった高位の集団であることは間違いない、4号墳以外はそれを示す遺物の出土はないものの、本古墳群が基本的には1群として捉えられることから全体に関して同様の被葬者像が想定されよう。広石南古墳群は6世紀後半に築造され始めた古墳群であり、そのころ全国的に増え始めた群集墳のひとつである。今宿平野側に開く谷に築造されていることから今宿平野に基盤を持つと思われる。

4号墳を除くと遺物が少ないため、不明瞭な点が多いが、最初に築造された1号墳も墳丘規模は周囲の古墳群でも大きな部類に入るため、ある程度の力を持っていたものと思われる。

4号墳は少なくとも2回の埋葬が行われているが、鍛冶道具や馬具は羨道の隅に寄せられ、綺麗な粘

土が上にかぶっているので、初葬時の遺物である可能性がたかい。それに対し、主頭太刀は壁に立てかけた状態で最終埋葬時に伴う可能性がある。ただ、太刀は少なくとも2本出土しており、初葬時に伴う可能性もある。馬具は他の古墳では櫛などの引部と鞍などの乗部に分かれるが4号墳ではまとまって出土しており、太刀・鉄鎌などと合わせると、軍事的な面で大和朝廷に従属していたと考えられる。今津から東にのびる海岸の砂浜には花崗岩に含まれる砂鉄が多く含まれており、砂浜を少し掘ると砂と砂鉄が互層になっている。この豊富な砂鉄を利用して古代から第2次大戦中まで製鉄が行われており、4号墳の被葬者は製鉄により、力を蓄えたのではないだろうか。その次の埋葬者は主頭の太刀や翡翠勾玉を持ち、引き続き古墳群の中の最有力者である。

古墳祭祀について

都合3基の焼土坑が確認された。01号焼土坑以外は遺物がなく時期が確定できず、またその立地状況からどの古墳に帰属するものか明らかにすることはできなかった。黒面の焼け方はいわゆる焼土坑に比べて弱いように思われ、さほど長い時間焼けていなかったのかもしれない。その他は石室構築時や墳丘盛土中など築造に伴う祭祀は確認できなかった。埋葬時の祭祀としては墳丘上での祭祀が行わされており、3号墳は墳丘が削られていたため不明であるが、2・3・4の各墳丘では、石室に向かって右側墳丘裾で祭祀を行っている。いずれも墳丘の同じ場所での祭祀は共通のルールがあったことを伺わせるが、場所の選択としては、道側から見えやすい、一番スペースに余裕が有るなどの理由と思われる。2号墳は須恵器高坏と壺を使用しており、高坏が転倒した状態で出土している。4号墳では須恵器大甕を窪みに安置しており、周囲で須恵器壺、金銅製の耳環が出土した。5号墳も須恵器大甕を安置している。3・5号墳で須恵器大甕を使用しているのに対し2号墳では僅かな窪みに置かれた壺と高坏が遺存していることから、須恵器大甕は使用していないものと思われる。したがって、大甕を安置した時期が最終埋葬時か墳丘築造時か特定は難しいが、3号・5号の墳丘祭祀に大甕を使用する共通点があることは確かであり、理由としてそれがほぼ同時期であったか、血縁的に近く同じ祭祀を行った可能性などが考えられる。

ヘラ記号について

他の古墳と同様、ヘラ記号の付された須恵器が多くみられる。蓋壺をみると118個中53個体、約5割についてヘラ記号が付されている。生産者側の都合で刻まれたものであることは確かであろうが、需用者側においてもそれを嗜好する何かがあったのであろうか。時期的にはⅣ期のものが大半を占め、以下の時期にはほとんど見られない。個別的に見ると5号墳出土の内面にヘラ記号を付す一群は前述したように型式、焼成、口縁端部のつくりに共通性がみられ、同一工人、あるいは同一工人集団によつて製作されたものと考えられる。ヘラ記号の意味の一つと考えられている「工人あるいはその集団を区別するもの」を示したものであろう。また2号墳出土の047は2つの記号が重なったものと思われる。付けられた時間にも差が見られ、先に付けられた方が整形後間もなく、後が乾燥が進んだ段階と考えられ、前者は工人を区別するもの、いわゆる窯印的なもので、後者がセット関係を表すためにつけられたものかもしれない。

広石南古墳群A群4号墳の位置付け ——出土の金属器を中心として——

4号墳出土の特徴的な遺物としては、まず鍛冶工具のセットを挙げることができる。古墳からの出土としては、松井和幸氏の集成（松井1991）にその後筆者が確認したものを含めて、全国で50例余りと、決して多いとは言えない。しかも、鉗・金槌がセットになったものは更に限られる。当然鍛冶に携わった被葬者を想定すべきであろう。

更に注目されるのは、今回鍛冶具に認定した棒状の遺物である。その根拠としては、鍛冶工具とセットで出土しており、武器・馬具類に該当するものがないこと、非常に少ないながらも類例が見られる事、筆者自身が鍛冶や製鉄実験を見学した際、道具の中に近いものが含まれていたことなどが挙げられる。

類例は、まず出土品ではなく民具で、広島大学文学部考古学研究室所蔵・保管製鉄関係資料目録の中に見ることができる（潮見1993）。ここには袋状の基部に木製の長い棒を挿した道具が幾つか掲載され、その中に先を屈曲させたものが2点ある（Fig. 64-1・2）。これを記した潮見浩、竹広文明の両氏は、双方とも炉内で製錬作業に用いる道具と考えている。寸法は1が鉄部のみで91.1cm、柄も含めると3mにも及ぶ。2は鉄部が約1m、柄を含めた全長は2m近いものである。名称は幾つかの資料を検討した上で推定として、1が「ゆなで」、2が「かぎやり」とし、更に細かい用途についてはそれぞれ文献からの引用として「ノロが落ちてくるのを搔いてのける道具」、

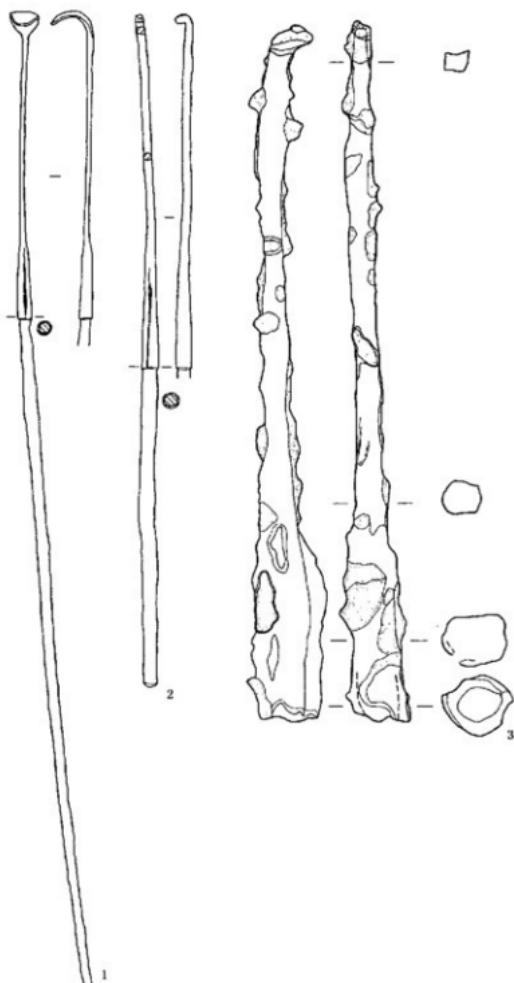
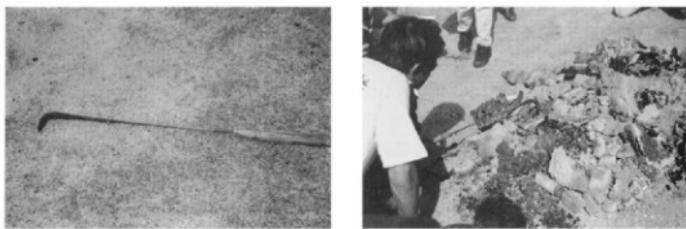


Fig. 63 鋤状工具の類例
1・2. 潮見1992より転載 (1/10)
3. 安田1990より転載 (1/2)



参考写真：平成9年10月、雁本町荒尾市にて開催された製鉄実験の際に撮影
実験を行った刀匠・松永源六郎氏所有の鉤状工具とその使用状況

「けらヲ湯池穴ヨリ引出ス」と記している。形状は特に1が広石南例に非常に近いものの、大きさにかなりの差が見られる。もう一つの類例は、福島県原町市の長瀬遺跡9号製鉄炉から出土した「鉤状鉄器」で、基部が袋状で先端が屈曲している（Fig. 64-3）。大きさも27.5cmと、広石南例に近い。しかし、長瀬例は先端が板状にならず、断面方形の棒状のまま若干細くなりながら屈曲する点で異なっており、形状的には先程の広大例の2に近いものである。時期は8世紀末～9世紀初頭の製鉄炉に伴う遺物とされている。用途は、報告書では製鉄に関わる遺物であろうと推測しながらも、具体的には解明されていない（安田1990）。これらの資料により、やはり広い意味での「鉄づくり」に関わる遺物であり、それが共伴する鉗・金槌により鍛冶に関連したものであることが言えるであろう。更にそれを裏付ける資料として、筆者が、鍛冶の実演や刀匠による製鉄実験の際に、刀匠の方々の作業道具の中に、全長1m程の鉄棒で、先端が板状になり屈曲している道具があり、これを炭を搔きならすのに用いているのを実見した。全部鉄の一品である点は異なっているが、広石南例も袋部の太さから考えられる柄はそれほど長くなく、片手で扱える範囲と思われることから、同様の用途であったと考えたい。

次に大刀がある。今回小片ながら、銀製の金具3種類を主頭大刀の柄頭と復元した（Fig. 63）。類例としては柄頭だけ見れば、埼玉県小見真觀寺古墳や京都府湯舟坂2号墳出土品に近いと思われる。主頭・方頭・円頭大刀といった袋状柄頭を有する装飾付大刀類は、滝瀬芳之氏により、畿内政権が地方勢力を支配下に置く際に下賜されたものという見解が示されており（滝瀬1986）、4号墳の被葬者もこれに該当することになる。ただし4号墳からは刀身が複数出土し、その他に

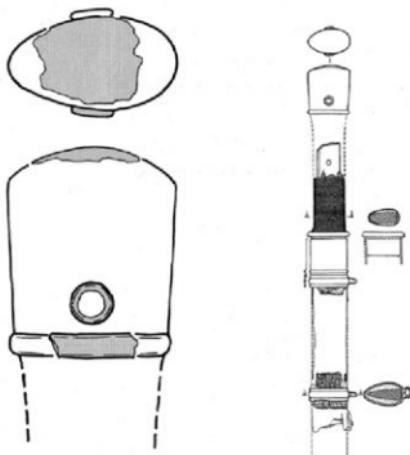


Fig. 64 主頭大刀復元想定図（アミ掛けは、出土した部分）
(右は京都府湯舟坂2号墳〔奥村1983より転載〕)

も鉄製の鞘金具や鍔も発見されているが、セット関係を解明する手懸かりは無い。また、柄に巻く銀線などの、それ以外の装具は無く、柄頭のみの装飾であったのか、盗掘で他の装具が失われたのかも不明である。

馬具も遺存状況が悪いながらも、鏡板・小型の鉗具・イモガイ座飾金具から成る頭繁・大型の鉗具と吊り金具から成る木芯三角錐形壺籠・鞍の存在から推定される鞍と、騎乗に必要なセットが揃った一式が確認できる。これら鉄製の鉗具付環状鏡板・吊り金具の短い鍔、イモガイ座飾金具は、先学の研究（岡安1984・齊藤1986・宮代1989）によって、古墳時代の後期～終末期の所産とされており、時期的にも同一のセットを見て間違いないであろう。また「イモガイ座飾金具」は、東国と九州に分布が集中することから、中央政権からの配布を想定する見解が出されている（宮代1989）、これは性格的に先程の大刀とも重なるものであり、注目される。

前述の通り、当墳からは非常に豊富で、貴重な品を含む副葬品の出土が確認できたが、これら副葬品組成の類例を探すと、銀治工具を除けば、京都府久美浜町の湯舟坂2号墳（奥村1983）、福岡県飯塚市川島古墳（嶋田1991）が非常に近いものが含まれている。両墳共、複数次の追葬があったものと思われ、大刀や馬具にタイプの異なる複数セットが見られるが、圭頭大刀やイモガイ飾金具、鉄地金銅張爪先形帶金、鉗具付環状鏡板など共通する要素が多い。双方共に、それぞれの地域を代表する首長墳的存在として位置付けられており、広石南A4号墳も当然これと勝るとも劣らない存在であったことが伺える。そして、鐵器生産に携わり、あるいはそれを統括し、尚かつ畿内政権と強く結びついた被葬者像が浮かび上がる。更にこの広石南A4号墳のすぐ近くには、やや変形ではあるが金銅装の単竜環頭大刀と、鉄地金銅張f字形鏡板付骨簪という、やはり畿内政権との結びつきを想起させる副葬品を持つ高崎2号墳があることも注目される（浜田1971）。この古墳は広石南の1または2世代前の首長墓と考えられるが、これらの古墳が、いずれも早良平野と今宿平野を画する峠沿いにあるということは、その本貫地もそこからそう遠くない場所であり、畿内政権が6世紀の中頃からこの地域の交通の要所を押さえようとする意図があったものと考えられるのである。この問題については周囲の古墳の状況をより多角的に分析する必要があり、今後機会があれば詳しく調べたい。

今回は、調査担当者である中村啓太郎・屋山洋の両氏には金属器の保存処理と同時に、報告の機会を与えていただいた。また処理、整理の段階では、下記の方々より有益な御教示をいただくことができた。文末ながら、記して感謝の意を表します。

大澤正己・大道和人・塚本敏夫・長家伸・古瀬清秀・松井和幸・宮代栄一・村上恭通・横田義章
(五十音順・敬称略)

引用・参考文献

- 岡安光彦 1984 「いわゆる『素襷の巻』について—環状鏡板付巻の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX
—古墳文化研究会—
- 奥村清一郎編 1983 『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 齊藤弘 1986 「古墳時代の壺籠の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 PHALANX—古墳文化研究会—
- 潮見浩輔 1993 『中国地方製鉄遺跡の研究』 漢水社
- 浅利芳之 1986 「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性巻」『考古学ジャーナル』266 ニューサイエンス社
- 浜田信也編 1971 『今宿ハ・イハ』ス関係埋藏文化財調査報告書 第1集 福岡県教育委員会
- 松井和幸 1991 「古代の鍔治具」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集
- 宮代栄一 1989 「いわゆる貝製装饰について」『鞍台史学』76 鞍台史学会
- 安田俊編 1990 『原町火力発電所衝造遺構調査報告書』 福岡県教育委員会 他
- 塙光一 1991 『川島古墳』飯塚市文化財調査報告書第14集 飯塚市教育委員会

図 版



調查前全貌



(1) 調査前全景



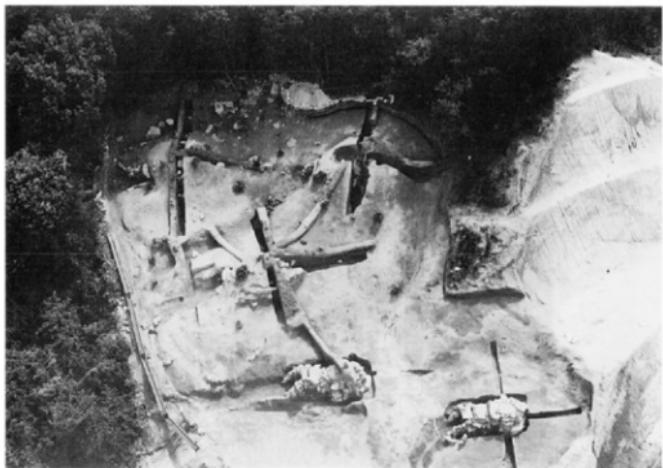
(2) 調査時全景



(1) 調査時全景



(2) 調査時全景



(1) 調査時全景



(2) 1号墳全景



(3) 1号墳外護列石（西から）



(1) 外護列石（北から）



(2) 1号墳石室奥壁



(3) 1号墳石室入り口



(4) 1号墳開口部



(5) 1号墳閉塞石



(6) 1号墳墓道遺物出土状況



(1) 2号埴石室全景



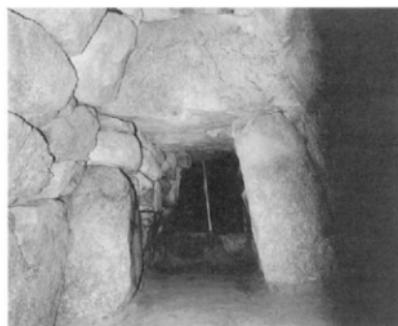
(2) 2号埴石室（東から）



(3) 2号埴北側土層



(4) 2号埴石室奥壁



(5) 2号埴石室入り口



(6) 2号埴開口部



(1) 3号墳調査前



(2) 3号墳全景



(3) 3号墳石室奥壁



(4) 3号墳石室入り口



(5) 3号墳閉塞石



(6) 3号墳墓道遺物出土状況



(1) 4号墳調査前



(2) 4号墳全景（西から）



(3) 4号墳開口部



(4) 4号墳東側土層



(5) 4号墳石室奥壁



(6) 4号墳閉塞石



(1) 4号墳漢道出土遺物



(2) 4号墳漢道出土遺物



(3) 5号墳調査前



(4) 5号墳全景



(5) 5号墳石室全景



(6) 5号墳石室奥壁



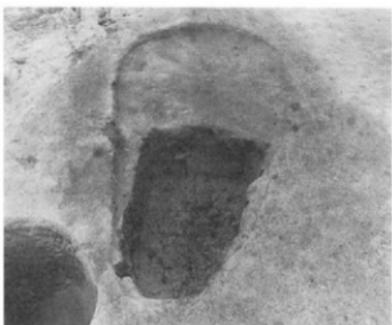
(1) 5号墳閉塞石



(2) 5号墳前庭部遺物出土状況



(3) SK 02 (東から)



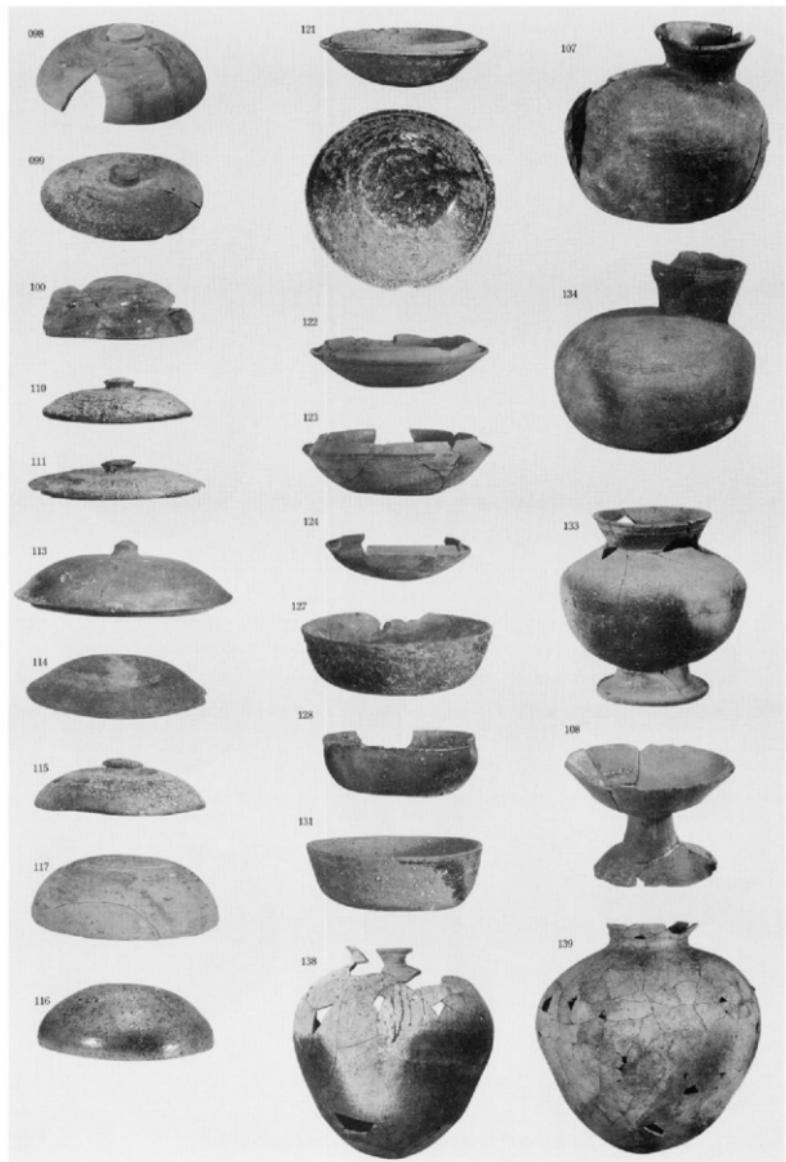
(4) SK 03 (南東から)



1号墳出土遺物



2号墳出土遺物



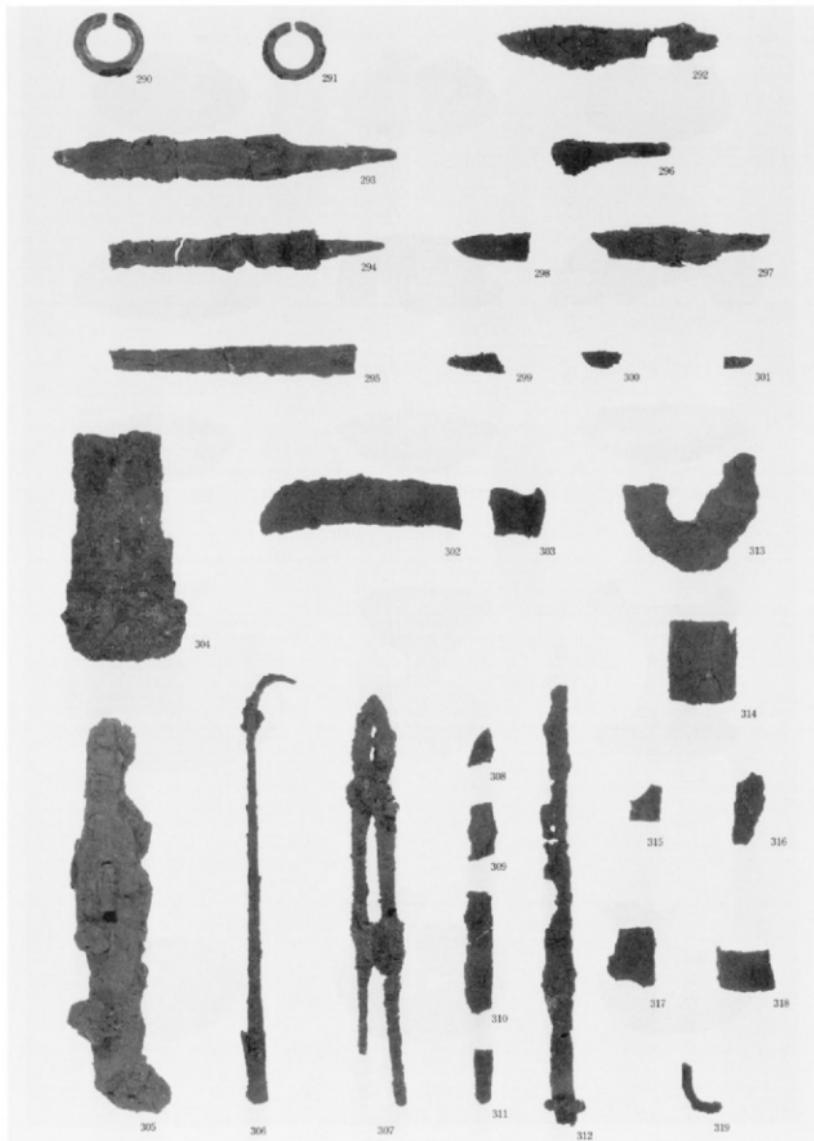
3号墳出土遺物



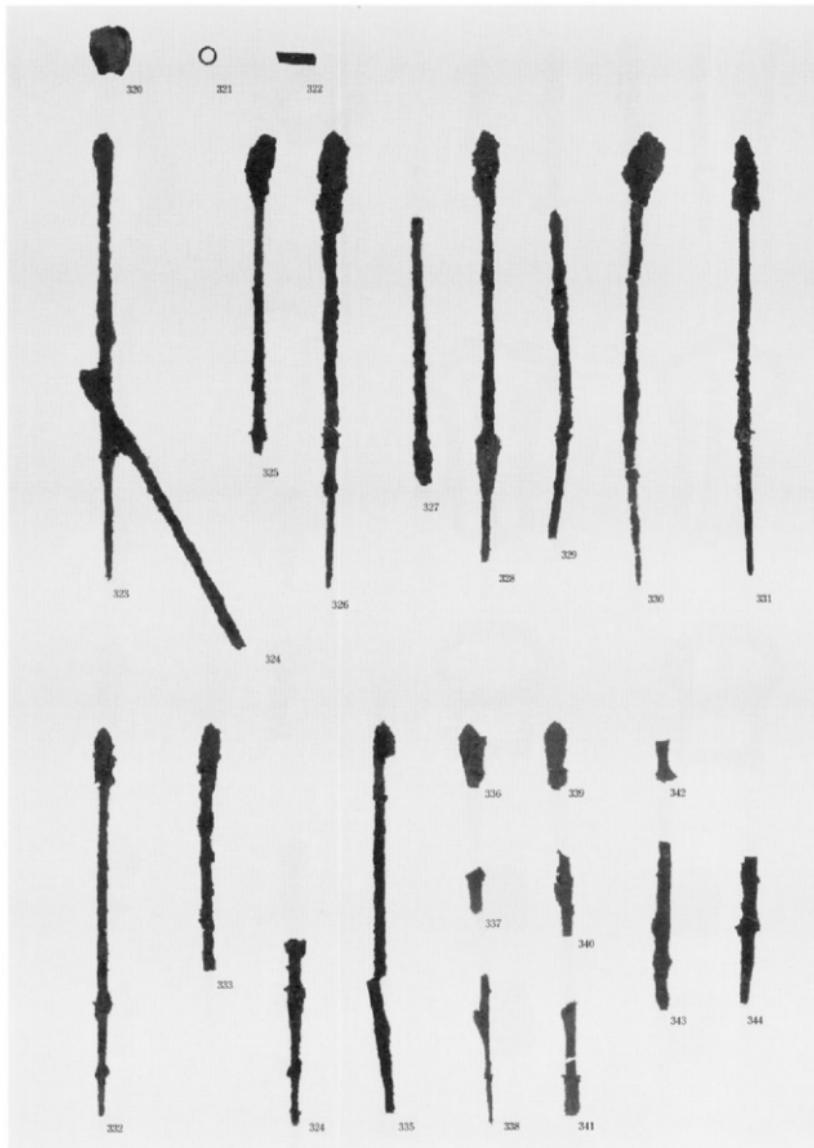
4号墳出土遺物



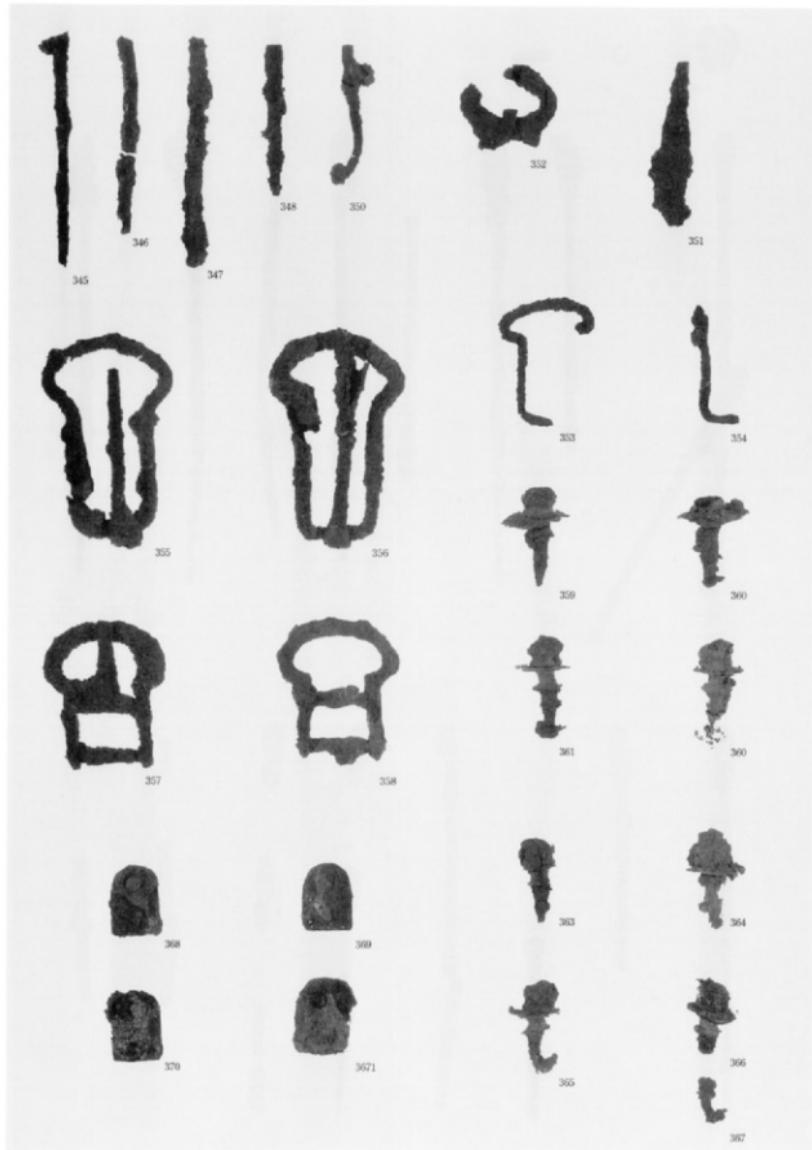
5号填出土遺物



4号填出土遗物



4号墳出土遺物



4号墳出土遺物

福岡市埋蔵文化財調査報告書第617集

広石南古墳群 A群

1999. 3. 31

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 富士印刷社

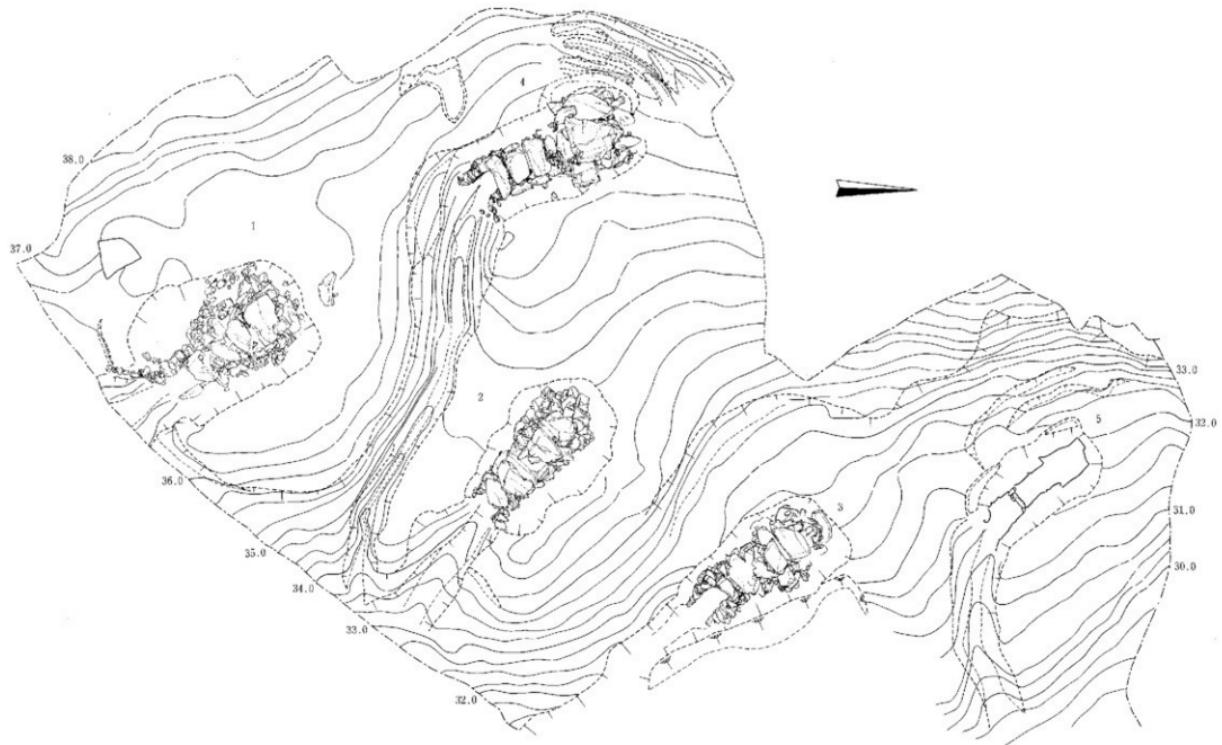
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番45-1

付 図

『広石南古墳群 A群』

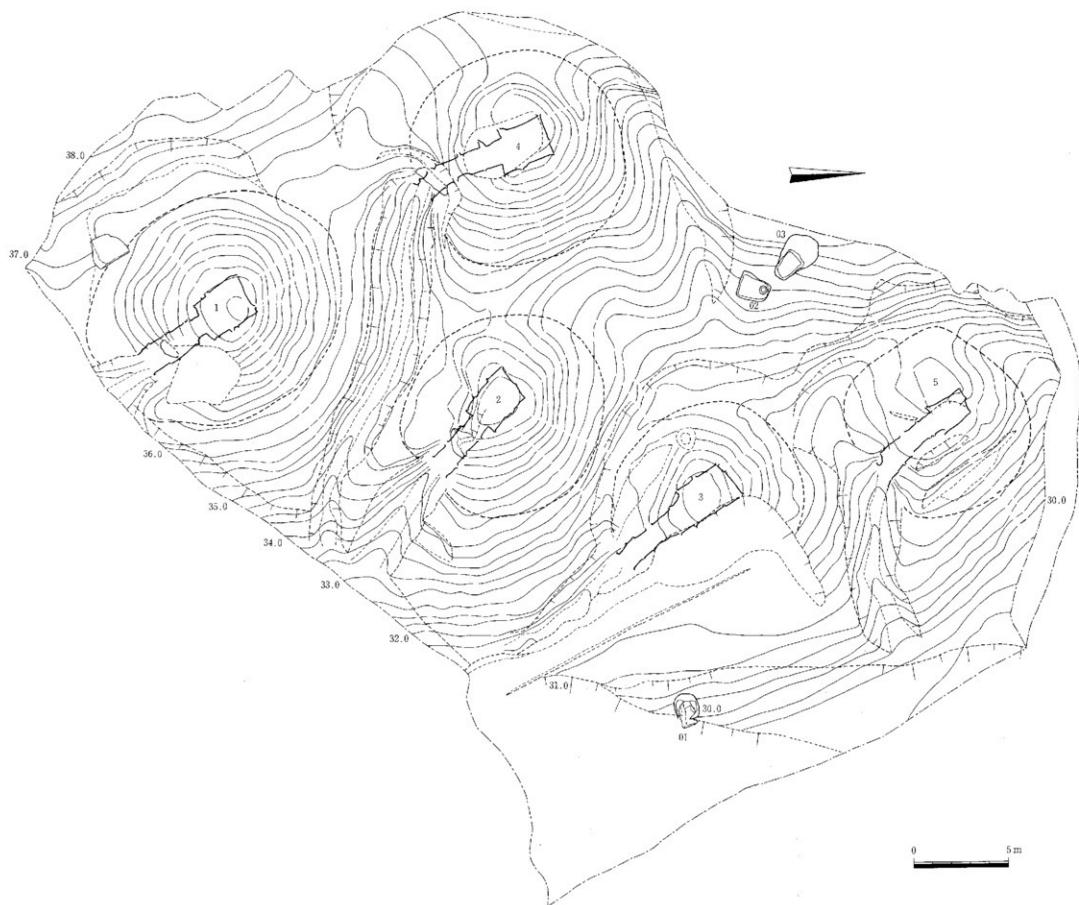
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第617集

1999

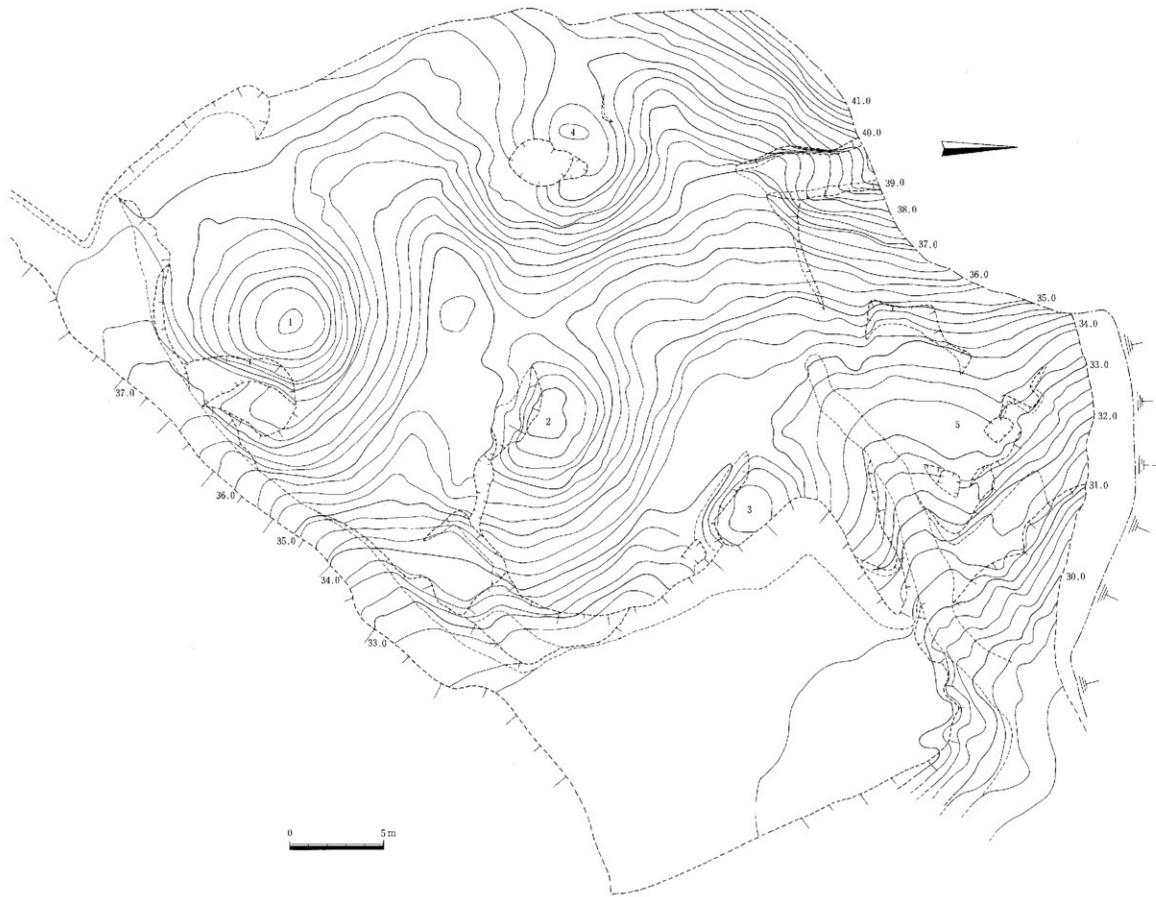


付図3 広石南群A群第1次調査地山整形測量図 (1/200)

0 5m



付図2 広石南群A群第1次調査墳丘測量図 (1/200)



付図1 広石南群A群第1次調査現況測量図 (1/200)